第３章　京都大学医学部構内 AO17 区の発掘調査

伊藤淳史

１　調査の概要

今回の調査地点は，医学部構内の北西部に位置している（図７，図版１-270）。ここに南部総合研究実験棟の新営が計画されたため，予定地全面の2028㎡を，1999年８月２日～12月７日にかけて発掘調査した。

これまで周辺一帯では，南に接する41地点で多数の土器溜や瓦溜がみつかっているのをはじめとして，中世の遺構と遺物が濃密に出土することが判明しており，今回も同様な成果が予想された。とくに143地点では，鉄製梵鐘の鋳造遺構がみつかり，周辺から鋳型や炉壁もまとまって出土しているため，今回は鋳造関連の遺跡のひろがりや遺物の存在にも十分留意して調査を進めた。

結果，旧医化学教室の基礎と管路による撹乱がかなりの範囲に及んでいたものの，深い掘り込みをともなう中世の井戸や土坑類はほぼ全域で遺存していたほか，削平を逃れた土器溜や集石も多数あり，あわせて整理箱183箱に及ぶ多量の遺物出土をみた。このなかには，大量の中世土師器と瓦類のほかに，多数の鉄滓や焼土塊も含まれている。土器編年や瓦の流通状況を検討するうえで良好な資料が得られるとともに，調査地一帯が，中世において，鋳造にかかわる作業も含めた活発な活動空間であったことがあらためて確認できた。

なお，発掘調査と出土遺物の整理は伊藤淳史と冨井眞が担当し，ほかに北尾敬子・管野類・上杉和央・小野健彦・鈴木敬寛・和喜美穂子が補助した。本章は，その結果にもとづき，冨井と北尾の協力を得て伊藤がまとめたものである。

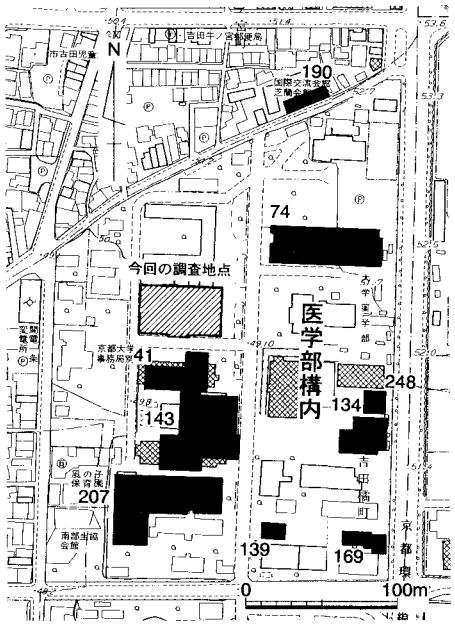


図７　調査地点の位置　縮尺1/5000

2　層　　位

調査区の現在の地表面は，おおむね51ｍ足らずでほぼ平坦である。しかし，近世以前の堆積層は全域で水平に堆積していないので，南北方向の層位を調査区西壁で，東西方向の層位をＸ＝1350のラインに沿い設定した土層観察用畔の北壁で，それぞれ呈示して説明する（図８・９）。なお，調査区東南隅では，これらと堆積状況が大きく異なる地点がみられた。路面状遺構なども含んで堆積が複雑であるので，後出の第４節中世遺構の報告において南壁の東半部の層位を呈示し，説明している（図13）。

上述した調査区東南隅を除いて共通する基本的な層序は，上から，表土・撹乱（第１層），赤褐色土（第２層），灰褐色土（第３層），黄灰色土（第４層），暗黄灰色土（第５層），茶褐色土（第６層），暗灰褐色土（第７層），暗黄灰色シルト（第８層），黄白色砂礫（第９層）である。このうち赤褐色土は，厚さ５㎝程度の堅く締まった層で，土師器の細片を交えている。表土直下に安定して存在しており，明治29（1896）年の医科大学設置時の整地層である可能性が高い。包含遺物からみて，近隣の中世層，それも茶褐色土が中心に利用されたのだろう。

灰褐色土は，近世後半期を中心とする時期の遺物包含層で，厚さ20～30㎝程度。西壁のＸ＝1358付近では北から南へ，東西畔のＹ＝1895付近と南壁のＹ＝1910付近では東から西へ，ともに20㎝あまりの比高差で下る段差が生じている。北から南および東から西へとゆるやかに下る扇状地末端の地勢を利用して，近世においては棚田や段々畑として利用されていたことがわかる。また，この段差付近では，それより下層の中世遺物包含層にも乱れが集中して生じており，暗黄赤灰色土（図８－ａ），淡赤褐色土（同ｂ），褐色砂質土（同ｃ），灰赤褐色土（９－ｄ），灰褐色砂質土（同ｅ）等の間層が介在している。砂や礫を交えて堅く締まった堆積が中心で，上面が路面として機能していた可能性もある。中世の土地境界が近世へと継続していった状況を明瞭に示す意義深い堆積状況である。

黄灰色土以下，暗灰褐色土までは中世の遺物包含層。黄灰色土は，厚さ30～40㎝をはかる。下端は鉄分の沈着の度合いが強くなって，色調が暗くかつ赤みを帯びるようになり，厚さ10㎝前後の暗黄灰色土を介して，厚さ20㎝ほどの茶褐色土へと漸移的に変化していく。その下の暗灰褐色土は，厚さ10～20㎝程度をはかるが，茶褐色土にみられるような鉄分の沈着がないほかは質を同じくしているので，同一層として取り扱っても差し支えないだろう。中世遺構の埋土の多くはこの暗灰褐色土である。遺物は，茶褐色土・暗灰褐色土

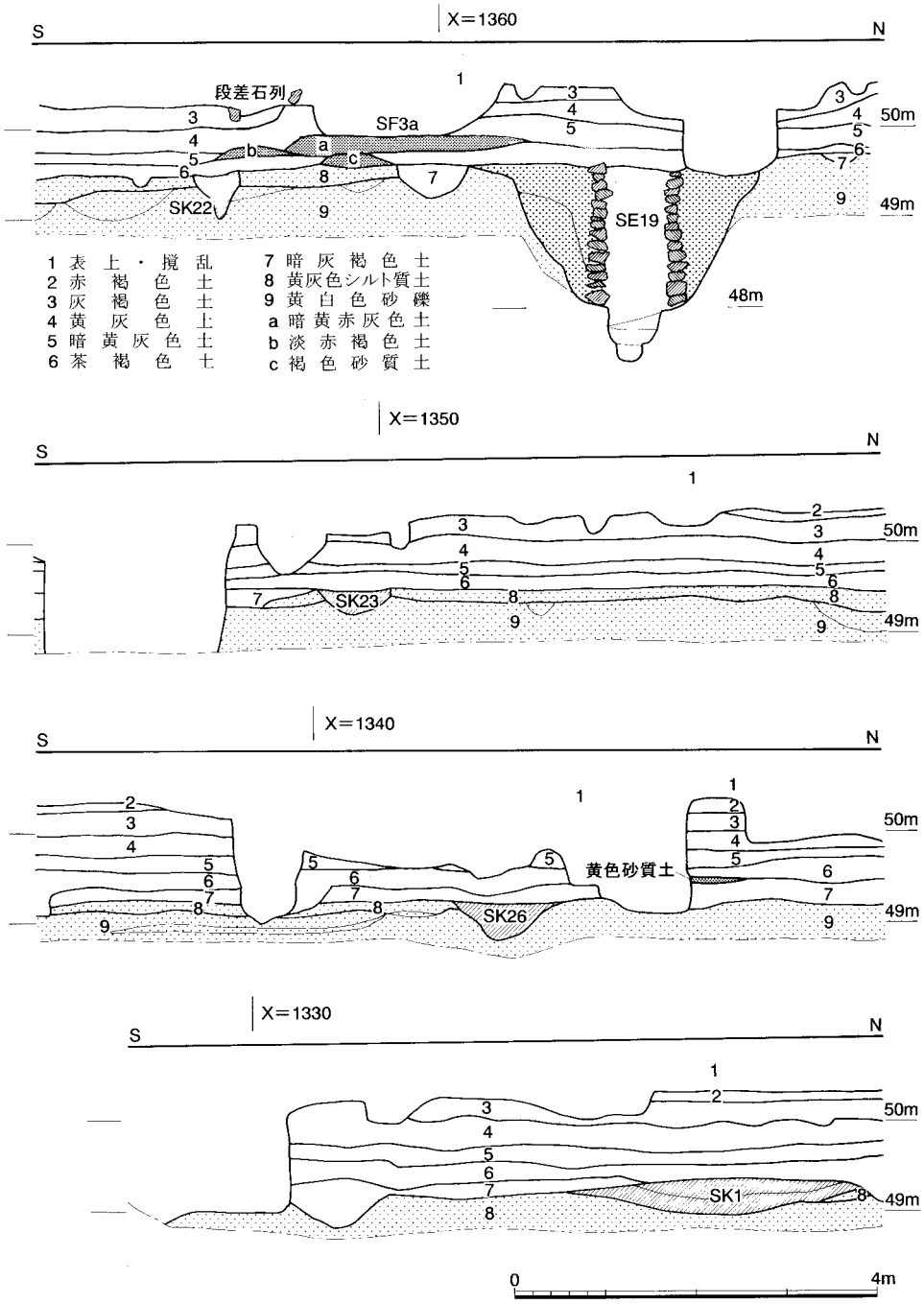


図 8　調査区西壁の層位　縮尺1/80

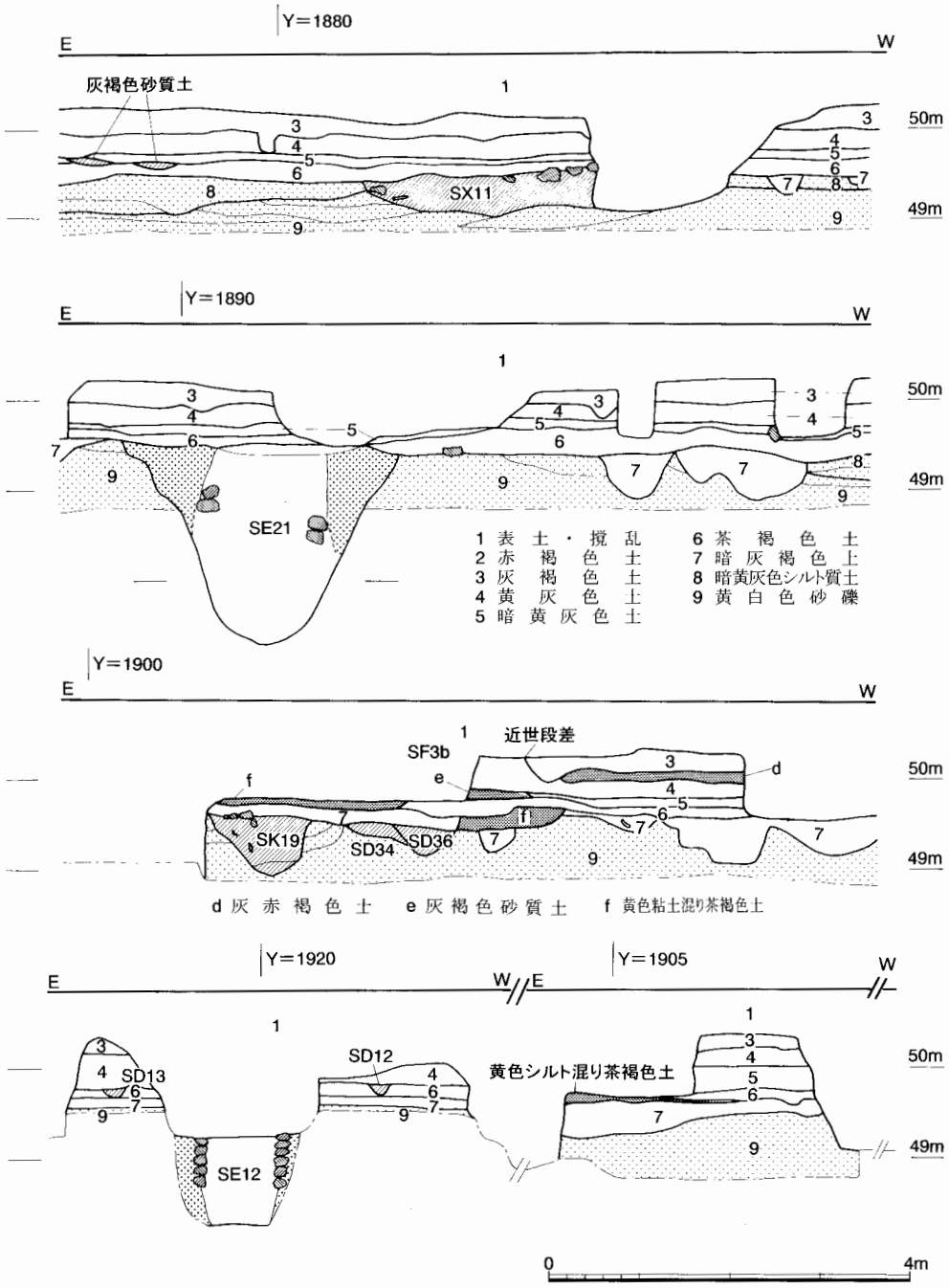


図 9　調査区東西畔（X＝1350）の層位　縮尺1/80

中には，13・14世紀代の土師器片を中心に大量に含まれるているほか，調査区西北の一帯では粉砕された焼土塊が層を成すように集中していた。一方，黄灰色土・暗黄灰色土は，包含遺物量は極端に少なく，13・14世紀代の土師器片を中心としながら，15・16世紀代に下るものも少量含まれる。これら暗灰褐色土から黄灰色土までの一連の堆積と包含遺物の様相からは，調査区一帯において，中世前半期に物質的にも豊富で多様な活動が展開され，中世後半期以降に耕地となっていった変化が，良くうかがわれる。鉄分の集積層の存在は，そうした耕地化の影響によるものだろう。

暗黄灰色シルト・黄白色砂礫は，以上に述べた中世遺跡の基盤となっているもので，ともに無遺物。黄白色砂礫には，白色や褐色の粗砂層や細砂層が間層として複数ともなっている。暗黄灰色シルトは，調査区西半を中心に砂礫層の上に堆積して安定した地面を形成しているもので，高野川系および白川系の流れに絶えず晒されていた調査区一帯が，古代末以降の遺跡形成に向けて安定していったことを示す堆積といえよう。

3　古代以前の遺跡

古代以前の調査区一帯は，現在は西方約400ｍを流れる高野川の流路域内にあったと考えられ，安定した活動が行い得たとは想定しがたいが，中世以降の遺構や包含層に混入する形で遺物がわずかに出土しており，ここで呈示しておく。

Ⅱ１は縄文後期粗製深鉢の口縁部片。角閃石を多く含む胎土で，暗茶褐色を呈する。Ⅱ２～Ⅱ６は弥生土器。Ⅱ２は前期の甕の口縁部で，端部を刻み，頸部に箆描直線文が４条まで確認できる。Ⅱ３・Ⅱ４は中期の壺の破片で，櫛描直線文や波状文が施される。Ⅱ５・Ⅱ６の底部は，中央がくぼむ特徴から後期だろう。Ⅱ７～Ⅱ10は古墳時代の遺物。Ⅱ７は円筒埴輪とみられる淡赤褐色の破片で，粗い縦位の刷毛調整ののちタガを貼り付けてヨコナデしている。Ⅱ８は須恵器杯蓋で，頂部付近から半ば近くまでを回転ヘラケズリする。Ⅱ９・Ⅱ10は短い立ち上がりを有する須恵器杯身。Ⅱ11～Ⅱ13は奈良～平安時代の遺物。Ⅱ11は特殊な須恵器蓋で，中心に宝珠つまみをもつと同時に，縁部に沿って高台を貼り付けている。反転してⅢとしての使用を企図したかのようであるが，つまみがあるため不可能である。Ⅱ12は小型の短頸壺の口縁部。Ⅱ13は軟質焼成の緑釉陶器底部で，削り出しによる高台をもち，全面淡緑色に施釉している。このほか，図示していないが，二彩陶器とみられる微小破片を採集している。

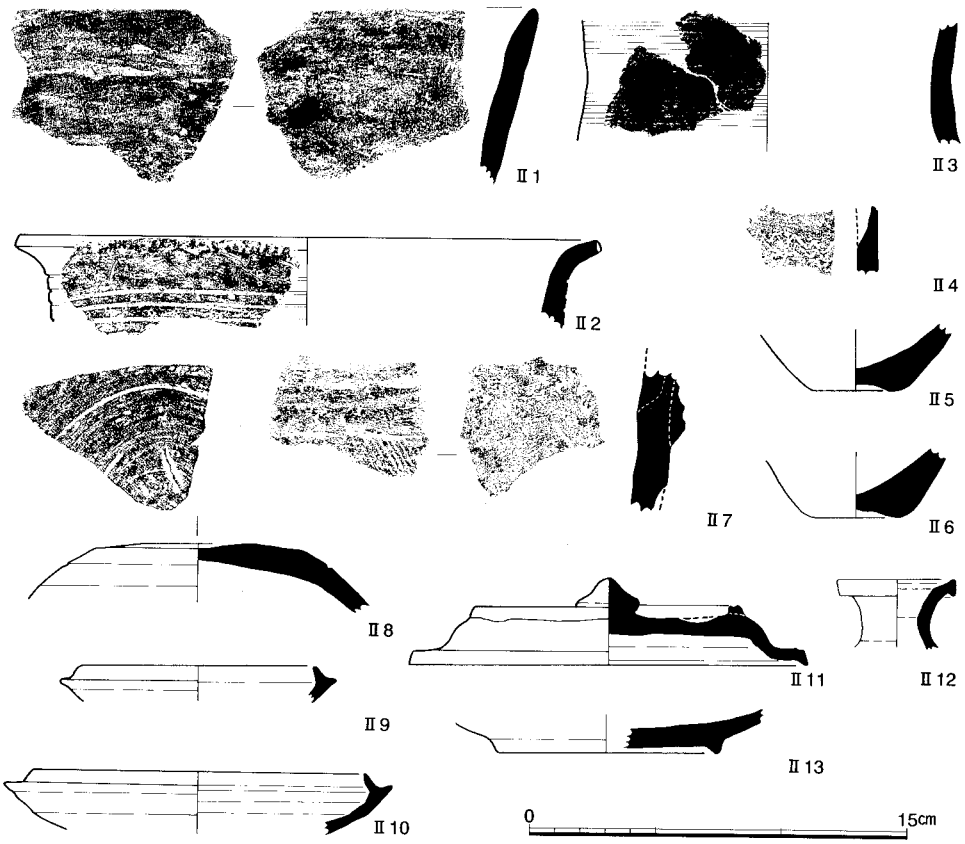


図10 古代以前の出土遺物（Ⅱ１縄文土器，Ⅱ２～Ⅱ６弥生土器，Ⅱ７円筒埴輪，Ⅱ８～Ⅱ12須恵器，Ⅱ13緑釉陶器） 縮尺1/3

4 中世の遺跡

(1) 遺　　構（図版４～８，図11～17，表２）

中世の遺跡は長期にわたるため，今回は，出土土師器の様相をもとに，Ⅰ期からⅣ期まで４段階に大別区分した。ここに概略を示すが，詳細は遺物の報告を参照されたい。

中世Ⅰ期：一段撫で手法のⅢ D_3・D_4・D_5類が中心で，二段撫で手法が少量残存する時期。13世紀前半。

中世Ⅱ期：一段撫で手法のⅢ D_6類とE_1類が中心で，灰白色の椀が少量組成する時期。13世紀後半。

中世Ⅲ期：一段撫で手法のⅢ E_3類が中心で灰白色の椀が組成する時期。14世紀前半。

中世Ⅳ期：一段撫で手法の皿F類が中心。おおむね14世紀後半以降近世まで。

以下，各段階ごとに主要な遺構を説明するが，多数ある井戸の特徴については，後にまとめてとりあげる。なお，中世Ⅰ期～Ⅲ期までの遺構は，基盤層の暗黄灰色シルトないし黄白色砂礫上面で検出し，中世Ⅳ期の遺構は茶褐色土の上面で検出したものである。

中世Ⅰ期の遺構　調査区の東北で井戸5基がまとまっているが，後の段階に比べると，総じて遺構は全域に散在する傾向がある。井戸以外には，土器溜・土坑・溝がある。

土器溜は，A：ほぼ土師器皿類のみが密集した状態で埋積しているもの，B：土師器以外や土砂も交えながら遺物がまとまっている状況のもの，に大別できる。Aの典型は南壁際でみつかったSX3で，明確な掘り込みは不明だが，3m四方あまりの範囲内に土師器皿類が密集し，南は調査区外へと続いている。この北側1mにあるSK6は，一辺60cmの隅丸方形の小土坑で，内部に土師器皿類がぎっしり詰まっている。皿類は，SX3ともども9割以上が小皿で占められており，互いに関連する遺構だろう。BにはSK4・19があり，径1m深さ50cm程度ですり鉢状に掘られた土坑内に，土師器を中心に各種の遺物や礫が埋積している。SK20も同種の遺構だが，礫の比率が高く集石状を呈する。下層には井戸SE23があり，井戸廃絶後の窪地を利用したものといえるが，出土遺物に型式差は認められない。Aは祭祀にともなう土器集積，Bは祭祀に限らずひろく塵芥処理のための廃棄土坑，とおおよそ性格づけることができよう。

土器溜以外の土坑には大小さまざまなものがある。このうち西壁際でみつかったSK26は，全形は不明だが，1m強の規模の大きさの掘り込みをもち，完形の土師器皿が複数出土している。また，調査区東北隅には，平面が2～3m程度の大きさの浅い不定形土坑が目立つ。この一帯に堆積する白色粗砂層を採取した遺構の可能性があろう。

調査区中央北辺のY＝1896付近には，互いに切り合いながら南北方向にはしる溝SD30・34～36が集中して検出された。上面を削平されているため本来的な規模は不明であるが，残存する範囲で幅・深さとも0.5～1m前後をはかる。出土遺物には型式差は認められないが，切り合い関係からSD34が最も先行するとみられる。ただし，同じⅠ期の遺構SE22・SK19に壊されていることを考慮すると，存続期間が短いものであった可能性が高い。また，南への延長は撹乱に破壊されているが，X＝1350付近で方向をおおきく東へ振り南東に向かうことが確認でき，このラインは，大学設置前まで存在した字境界にほぼ一致する。調査区一帯の近代の土地境界の源流が中世前半期まで遡及することを示唆する事例として重要である。

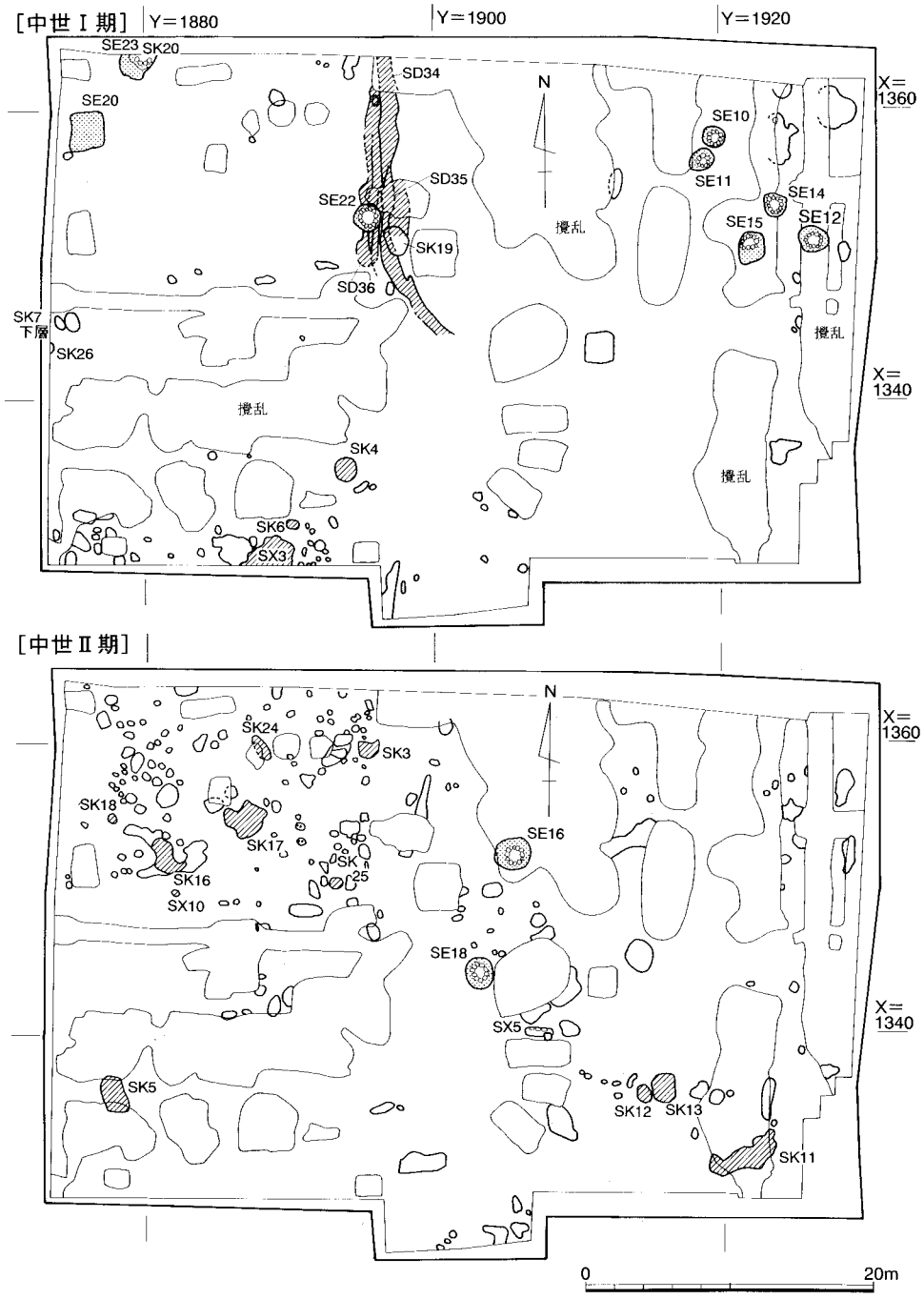


図11　中世の遺構（その１）　縮尺1/500

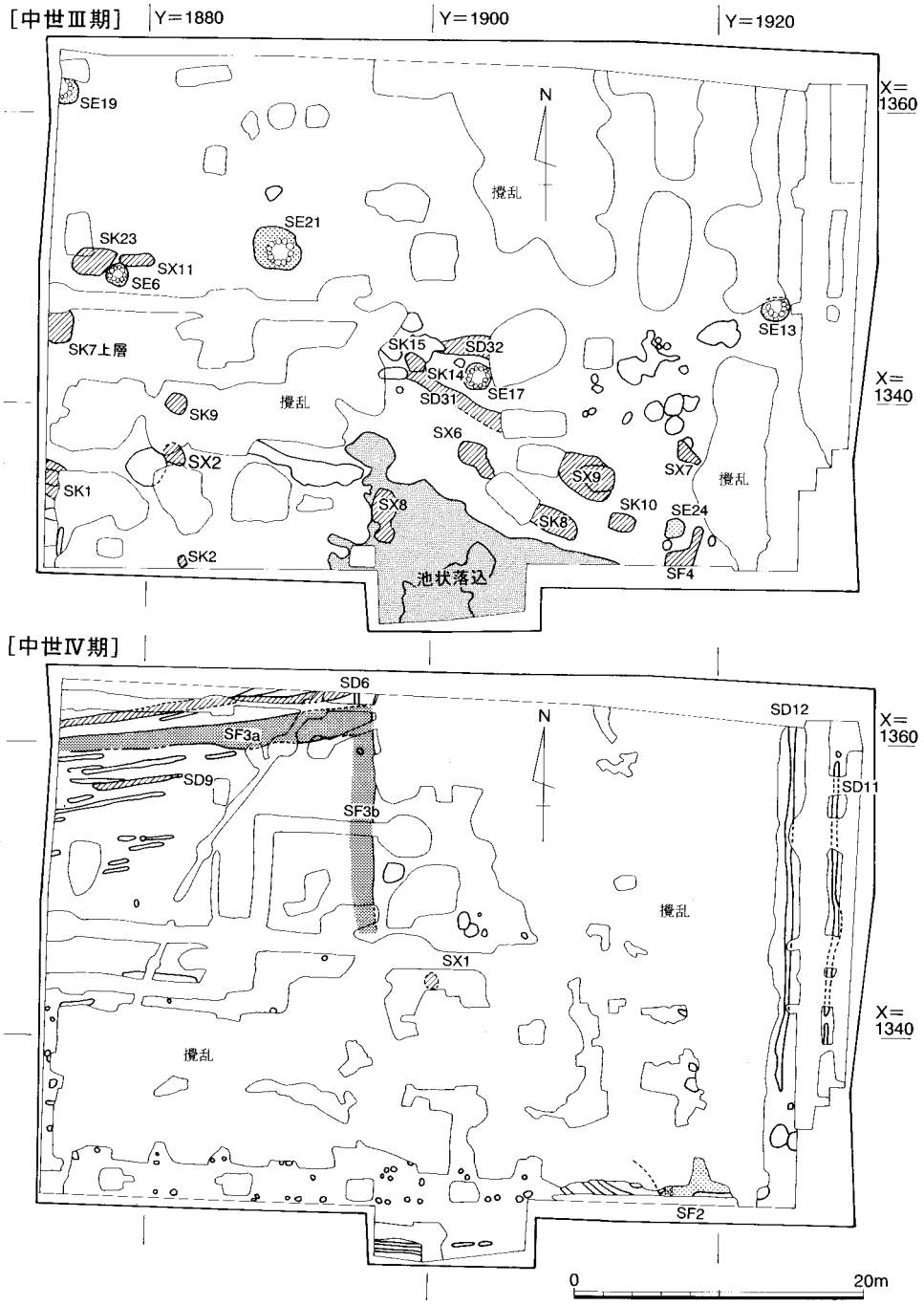


図12 中世の遺構（その２） 縮尺1/500

中世Ⅱ期の遺構　調査区西北の一帯に大小の各種土坑やピットが集中する。このなかには根石を据えた柱穴ピットも多数あるが，並びを復元出来ない。Ⅰ期にみたような大量の土師器集積はみられないが，小規模な土坑や茶褐色土中に完形品を含む少量の土師器がまとまって一括出土する地点は多数あり，SK18・24・25およびSX10はこうした遺構である。SK16・17はともに不定型な土坑で，16は瓦器羽釜の大破片等の遺物がまとまり，17には集石状に拳大～小児頭大の礫がまとまっていた。SK3は，一部を壊されているため本来の形状は不明だが，一辺1.5mあまりの隅丸方形の浅い窪み内に，最下層にもろい黒色砂質土，その上に黄色粘土がそれぞれ5～10㎝堆積し，上面に炭化物が若干認められた。西北部一帯では鉄滓や焼土塊がまとまって出土することから，こうした遺構が鋳造や鍛冶に関連する施設であった可能性がある。

西北部以外では，西南隅で方形の土坑SK5が，北東部に不定形土坑が若干があるほかは，調査区中央から南東方向にかけて帯状にまとまる傾向がみられる。これらの範囲の遺構は，ほとんどが上面を撹乱に削平されて，基盤の砂礫層中に掘り込まれた部分しか検出できていない。SK5は，一辺1mあまりをはかる隅丸方形の土坑で，砂礫層を30㎝あまり掘り込んでいる。井戸であった可能性がある。SX5は，南半を撹乱に破壊されているが，小児頭大の礫が方形に囲むかのように配された遺構。白磁皿や土師器の完形品が内部から出土しており，墓壙であった可能性がある。SK11は，調査区東南隅の砂礫層上面に，細かく割れた土師器皿片等を密に含む炭化物を交えた黒褐色土が，厚さ10㎝たらずで広範囲にひろがる土器溜。SK12は，径・深さ50㎝程度の円形土坑で，ほぼ完形に復元可能な瓦器盤が，破片でまとまって出土した。SK13は，SK12を壊して掘られた径80㎝深さ50㎝ほどの円形の土坑で，少量の土器類とともに黄褐色の粘土塊が出土した。これらは，本来はこうした粘土塊を貯蔵しておく土坑であったとも考えられる。

中世Ⅲ期の遺構　調査区中央から北半にかけて井戸が，南半に集石や土器溜をともなう不定形な土坑群がまとまっている。とくに中央のX＝1335付近から南方には，茶褐色や暗褐色の砂礫混じりの土層を埋土とする深さ30～50㎝程度の広い落ち込みがひろがっており，池状落込とした。集石にはSX2・6・8・9・11，SK23があり，それぞれ土師器も大量に包含する。このうちSE6の北側に接するSX11とSK23は，敷石状とすり鉢状を呈し，3者は関連する遺構の可能性がある。またSX2からは，白色で径2㎝程度の玉石状の石がまとまって出土している。土器溜にはSK2・7～10・15がある。うちSK8・10は楕円形の土坑内に土師器や礫がぎっしりと詰まった状態でみつかり，それ以外のものより

圧倒的に出土量が多い。SX7は小規模な瓦溜。西壁際のSK1は，浅い土坑内の底部に赤褐色の粘土を薄く敷いたかのような遺構。SK14は径・深さとも30cm程度のピット内下半に黄褐色，上半に暗茶褐色の粘土が詰まった遺構。SF4は，調査区東南隅壁際の一角で把握された礫を交えた黄褐色シルト質土のひろがり。周囲は撹乱ですべて削平されており遺構としてのつづき具合は不明。のちに字界として区画の溝や路面が集中して確認されていく地点にあることから，同様な性格の遺構と想定した。調査区中央付近に断片的に確認された溝SD31・SD32も，区画溝であった可能性が高い。

中世Ⅳ期の遺構　削平をまぬがれて茶褐色土上面が面的に遺構検出できた部分は多くないが，遺構密度と遺物出土量とも急減している。調査区西北部では西南西－東北東方向，東部では南北方向にはしる幅20cm程度の小溝が多数確認され，南部では径20cm程度の円形ピットが東西方向に列をなして確認できた。いずれも耕作にともなうものであろう。この段階は，一帯がほぼ完全に耕地化していたものととらえられる。

SF2・3は，礫や砂混じり層を中心としたひろがりで，路面の可能性があるが，いずれも安定したものではない。また，附属する側溝と認定できる遺構も確認できていないため，どの程度路面として機能したものかどうかはまったく不明であるけれども，何らかの境界を示すような異質な土層のひろがりとして，明確に把握される。調査区東南隅のSF2は，拳大の礫を交えた暗黄灰色土が堅く締まったもので，北西方向と東方へ広がりをみせるが，範囲は不明。SF3aは，わずかに堅く締まった暗黄赤褐色土のひろがりで，

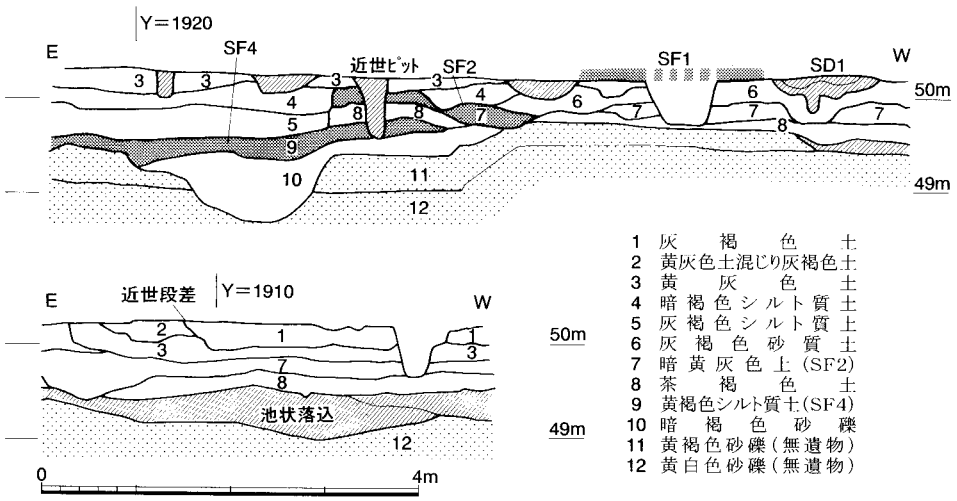


図13　調査区南壁東半の層位　縮尺1/80

周囲の小溝群と同方向にはしる。Y＝1895付近で，南北方向にはしる堅く締まった灰褐色砂質土のひろがりSF3bに吸収される。調査区中央付近に島状に残る包含層中にも，堅く締まった礫混じり層が局所的に残る部分があり（SX1），これらがSF2やSF3bと連続する路面状遺構の一部と考えると，おおむね後世の字界のラインと一致する位置にこうした遺構がはしることになる。またSF3aの位置は，字界にはなっていないが，近世遺構で確認されたの耕地区画のラインとほぼ一致している。

以上に述べた路面や境界にかかわる堆積を含んだ層序が良く現れている調査区南壁東半の状況をここに示す（図13）。近世の包含層である第1層の灰褐色土と中世末期の包含層である第3層の黄灰色土が，Y＝1910付近で東から西へ向かって段差をもって下り，その東方で第7層や第9層にみるような路面状の堆積が複雑に重なり合っている。SF1はその最上層に位置する近世の路面である。

中世の井戸　今回の調査では，中世の井戸と認定した遺構が16基を数える（表2）。なおSE1～SE5は近世の野壺，SE7～SE9は発掘の結果井戸ではないと判断した。

井戸の多くは平面円形の石組井筒であるが，SE18・20・24は，すり鉢状に大きく掘られているのみで石組は検出されなかった。これらは，掘り込みの大きさと深さから判断して井戸と認定している。埋土中より一定量の石材は出土していることから，崩落して放棄されたものか，石組みを抜き取られ放棄された可能性がある。そのほかの例も，石組の下段付近しか残っていないものが多いけれども，SE6は茶褐色土上面で検出可能で削平をあまり被っていないと想定され，底面までおよそ2.5mをはかる。

ここでは，石組みの残る13基のうち，壁際で検出され平面の全体が確認できなかったSE19・23を除く11基を図示する（図14～17）。崩落の危険から裏込めまで確認できていない井戸が多いが，共通して検討可能な最下部の構造は，以下の3類に大別される。

A類：最下段の石組から40cm程度をまっすぐ掘り抜くのみで，水溜としての特別な構造を確認できないもの（SE10～14）

B類：最下段の石組から50～60cmを，1～2段の階段状に掘りくぼめるもの（SE15・16・21・22）

C類：最下段の石組みから80cm～1mを，2～3段の階段状に深く掘りくぼめるもの（SE6・17）。石組の下部を方形に枠板留めし，最下部に曲物などによる水溜を設けていたと想定され，四隅からの釘の出土や圧痕が存在する。

壁面で断面のみ確認したSE19・23はB類の特徴をもつ。B類はC類にみるような枠板

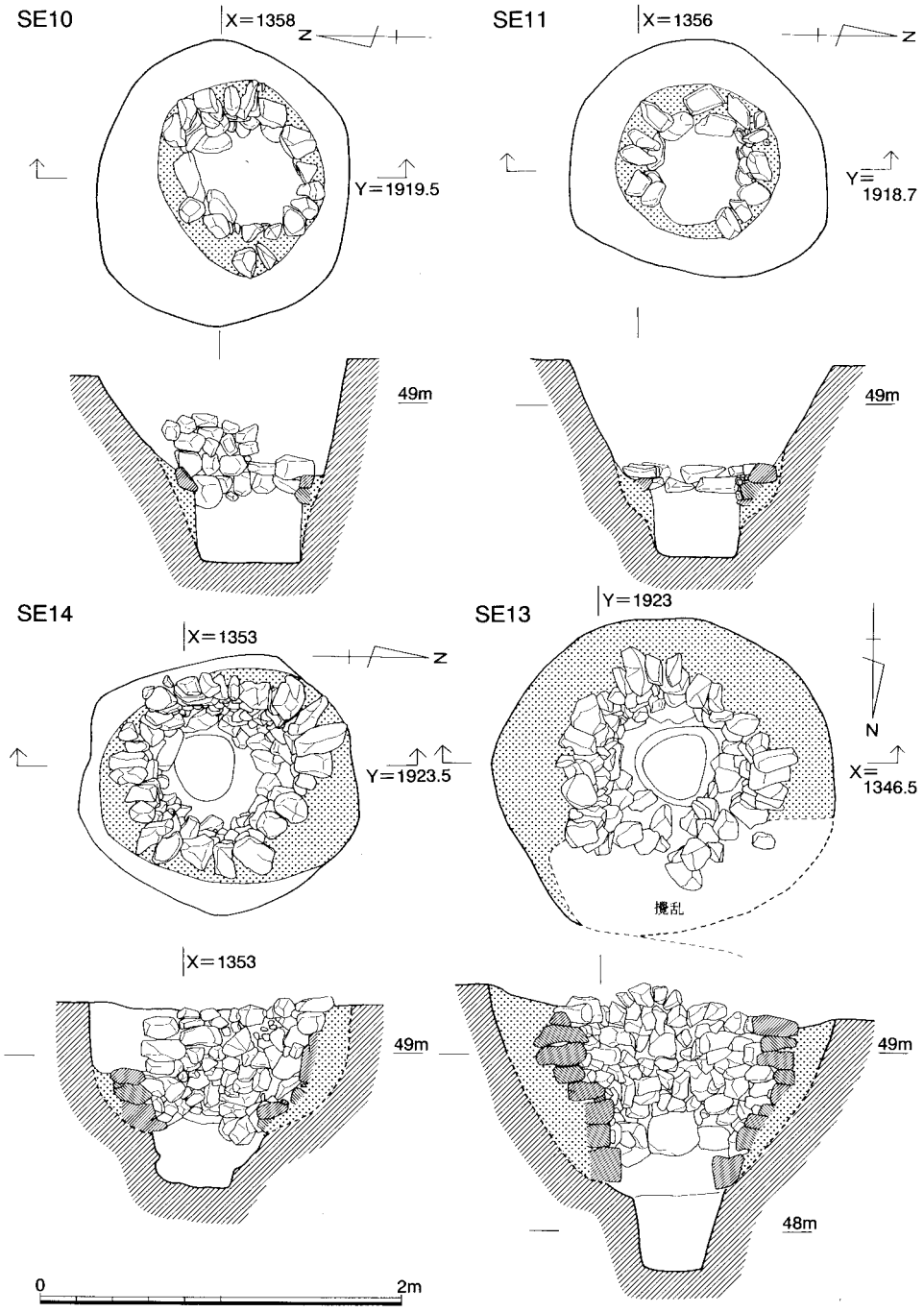


図14 中世の井戸（その１） 縮尺1/40

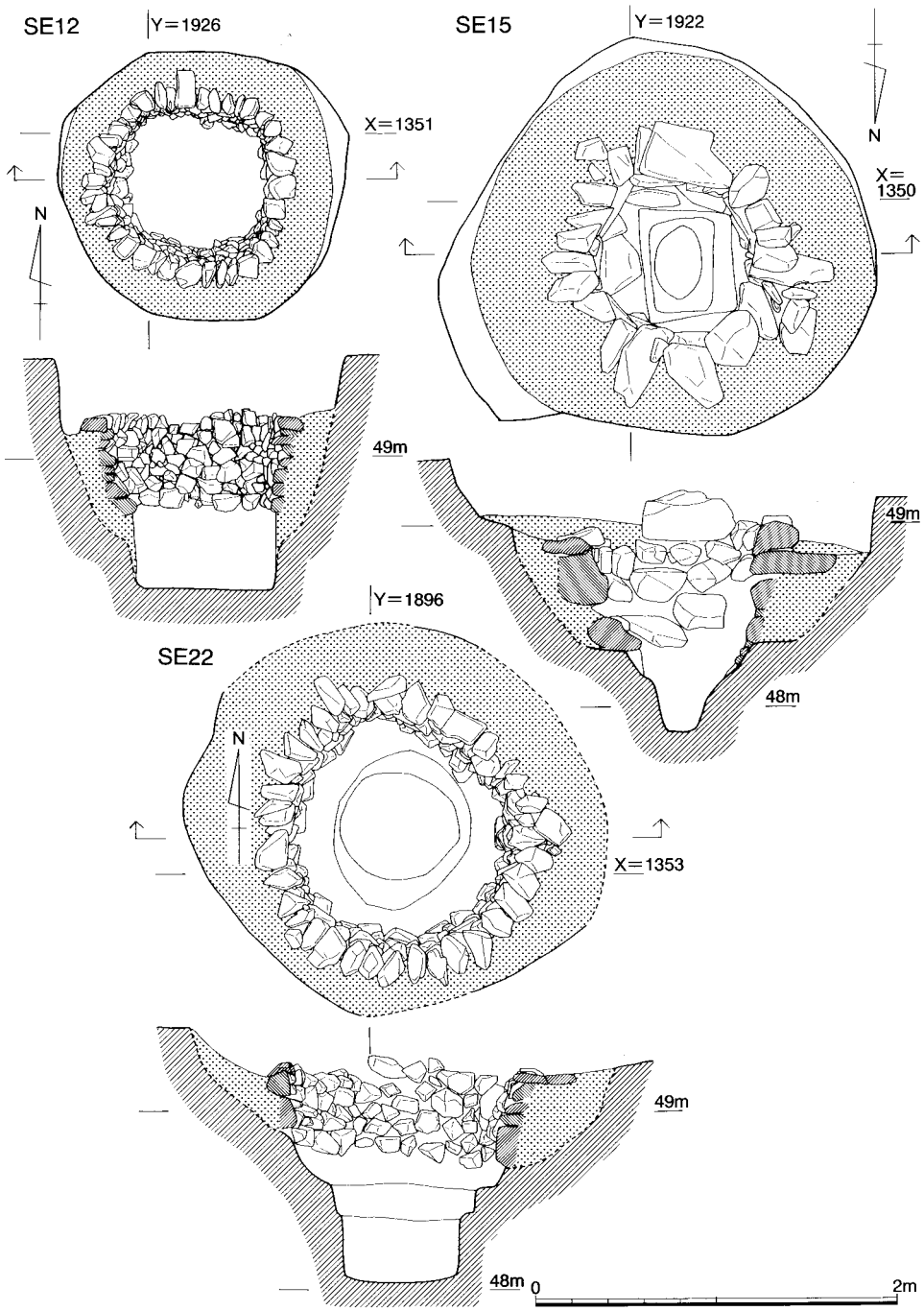


図15　中世の井戸（その２）　縮尺1/40

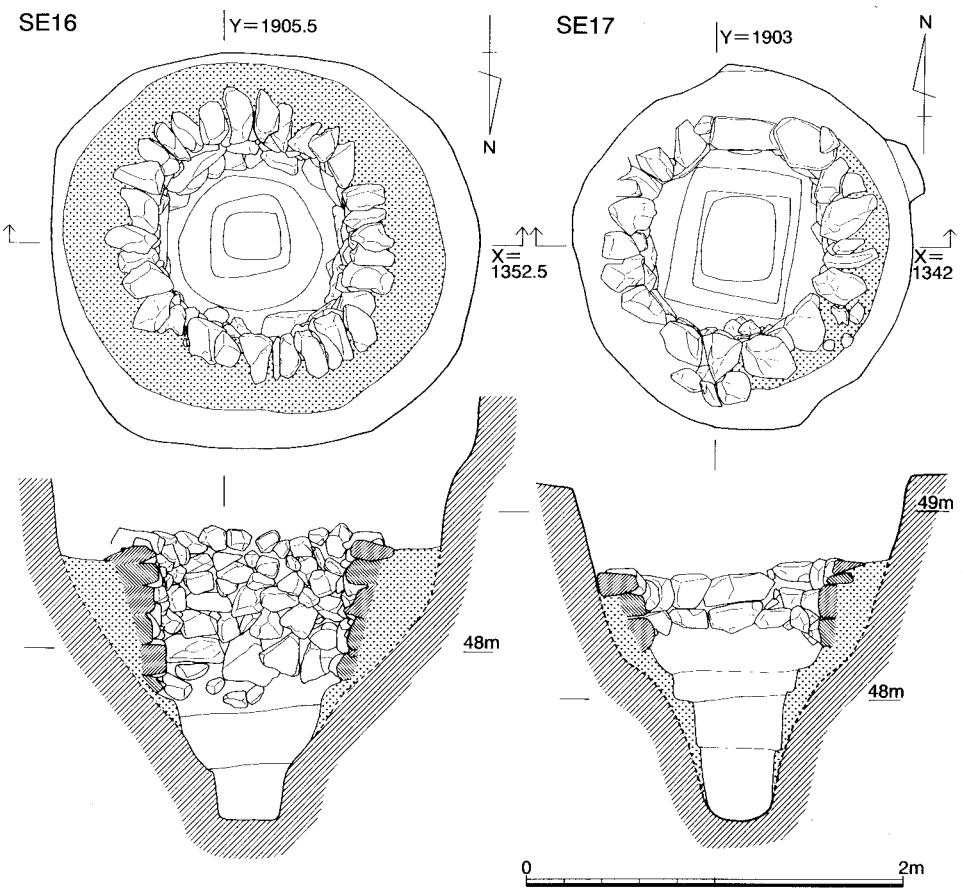


図16 中世の井戸（その３） 縮尺1/40

などの痕跡はないが，最下部の形状から曲物等を設置していた可能性はある。以上の類別の帰属時期をみると，Ａ類は，SE13を除きすべて中世Ⅰ期。Ｂ類は中世Ⅰ～Ⅲ期が混在し，Ｃ類はいずれも中世Ⅲ期となる。したがって，本調査区では，おおむね13～15世紀において，時期が下るほど下部構造を堅固に設ける井戸が増加するといってよい。

また，井戸底の海抜標高では，中世Ⅰ期のもの８基が47.76m～48.26m（平均48.04m），同Ⅱ期の２基が47.10m・47.62m（平均47.36m），同Ⅲ期の６基が47.04m～48.0m（平均47.46m），となり，おおむね時期を追って低くなる傾向をうかがうことができる。こうした傾向は南側の41地点でも指摘されており，中世を通じて地下水位が徐々に低下していったことは間違いない。上に述べたような下部構造の変化の傾向は，地下水位の低下を反映して，湧水を溜める装置の必要性が強まったことを表していると解釈できる

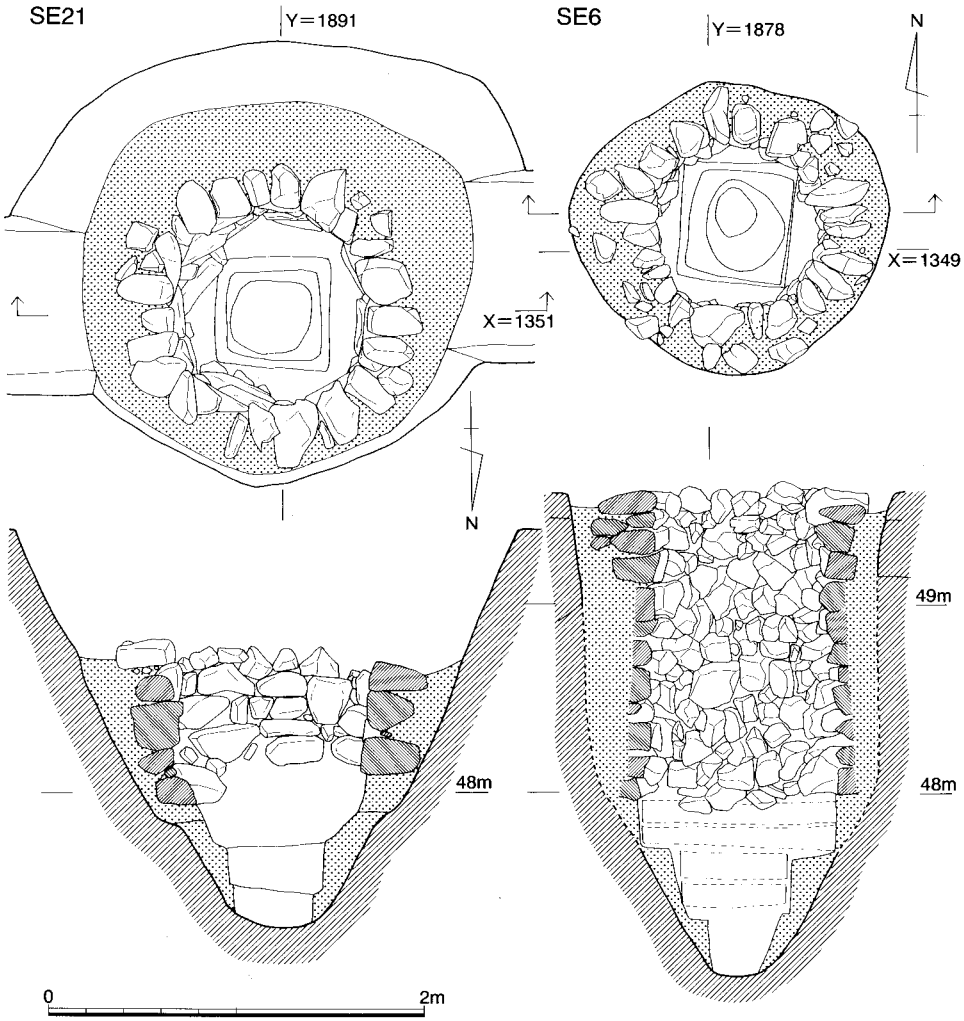


図17 中世の井戸（その４） 縮尺1/40

一方で，飲料用と農耕用といった機能の違い，ひいては一帯の土地利用形態の変化を反映している可能性も残される。今後周辺調査区の井戸データを精査し，あらためて結論づけたい。

(2) 遺　　物（図版９～13，図18～26，表３～７）

報告の方針　主要な遺構からの出土遺物のうち，代表的なものを選択し，設定した各段階ごとに呈示する。出土量の多い遺構については，口縁部計測法（残存率1/12以上）によってもとめた個体数と種類別の比率，および土師器椀皿類の口縁部法量分布，口縁部形

表2　中世井戸一覧表

遺構名	掘形規模	構　造	井筒規模	底面高	時期	類型	備　考
SE 6	1.69m	円筒形石組＋横板＋曲物？	0.9m	47.04m	Ⅲ新	C	
SE10	1.4m	円筒形石組＋不明	0.6m	48.12m	Ⅰ古	A	下部のみ残
SE11	1.4m	円筒形石組	0.5m	48.12m	Ⅰ古	A	下部のみ残
SE12	1.5m	隅丸方形石組＋	0.7m	48.25m	Ⅰ	A	
SE13	1.9m	円形すり鉢状石組＋	0.9m	47.78m	Ⅲ新	A	
SE14	1.5m	円筒形石組＋	0.8m	48.26m	Ⅰ古	A	
SE15	2.4m	円筒形石組＋	0.8m	47.76m	Ⅰ新	B	
SE16	2.1m	円筒形石組	1.1m	47.10m	Ⅱ古	B	
SE17	1.9m	円筒形石組	1.0m	47.25m	Ⅲ新	C	
SE18	2.2m	素堀（本来石組？）	不明	47.62m	Ⅱ新		石組抜き取り後か
SE19	1.5m	円筒形石組＋	0.7m	47.40m	Ⅲ古		断面のみ
SE20	1.3m	素堀（本来石組？）	不明	47.9m	Ⅰ古		石組み抜き取り後か
SE21	2.1m	円筒形石組＋	1.0m	47.29m	Ⅲ新	B	
SE22	2.2m	円筒形石組	1.3m	48.10m	Ⅰ新	B	
SE23	2.6m	円筒形石組＋	0.8m	47.8m	Ⅰ新		断面のみ・上面土器溜
SE24	1.8m	素堀（本来石組？）	0.7m	48.0m	Ⅲ古		石組み抜き取り後か

態の種類別比率を示した。ただし，口縁端部形態の分類は，赤褐色を呈するⅢ類のみに適用し，明らかに技術系譜の異なる灰白色を呈する椀類については適用していない点，従来と異なる。なお，SE6を中心にまとまって出土した瓦類は，次節でまとめて報告する。

中世Ⅰ期の遺物（表3，Ⅱ14～Ⅱ134）　土師器では，灰白色を呈する椀類は存在せず，赤褐色を呈するⅢ類の口縁端部形態のうち，一段撫で手法のD_5類（Ⅱ27・Ⅱ29・Ⅱ32・Ⅱ40・Ⅱ42・Ⅱ46・Ⅱ56・Ⅱ74・Ⅱ79・Ⅱ84・Ⅱ85・Ⅱ88・Ⅱ89・Ⅱ95・Ⅱ96・Ⅱ99・Ⅱ103・Ⅱ110・Ⅱ116・Ⅱ117・Ⅱ119・Ⅱ120・Ⅱ124・Ⅱ126），D_3類（Ⅱ18・Ⅱ26・Ⅱ38・Ⅱ44・Ⅱ55・Ⅱ58・Ⅱ73・Ⅱ93・Ⅱ98・Ⅱ123）およびD_4類（Ⅱ15・Ⅱ39・Ⅱ41・Ⅱ45・Ⅱ94・Ⅱ102）が主体となる段階である。D_6類も少量あるが（Ⅱ33・Ⅱ47・Ⅱ100・Ⅱ101・Ⅱ111・Ⅱ115），E_1類はごくわずかである（Ⅱ80・Ⅱ125）。先行する時期の技法である二段撫で手法では，C_3類（Ⅱ14・Ⅱ16・Ⅱ24・Ⅱ37・Ⅱ43・Ⅱ53・Ⅱ54・Ⅱ57・Ⅱ66・Ⅱ68～Ⅱ72・Ⅱ75・Ⅱ97）とC_5類（Ⅱ17・Ⅱ28・Ⅱ76）とがみられるが，遺構により比率が異なっており，SK4やSE10・14で目立ち，SK20ではほとんどない，といった違いがある。また，法量の傾向をSK4・6・19・20・SX3出土土器の計測結果でみると，小Ⅲ（AⅡ）と大Ⅲ（AⅠ）それぞれについて，SK4のみが10cmと14・15cmに，それ以外では9cmと13・14cmにまとまりをみせる。なお，少量だが安定して組成している受Ⅲは，おおむね小Ⅲと法量の傾向を同じくしている（Ⅱ30・Ⅱ50・Ⅱ51・Ⅱ67・Ⅱ77・

Ⅱ81・Ⅱ86・Ⅱ104・Ⅱ105・Ⅱ121・Ⅱ128・Ⅱ129)。

以上の結果は，Ⅰ期の資料群が時間的に幅を持つ可能性を示しており，計測資料のなかでは明らかにSK4が古相として区別できる。非計測資料のなかでもSE10・14・20・SK26が同様な特徴をもつ。それら以外を新相とすると，SK20は，二段撫で手法をほとんど含まず，灰白色を呈する受皿（Ⅱ128）が含まれるなど，なかでも後出の様相を示す。中世都市京都の現行の編年観〔小森・上村1996〕ではそれぞれⅥ期古段階と中段階がほぼ該当する。実年代では13世紀前半代とみておいて大過ないであろう。

上記以外に特徴的な遺物をまとめて説明しておく。Ⅱ21・Ⅱ22・

表3　SK4・SK6・SK19・SX3 出土土器計測結果

SK 4	17.04個体
土師器	97.1%
瓦器（椀）	1.7%
輸入陶磁各種	1.2%
合　計	100.0%

土師器	ⅢAⅡ	ⅢAⅠ
口　縁	12.42	4.13(個体)
C_3類	13.4%	24.2%
C_5類	1.0%	37.4%
D_3類	7.4%	16.2%
D_4類	71.5%	22.2%
D_5類	2.0%	0.0%
D_6類	4.7%	0.0%
合　計	100.0%	100.0%

SK 6	121.92個体
土師器	99.2%
瓦器（鍋釜盤）	0.8%
合　計	100.0%

土師器	ⅢAⅡ	ⅢAⅠ
口　縁	113.96	6.96(個体)
C_3類	11.3%	41.3%
C_5類	1.1%	14.4%
D_3類	25.6%	17.4%
D_4類	6.0%	13.8%
D_5類	53.1%	13.2%
受皿(赤)	2.9%	0.0%
合　計	100.0%	100.0%

SK19	24.46個体
土師器	95.7%
瓦器（椀）	2.7%
瓦器（鍋釜盤）	0.7%
灰釉系（椀）	0.4%
輸入陶磁各種	0.5%
合　計	100.0%

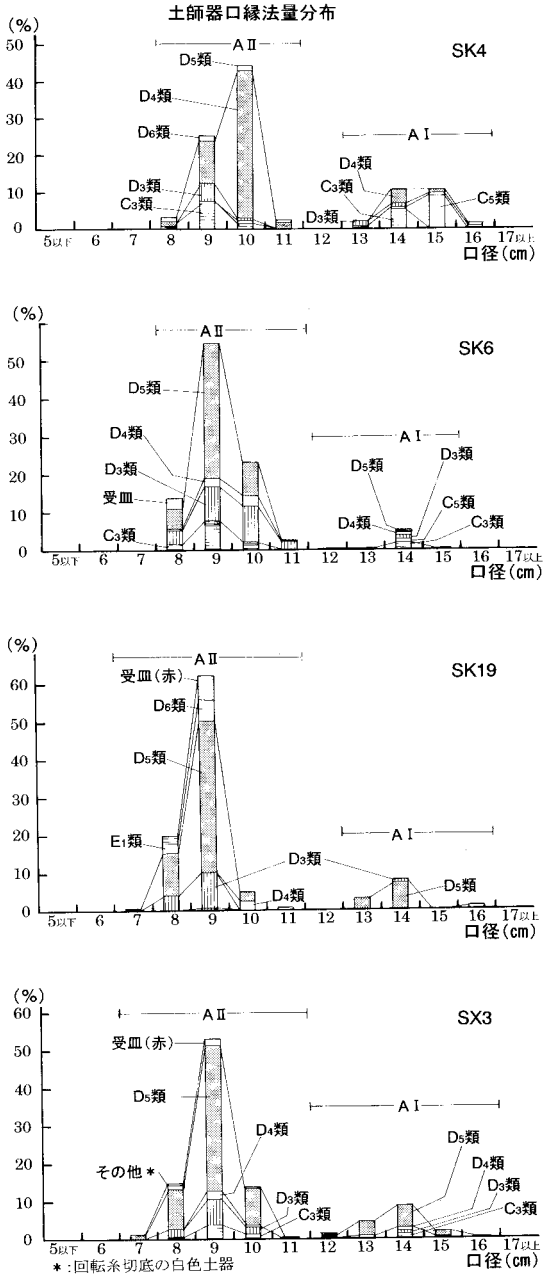
土師器	ⅢAⅡ	ⅢAⅠ
口　縁	20.67	2.75(個体)
C_3類	0.8%	0.0%
D_3類	15.3%	6.1%
D_4類	2.8%	0.0%
D_5類	61.7%	93.9%
D_6類	6.9%	0.0%
E_1類	2.8%	0.0%
受皿(赤)	9.7%	0.0%
合　計	100.0%	100.0%

SX 3	325.42個体
土師器	99.4%
瓦器（椀皿）	0.4%
東播系（甕）	0.1%
輸入陶磁各種	0.1%
合　計	100.0%

土師器	ⅢAⅡ	ⅢAⅠ
口　縁	269.46	53.88(個体)
C_3類	7.2%	9.6%
C_4類	0.0%	0.3%
C_5類	0.2%	0.0%
D_3類	13.1%	10.4%
D_4類	3.6%	6.4%
D_5類	71.4%	71.8%
D_6類	0.0%	1.4%
受皿(赤)	3.9%	0.0%
受皿(白)	0.4%	0.0%
その他＊	0.3%	0.0%
合　計	100.0%	100.0%

表 3　つづき

土師器口縁法量分布



Ⅱ106は回転糸切痕を残す底部，Ⅱ48は外面を軽く面取りした高杯の脚部。これらは，灰白色を呈する土師器で，白色土器と呼ばれている。Ⅱ49は底部に粗い箆起こし痕を残す土師器皿で，黄白色を呈する。京都以外の製品だろう。Ⅱ36は黄釉陶器の盤で，内面のみ施釉して見込みに茶褐色の彩文を描く。Ⅱ59は中央が窪む皿形土師器で，器壁は厚い。底部側の剝離痕からみて高杯の杯部かとみられるが，内面に薄く煤が付着する。Ⅱ63・Ⅱ64は同一個体の可能性がある白磁皿の口縁部と底部。内面に刺突による細かな鱗状文様がみられる。Ⅱ83は径2㎝の円盤形石製品。暗赤褐色の石材を全面丁寧に研磨して仕上げている。碁石であろうか。Ⅱ87・Ⅱ91は産地不明の陶器。ともに外面に叩き痕が残り，底部Ⅱ87の外面はかなり粗い仕上げである。ほぼ完形に復元可能な壺Ⅱ91は焼成がかなり甘く，表面が磨滅する。Ⅱ78・Ⅱ109は同安窯系の青磁椀。Ⅱ112は土師器の鍔付釜。摂津型とみられる。盛行期は平安後期であるため，混入の可能性もあるが，磨滅していない。Ⅱ114は須恵器大型甕の口縁。端部を強く横撫でしてわずかにつまみ上げるように仕上げ

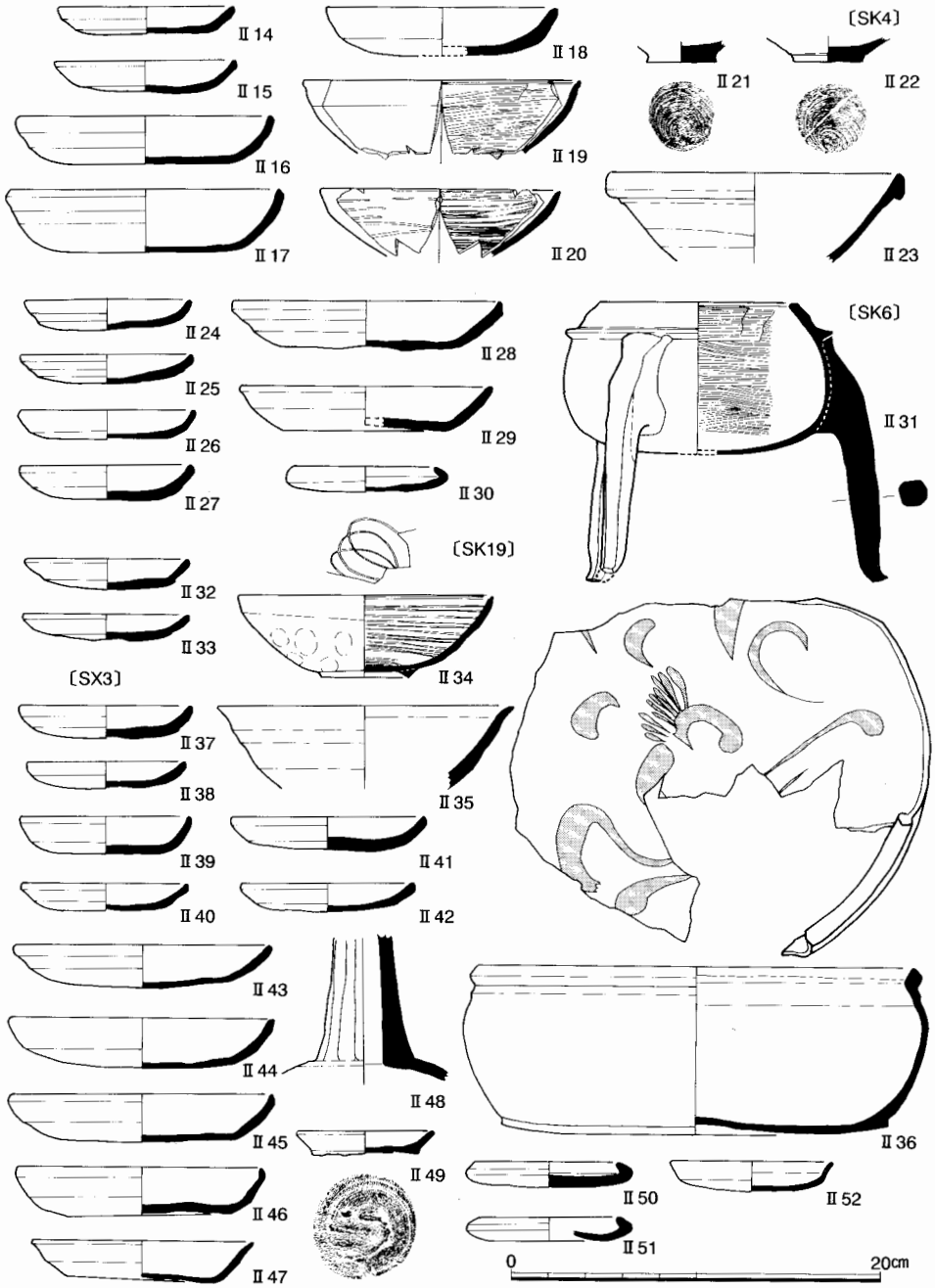


図18 SK4 出土遺物（Ⅱ14～Ⅱ18土師器，Ⅱ19・Ⅱ20瓦器，Ⅱ21・Ⅱ22白色土器，Ⅱ23白磁），SK6 出土遺物（Ⅱ24～Ⅱ30土師器，Ⅱ31瓦器），SK19 出土遺物（Ⅱ32・Ⅱ33土師器，Ⅱ34瓦器，Ⅱ35灰釉系陶器，Ⅱ36黄釉陶器），SX3 出土遺物（Ⅱ37～Ⅱ51土師器，Ⅱ52瓦器）

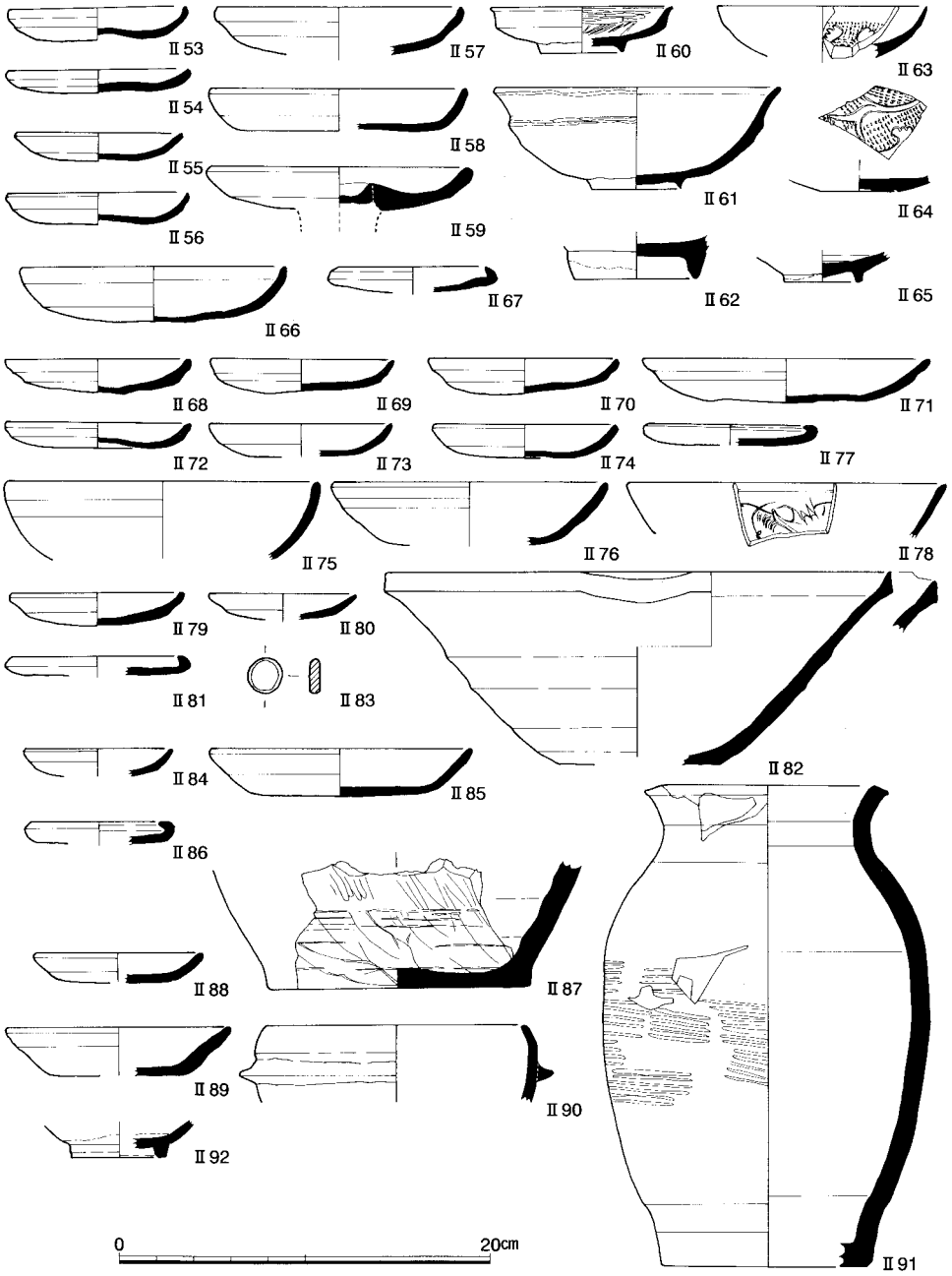


図19 SE10出土遺物（Ⅱ53～Ⅱ59土師器，Ⅱ60・Ⅱ61瓦器，Ⅱ62～Ⅱ65白磁），SE11出土遺物（Ⅱ66土師器），SE12出土遺物（Ⅱ67土師器），SE14出土遺物（Ⅱ68～Ⅱ71土師器），SE20出土遺物（Ⅱ72～Ⅱ77，Ⅱ78青磁），SE15出土遺物（Ⅱ79～Ⅱ81土師器，Ⅱ82須恵器，Ⅱ83石製品），SE22出土遺物（Ⅱ84～Ⅱ86土師器，Ⅱ87陶器），SE23出土遺物（Ⅱ88～Ⅱ90土師器，Ⅱ91陶器，Ⅱ92白磁）

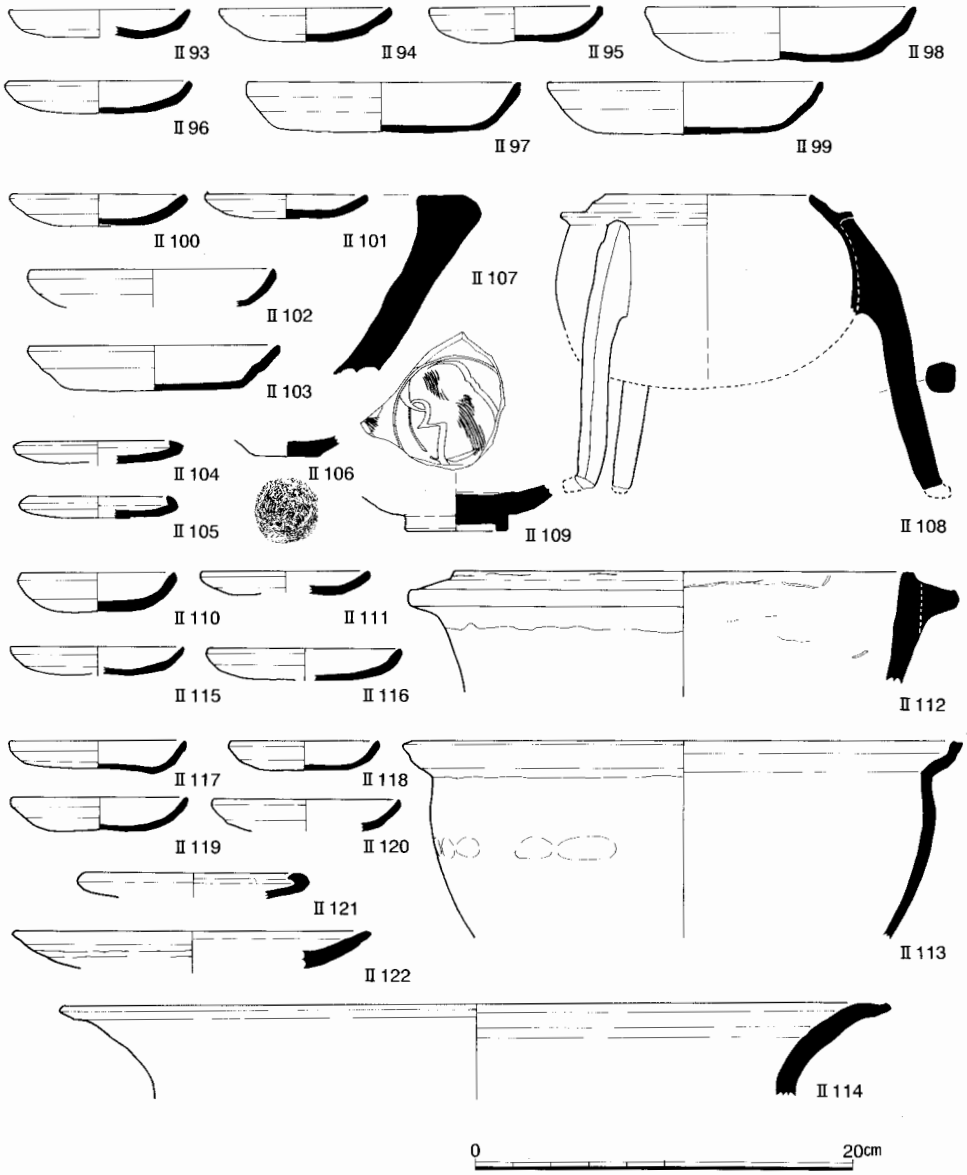


図20 SK26 出土遺物（Ⅱ93～Ⅱ99土師器），SD30 出土遺物（Ⅱ100～Ⅱ105土師器，Ⅱ106白色土器，Ⅱ107・Ⅱ108瓦器，Ⅱ109青磁），SD34 出土遺物（Ⅱ110～Ⅱ112土師器，Ⅱ113瓦器，Ⅱ114須恵器），SD35 出土遺物（Ⅱ115・Ⅱ116土師器），SD36 出土遺物（Ⅱ117～Ⅱ122土師器）

る。Ⅱ122・Ⅱ127は土師器の大形の皿。後に「オオヤツカサ土器」と呼ばれるものの祖形であろうか。Ⅱ130は土師器の鍋形土器で，厚手で粘土紐積み上げ痕や指頭圧痕を残しながら撫でて仕上げられる。外面全面に煤が付着する。Ⅱ132は龍泉窯系青磁の椀。Ⅱ133は，大形の須恵器甕の破片を転用した硯とみられ，内面側の叩き当て具痕やカキ目が磨滅して平滑になるとともに，墨が付着する。なおSD36からは，北宋銭の治平元宝（1064年初鋳）が1点出土した。

中世Ⅱ期の遺物（表4，Ⅱ135～Ⅱ244）　土師器では，灰白色を呈する大小の椀類が，少量だが安定して組成するようになる（Ⅱ138・Ⅱ139・Ⅱ151～Ⅱ153・Ⅱ170・Ⅱ171・Ⅱ188・Ⅱ202～Ⅱ205・Ⅱ215・Ⅱ222・Ⅱ230・Ⅱ231・Ⅱ240～Ⅱ242)。これらは，後の時期に増加するものと比べて器壁が厚い。赤褐色を呈する皿では，一段撫で手法のD_6類（Ⅱ135・Ⅱ137・Ⅱ145・Ⅱ148・Ⅱ190・Ⅱ191・Ⅱ212・Ⅱ219・Ⅱ221・Ⅱ227・Ⅱ236)，E_1類（Ⅱ136・Ⅱ146・Ⅱ149・Ⅱ164・Ⅱ165・Ⅱ169・Ⅱ184～Ⅱ187・Ⅱ192・Ⅱ194～Ⅱ196・Ⅱ200・Ⅱ213・Ⅱ214・Ⅱ220・Ⅱ228・Ⅱ229・Ⅱ235・Ⅱ237）が主体となる段階で，E_2類（Ⅱ147・Ⅱ166・Ⅱ197・Ⅱ201）やE_3類（Ⅱ193)，D_5類（Ⅱ238）がわずかにみられる。法量の傾向をSK11・16出土土器の計測結果でみると，ⅢAⅡが8・9㎝，ⅢAⅠが12・13㎝に，灰白色の椀は7㎝と13㎝にまとまりをみせる。受皿は，ほとんどが灰白色の製品になり，小型化が著しい（Ⅱ140・Ⅱ154・Ⅱ184・Ⅱ172・Ⅱ173)。

以上のうち，小型の椀に関しては，遺構によって内容に違いがあり，凹み底小椀に近い特徴をもつ器形が含まれるSX10・SK17・24（Ⅱ203～Ⅱ205，Ⅱ230，Ⅱ240・Ⅱ241)，そうしたものをまったく含まないSK11・16，といった区別が可能である。Ⅱ期の資料群のもつ時間幅を反映しているとみられる。中世都市京都の編年ではⅥ期新段階とⅦ期古段階がほぼ該当し，実年代では13世紀後半代とみられる。

上記以外に特徴的な遺物をまとめて説明する。土師器では，Ⅱ150・Ⅱ167が特大の皿。Ⅱ155は灰白色を呈する耳皿。Ⅱ156・Ⅱ223が大型の土釜で，Ⅱ174・Ⅱ206がミニチュアの羽釜。後者は淡い黄白色を呈する。Ⅱ207は高杯脚部，Ⅱ216は貼付高台をもつ底部で，高台内側は回転ヘラ削り調整。これらも灰白色を呈する。Ⅱ175は口縁が「く」字に外折する鉢形の器形で，内面は横位の刷毛，外面は粗く縦位の撫で調整。器壁は厚い。使用の痕跡はとくにみられない。Ⅱ226は焼成後の円形穿孔がある土師器皿の破片。瓦器では，各種の器形が揃っており，Ⅱ141・Ⅱ157・Ⅱ198・Ⅱ232が椀，Ⅱ142が受皿，Ⅱ243が皿，Ⅱ158・Ⅱ159が羽釜，Ⅱ176・Ⅱ233が鍋，Ⅱ177・Ⅱ217が盤。須恵器では，Ⅱ161・Ⅱ

表 4　SK20・SK11・SK16 出土土器計測結果

SK20	74.67個体
土師器	97.9%
瓦器（椀皿）	0.8%
瓦器（鍋釜盤）	0.7%
輸入陶磁各種	0.2%
石　鍋	0.4%
合　計	100.0%

土師器	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	オオヤツカサ
口　縁	65	7.13	0.54(個体)
C_3類	0.4%	2.9%	
D_3類	21.4%	15.2%	
D_4類	1.2%	11.7%	
D_5類	69.4%	62.0%	
D_6類	2.6%	8.2%	
E_1類	1.5%	0.0%	
受皿(赤)	2.6%	0.0%	
受皿(白)	0.9%	0.0%	
合　計	100.0%	100.0%	

SK11	34.79個体
土師器（皿）	96.0%
瓦器（椀）	0.5%
瓦器（受皿）	2.9%
東播系（すり鉢）	0.2%
輸入陶磁	0.4%
合　計	100.0%

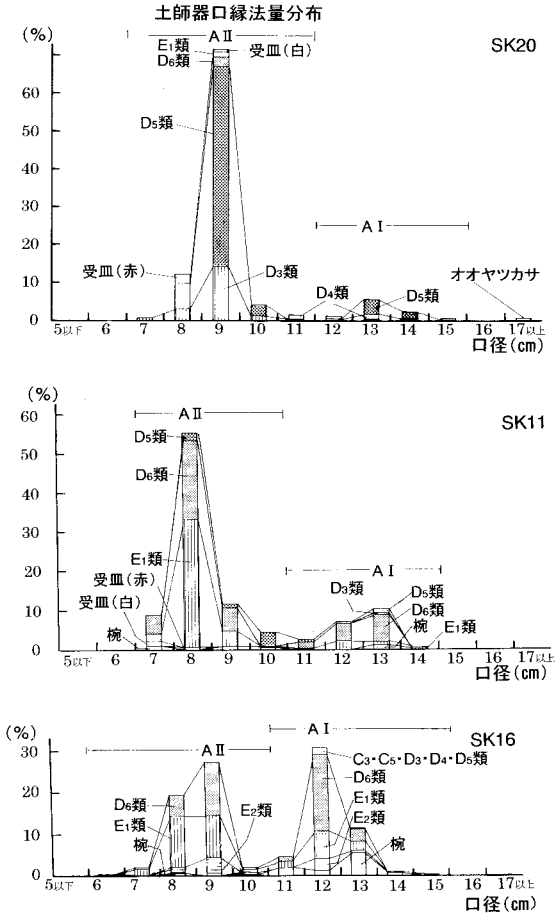
土師器	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ
口　縁	25.96	6.38	0.8	0.3(個体)
D_3類	0.0%	5.2%		
D_5類	8.7%	9.2%		
D_6類	39.2%	64.7%		
E_1類	49.8%	20.9%		
受皿(赤)	0.8%	0.0%		
受皿(白)	1.6%	0.0%		
合　計	100.0%	100.0%		

SK16	64.04個体
土師器	94.1%
瓦器（椀皿）	0.8%
瓦器（鍋釜盤）	3.6%
東播系（すり鉢）	0.5%
輸入陶磁各種	0.9%
合　計	100.0%

土師器	皿ＡⅡ	皿ＡⅠ	椀ＡⅡ	椀ＡⅠ	オオヤツカサ
口　縁	30.46	23.42	0.54	5.71	0.08(個体)
C_3類	0.0%	1.6%			
C_5類	0.0%	1.1%			
D_3類	0.0%	1.6%			
D_4類	0.0%	0.9%			
D_5類	1.0%	1.4%			
D_6類	37.5%	58.2%			
E_1類	46.9%	26.0%			
E_2類	13.3%	9.3%			
受皿(白)	0.5%	0.0%			
耳皿(白)	0.8%	0.0%			
合　計	100.0%	100.0%			

208・Ⅱ224のように口縁端部がやや上方へ立ち上がる器形の東播系のすり鉢が中心である。Ⅱ234はこうしたすり鉢の小型品。Ⅱ178は強く外半する甕の口縁部，Ⅱ218は刻印を有する甕胴部で，ともに常滑産。Ⅱ160は灰釉系陶器の底部。高台の内側は丁寧に回転撫で調整して仕上げられ，内面に淡緑色の自然釉が残る。Ⅱ182は産地不明の陶器壺の肩部で，外面は暗緑色に施釉され，櫛描文をもつ。貿易陶磁のうち，白磁には，内面に繊細な

表4　つづき



浮き彫り状の装飾をもつ薄手のⅢⅡ143，椀の底部Ⅱ144，口禿のⅢⅡ244がある。しかし量的には青磁が目立ち，同安窯系の櫛描文ⅢⅡ163や椀Ⅱ180，無文のⅢⅡ162や椀Ⅱ181，龍泉窯系とみられる鎬連弁の椀Ⅱ179・Ⅱ209・Ⅱ210など多様なものがある。Ⅱ183は滑石製石鍋を加工した舟形製品で，一つの面に小さな2個の突起が造り出される。用途不明。

中世Ⅲ期の遺物（表5～7，Ⅱ245～Ⅱ474）　土師器では，灰白色を呈する椀類が増加し，赤褐色のⅢ類と拮抗するようになる。SK23・SX11・SE19・SK8・SK10・SK15・SX2・SX6・SX9出土土器の計測結果でその法量の傾向をみると，13cm以上の特大（Ⅱ285・Ⅱ305・Ⅱ466），11・12cmの大（Ⅱ254・Ⅱ271・Ⅱ284・Ⅱ285・Ⅱ295・Ⅱ297・Ⅱ304・Ⅱ318・Ⅱ328・Ⅱ339・Ⅱ355・Ⅱ369・Ⅱ375・Ⅱ396・Ⅱ411・Ⅱ428・Ⅱ441・Ⅱ446・Ⅱ465），8～10cmの中（Ⅱ220・Ⅱ294・Ⅱ302・Ⅱ337・Ⅱ338・Ⅱ356・Ⅱ433・Ⅱ439・Ⅱ464），6・7cmの小（Ⅱ249～Ⅱ252・Ⅱ282・Ⅱ283・Ⅱ293・Ⅱ301・Ⅱ303・Ⅱ316・Ⅱ317・Ⅱ325～Ⅱ327・Ⅱ334～Ⅱ336・Ⅱ352～Ⅱ354・Ⅱ374・Ⅱ378・Ⅱ402・Ⅱ426・Ⅱ427・Ⅱ432・Ⅱ438・Ⅱ440・Ⅱ445・Ⅱ452・Ⅱ458・Ⅱ461～Ⅱ463），5cm以下の極小（Ⅱ253・Ⅱ462），というおおむね5つの規格がうかがわれ，なかでも7cmと12cmが大小の基本形をなしていたとみられ

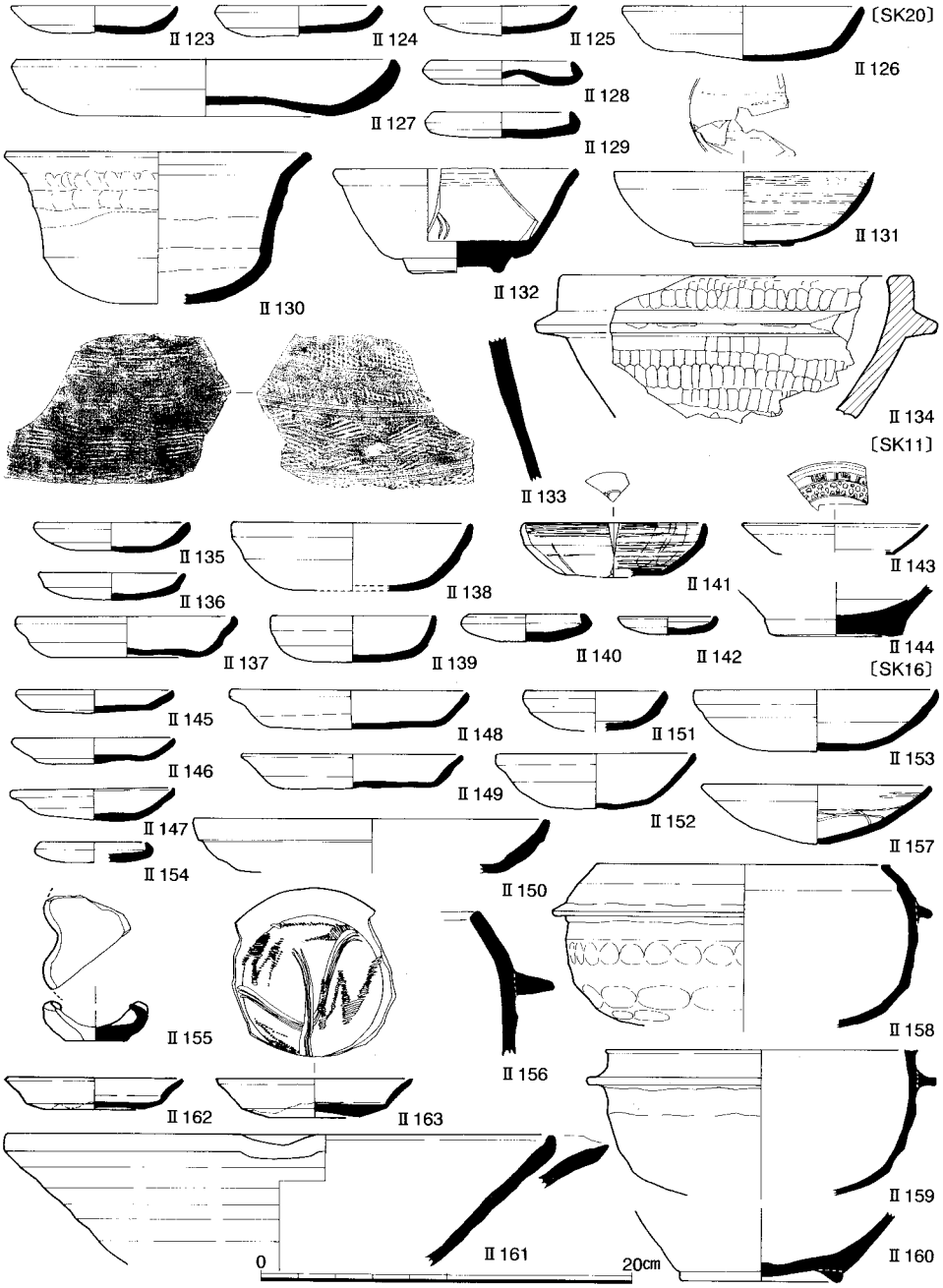


図21 SK20 出土遺物（Ⅱ123～Ⅱ130土師器，Ⅱ131瓦器，Ⅱ132青磁，Ⅱ133須恵器，Ⅱ134石鍋），SK11 出土遺物（Ⅱ135～Ⅱ140土師器，Ⅱ141・Ⅱ142瓦器，Ⅱ143・Ⅱ144白磁），SK16 出土遺物（Ⅱ145～Ⅱ156土師器，Ⅱ157～Ⅱ159瓦器，Ⅱ160灰釉系陶器，Ⅱ161須恵器，Ⅱ162・Ⅱ163青磁）

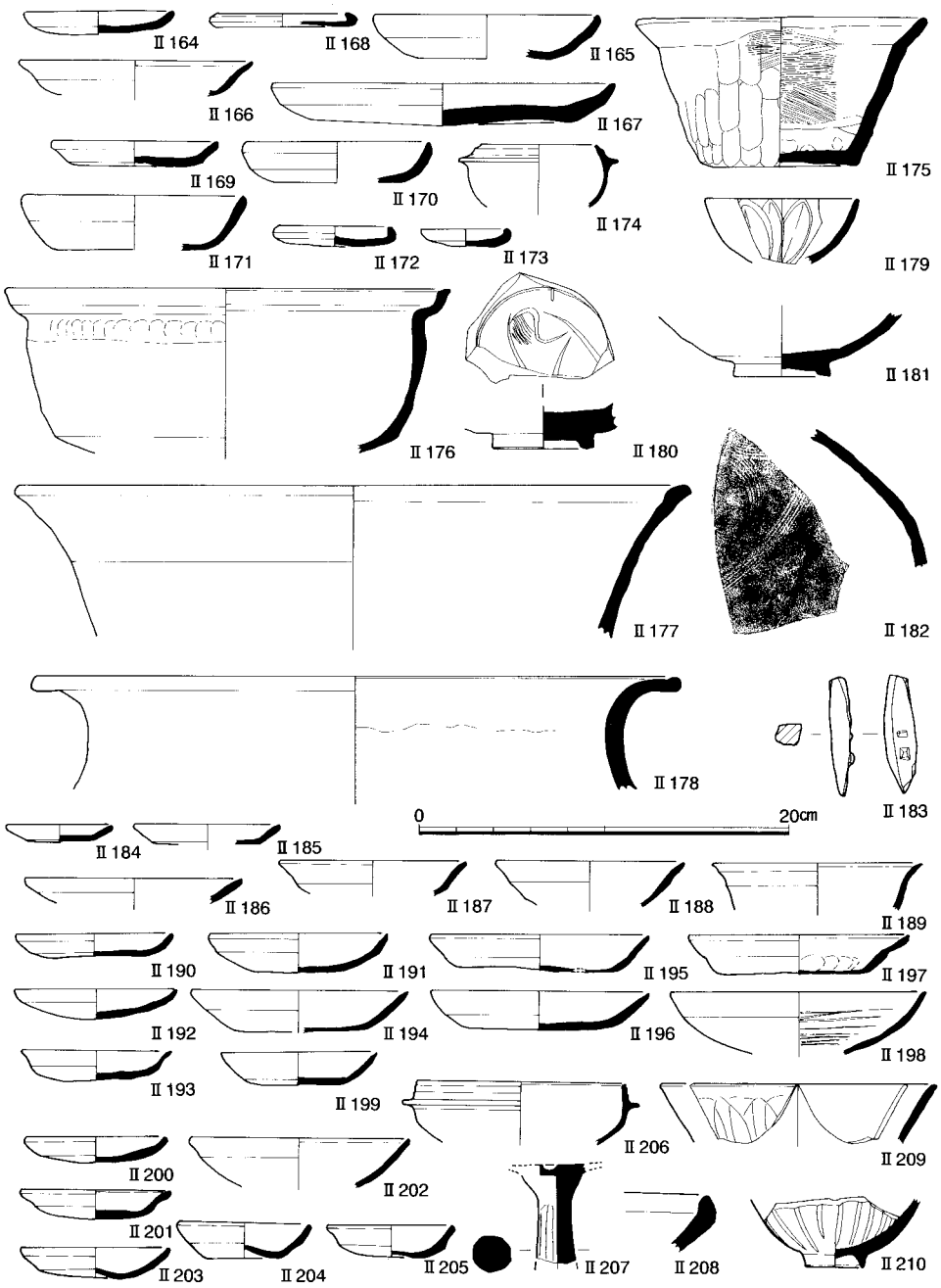


図22 SE16出土遺物（Ⅱ164～Ⅱ175土師器，Ⅱ176・Ⅱ177瓦器，Ⅱ178・Ⅱ182陶器，Ⅱ179～Ⅱ181青磁，Ⅱ183石製品），SE18出土遺物（Ⅱ184～Ⅱ188土師器，Ⅱ189青磁），SX5出土遺物（Ⅱ190～Ⅱ197土師器，Ⅱ198瓦器，Ⅱ199白磁），SX10出土遺物（Ⅱ200～Ⅱ207土師器，Ⅱ208須恵器，Ⅱ209・Ⅱ210青磁）

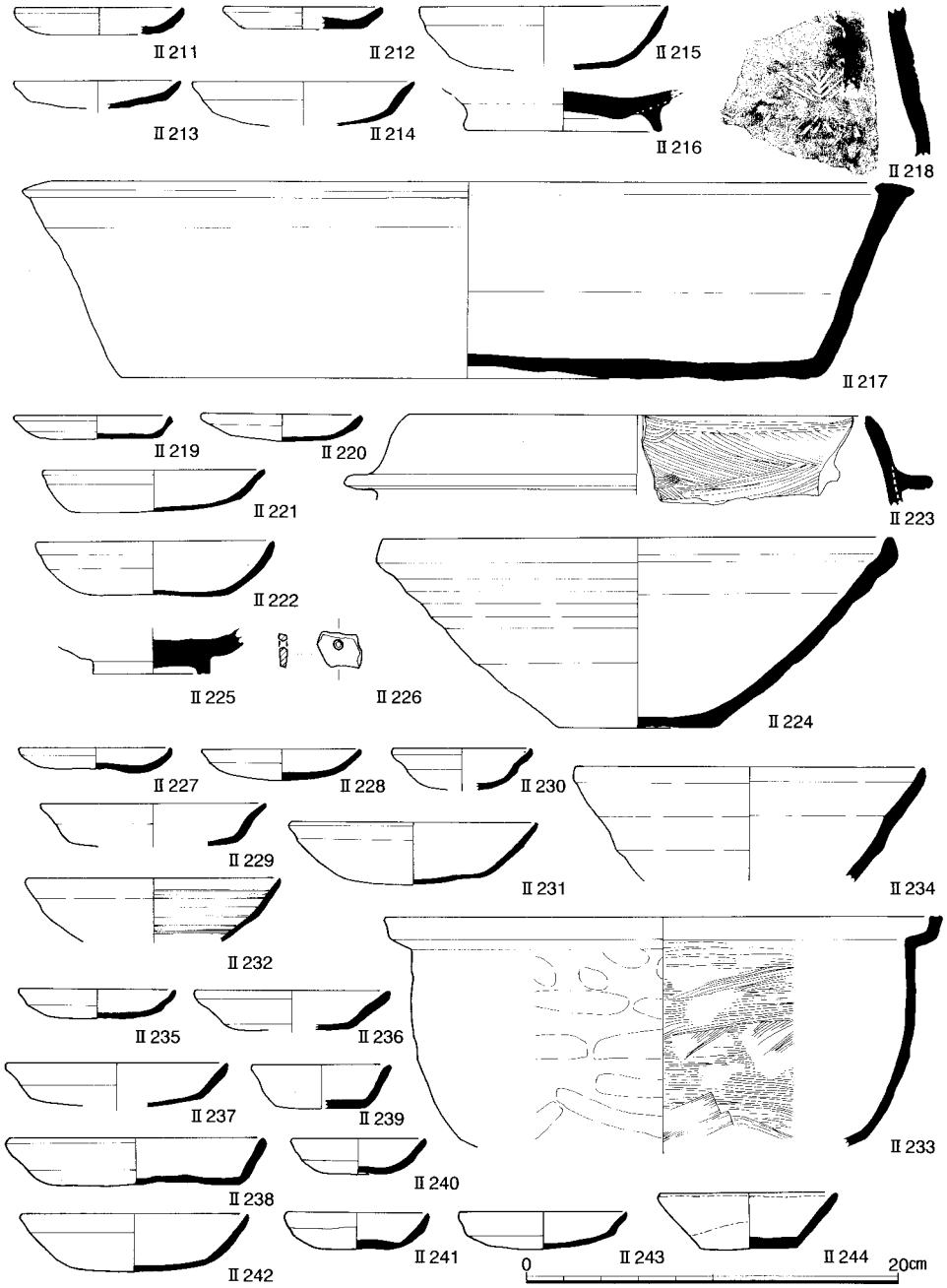


図23 SK3 出土遺物（Ⅱ211・Ⅱ212土師器），SK12 出土遺物（Ⅱ213～Ⅱ216土師器，Ⅱ217瓦器，Ⅱ218陶器），SK18 出土遺物（Ⅱ219～Ⅱ223土師器，Ⅱ224須恵器，Ⅱ225青磁），SK24 出土遺物（Ⅱ226土師器），SK13 出土遺物（Ⅱ227～Ⅱ231土師器，Ⅱ232・Ⅱ233瓦器，Ⅱ234須恵器），SK17 出土遺物（Ⅱ235～Ⅱ242土師器，Ⅱ243瓦器，Ⅱ244白磁）

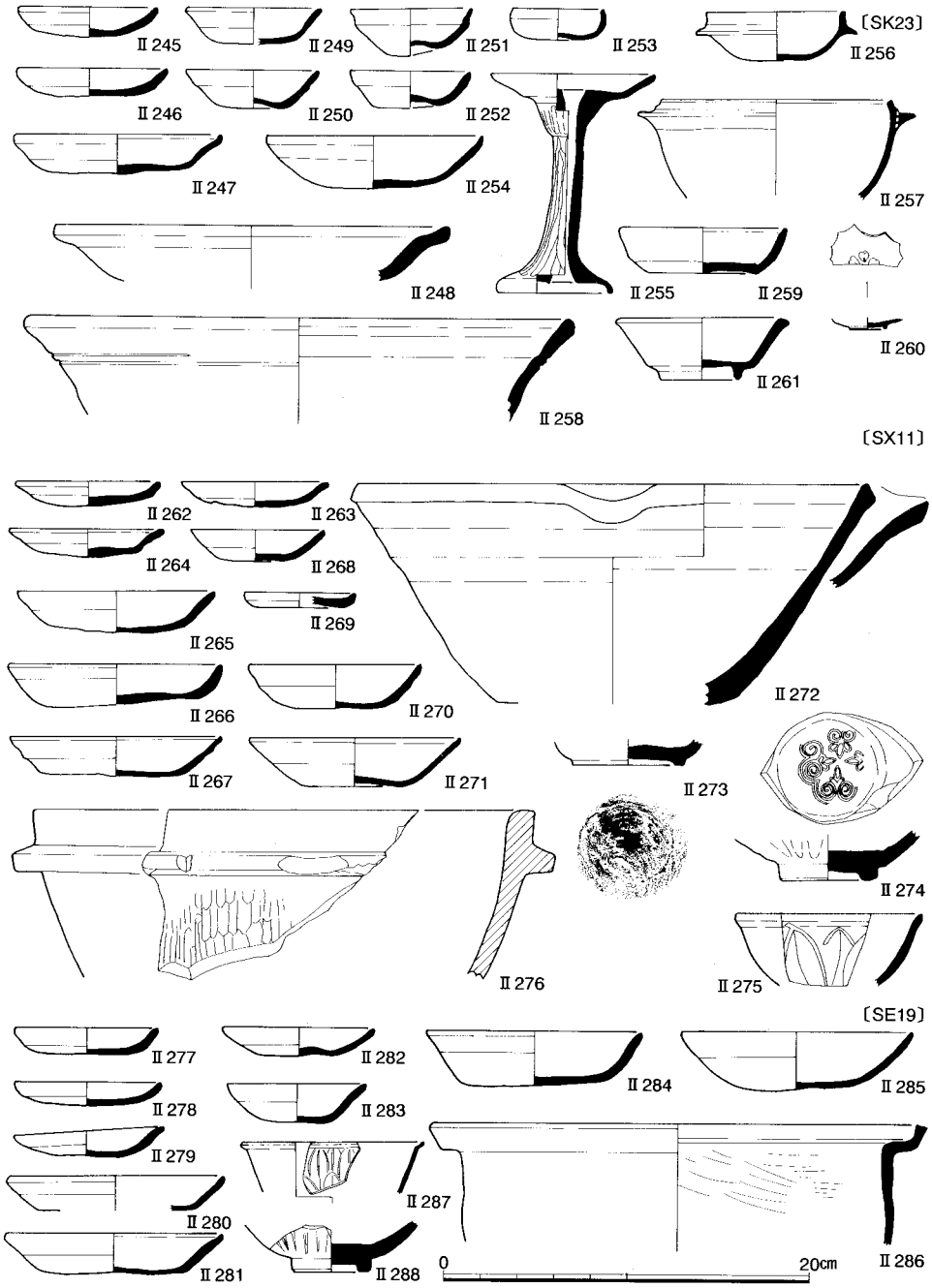


図24 SK23出土遺物（その1）（Ⅱ245～Ⅱ257土師器，Ⅱ258灰釉系陶器，Ⅱ259白磁，Ⅱ260青白磁，Ⅱ261青磁，Ⅱ276石鍋），SK11出土遺物（Ⅱ262～271土師器，Ⅱ272須恵器，Ⅱ273灰釉系陶器，Ⅱ274・Ⅱ275青磁），SE19出土遺物（Ⅱ277～Ⅱ285土師器，Ⅱ286瓦器，Ⅱ287白磁，Ⅱ288青磁）

表5　SK23・SK11・SE19出土土器計測結果

SK23	86.83個体
土師器	96.8%
瓦器（椀皿）	0.1%
瓦器（鍋釜盤）	1.3%
東播系（すり鉢）	0.5%
灰釉系（すり鉢）	0.4%
輸入陶磁各種	0.7%
石　鍋	0.2%
合　計	100.0%

土師器	皿AⅡ	皿AⅠ	椀AⅡ	椀AⅠ	オオヤツカサ
口　縁	29.58	15.58	22.04	14.50	0.25(個体)
C_3類	0.0%	0.8%			
D_3類	0.0%	2.4%			
D_5類	0.0%	1.1%			
D_6類	29.6%	20.9%			
E_1類	53.4%	29.4%			
E_2類	1.8%	36.1%			
E_3類	10.7%	9.4%			
受皿(赤)	4.5%	0.0%			
合　計	100.0%	100.0%			

SX11	34.25個体
土師器	96.6%
瓦器（鍋釜盤）	0.5%
東播系（すり鉢）	2.2%
輸入陶磁各種	0.7%
合　計	100.0%

土師器	皿AⅡ	皿AⅠ	椀AⅡ	椀AⅠ
口　縁	14.38	9.25	6.46	2.83(個体)
D_6類	0.0%	2.7%		
E_1類	74.5%	56.3%		
E_2類	22.3%	41.0%		
E_3類	1.4%	0.0%		
受皿(白)	1.7%	0.0%		
合　計	100.0%	100.0%		

SE19	41.58個体
土師器（皿）	99.0%
瓦器（鍋釜盤）	0.4%
産地不明陶器	0.2%
輸入陶磁各種	0.4%
合　計	100.0%

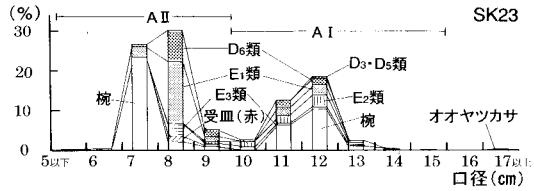
土師器	皿AⅡ	皿AⅠ	椀AⅡ	椀AⅠ
口　縁	12.88	6.58	8.88	12.83(個体)
E_1類	78.3%	62.0%		
E_2類	0.0%	27.8%		
E_3類	21.7%	10.1%		
合　計	100.0%	100.0%		

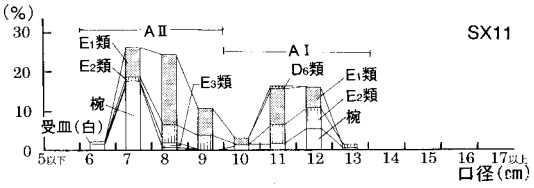
る。このほかの灰白色の土器類では，受皿（Ⅱ269・Ⅱ357・Ⅱ459）はより小型化して口径5～6㎝となり，高杯（Ⅱ255），回転糸切底の皿（Ⅱ319・Ⅱ358・Ⅱ359），蓋（Ⅱ467）も口径は8㎝前後の小型品である。

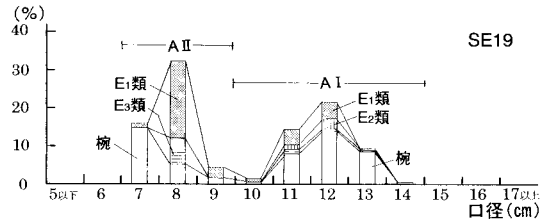
赤褐色の皿類については，AⅡが8㎝，AⅠが11・12㎝にまとまり，ごく少量20㎝を越える特大品がある（Ⅱ248・Ⅱ351）。口縁部形態では，一段撫で手法E_3類（Ⅱ279・Ⅱ289・Ⅱ292・Ⅱ298・Ⅱ299・Ⅱ310～Ⅱ312・Ⅱ315・Ⅱ324・Ⅱ331・Ⅱ347・Ⅱ348・Ⅱ366・Ⅱ367・Ⅱ373・Ⅱ385・Ⅱ386・Ⅱ424・Ⅱ425・Ⅱ431・Ⅱ436・Ⅱ442・Ⅱ450・Ⅱ456）を中心に，E_1類（Ⅱ246・Ⅱ263・Ⅱ265・Ⅱ266・Ⅱ277・Ⅱ278・Ⅱ280・Ⅱ290・Ⅱ309・Ⅱ313・Ⅱ323・Ⅱ329・Ⅱ332・Ⅱ346・Ⅱ349・Ⅱ377・Ⅱ391・Ⅱ392・Ⅱ395・Ⅱ400・Ⅱ409・Ⅱ423・Ⅱ435・Ⅱ437・Ⅱ449），E_2類（Ⅱ247・Ⅱ264・Ⅱ267・Ⅱ281・Ⅱ

表5　つづき

土師器口縁法量分布







291・Ⅱ300・Ⅱ314・Ⅱ330・Ⅱ333・Ⅱ350・Ⅱ393・Ⅱ443・Ⅱ444・Ⅱ451）の3種が主体となっている。ほかには，D_6類（Ⅱ245・Ⅱ262・Ⅱ394・Ⅱ401）とE_4類（Ⅱ368・Ⅱ457）が，少量認められる。

以上のうち，小型の椀類についてみると，いずれも凹み底小椀と呼ばれる形態が中心となるが，SK23・SX11・SE19出土品は，底部の凹み方が弱く，器壁が厚手であるのに対して，SK8・SK10・SK15・SX2・SX6・SX9出土品は，凹みが強い薄手の製品で，口縁端部をわずかにつまみ上げる特徴をもつ。凹み底小椀が定型化していく度合いの違いが現れていると言え，前者の一群を古相，後者を新相としてこのⅢ期を時間的に細分できるだろう。このほか，皿類の型式もこの細分とおおむね対応しており，前者ではE_1類がE_3類よりも多数を占め，逆に後者ではE_3類が主体となる。非計測資料では，SE24・SX7・SX8・SK2・SK9は古相，SE6・SE13・SE17・SE21・SK7・SD31・SD32・池状落込は新相，となる。既往の時期区分に対応させると，中世都市京都の編年ではⅦ期中段階と新段階，実年代では14世紀前半代とみられる。

上記以外の特徴的遺物を，SF4出土遺物を除いて説明する。土師質の製品では，さまざまなサイズの羽釜がある（Ⅱ256・Ⅱ257・Ⅱ296・Ⅱ413・Ⅱ453)。おおむね黄白色の精良な胎土を用いており，口径13cmをはかるⅡ257は外面に煤が付着し使用の痕跡をとどめる。Ⅱ340は手づくねの不安定な高台を貼り付けた底部。非京都産であろう。Ⅱ345は土師器片を加工した円盤。Ⅱ412は粘土紐の積み上げ痕を内外面とも残した鉢形の製品。口縁

表 6　SK8・SK10・SK15 出土土器計測結果

SK 8	21.96個体
土師器	99.6%
輸入陶磁各種	0.4%
合　計	100.0%

土師器	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
口　縁	4.29	5.88	5.67	5.29(個体)
E_1類	0.0%	31.9%		
E_2類	3.9%	32.6%		
E_3類	96.1%	35.5%		
合　計	100.0%	100.0%		

SK10	21.96個体
土師器	98.5%
瓦器（盤）	0.4%
輸入陶磁各種	1.1%
合　計	100.0%

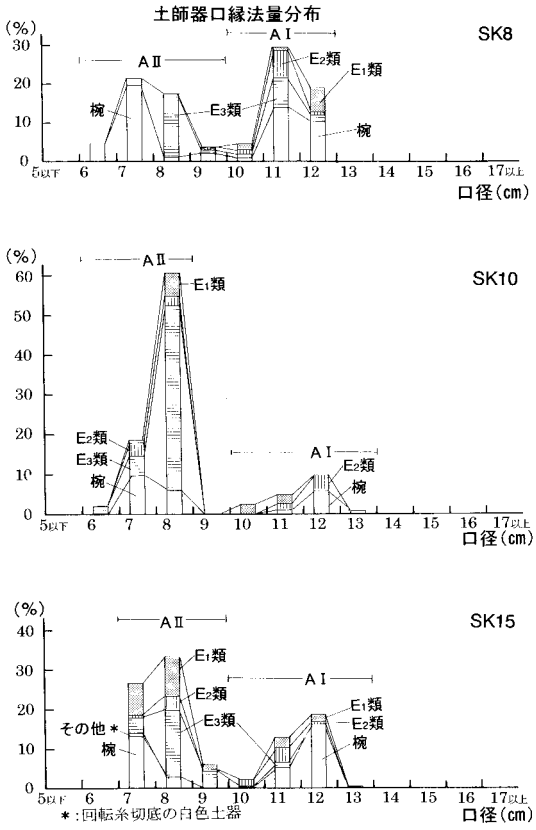
土師器	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
口　縁	13.75	2.21	3.25	1.58(個体)
D_6類	1.5%	0.0%		
E_1類	8.8%	47.2%		
E_2類	8.5%	52.8%		
E_3類	81.2%	0.0%		
合　計	100.0%	100.0%		

SK15	32.25個体
土師器	98.2%
東播系（すり鉢）	0.5%
灰釉系（皿）	1.0%
輸入陶磁各種	0.3%
合　計	100.0%

土師器	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
口　縁	15.88	3.92	5.00	6.88(個体)
E_1類	39.1%	37.2%		
E_2類	8.1%	47.9%		
E_3類	51.2%	14.9%		
その他＊	1.6%	0.0%		
合　計	100.0%	100.0%		

部周辺は横撫でし端部を面取りしている。瓦器では，この段階に特徴的なものとしてミニチュアの羽釜がある（Ⅱ341・Ⅱ360・Ⅱ387・Ⅱ403・Ⅱ468)。ほか，鍋・羽釜・盤は一定量組成しているけれども（Ⅱ286・Ⅱ306・Ⅱ362・Ⅱ404・Ⅱ405・Ⅱ416・Ⅱ421・Ⅱ448・Ⅱ474)，小型品の椀・皿・鉢類は少ない（Ⅱ342・Ⅱ361)。一方で，スタンプ文で飾る火鉢が出現している（Ⅱ434)。Ⅱ306の盤は口縁端部の一部に刻み目を施す。Ⅱ421は，鍔の部分を欠いているが，口縁部が長く上方に延びる大型の羽釜に復元できる。これ以後の時期に主流になっていく器形である。このほか，小型の壺（Ⅱ414)，仏飯の脚台（Ⅱ415）がある。東播系の須恵器ではすり鉢が中心だが（Ⅱ272・Ⅱ321・Ⅱ343・Ⅱ417)，大型の甕（Ⅱ473）もある。灰釉系陶器では，すり鉢（Ⅱ258・Ⅱ406）のほかは，小型の椀皿類が中心となる（Ⅱ273・Ⅱ320・Ⅱ407)。また，Ⅱ371は黒色の天目釉を施す仏花瓶で，山型の線刻がされる特異例である。Ⅱ429も同様な器形になるとみられ，外面は淡黄緑色の

表6　つづき



釉がかかる。Ⅱ384は，こうした灰釉系陶器片を打ち欠いた円盤。このほかⅡ363・Ⅱ380は，ともに常滑窯産とみられる大型甕の口縁部。Ⅱ418は非常に厚手の底部で，産地不明。外面に縦位方向の叩き痕がある。貿易陶磁では，白磁・青磁・青白磁・黄釉陶器がある。このうち量的に多いのは青磁で，龍泉窯系の鎬連弁椀を中心に（Ⅱ274・Ⅱ275・Ⅱ288・Ⅱ364・Ⅱ370・Ⅱ397・Ⅱ470），小型の杯・椀・皿類（Ⅱ261・Ⅱ376・Ⅱ388・Ⅱ469），皿（Ⅱ471），蓋（Ⅱ297・Ⅱ420）がある。白磁は多種類にわたり，口禿の皿（Ⅱ259・Ⅱ344・Ⅱ398），薄手で精巧な浮き彫り装飾を施す小形の椀皿類（Ⅱ287・Ⅱ308・Ⅱ322），玉縁口縁の椀（Ⅱ307），全面施釉の小皿（Ⅱ381・Ⅱ382），小型の合子（Ⅱ383），見込みに印刻花文を施す皿（Ⅱ419），口端を釉剝ぎする椀（Ⅱ430），壺（Ⅱ454）がある。青白磁は，薄手の小型品で，見込み中央に花弁状の浮き彫り装飾を施す（Ⅱ260）。黄釉陶器は小型の盤（Ⅱ379）がある。土器以外では，外面に煤のついた滑石製の石鍋が目立つ（Ⅱ276・Ⅱ365・Ⅱ390・Ⅱ472）。これらは，いずれも切断痕や擦過痕がみられるほか，Ⅱ276・Ⅱ390は鍔の部分に抉りを入れる。Ⅱ399はこうした石鍋を再加工した硯で，舟の部分に墨が付着している。黄褐色で軟質の頁岩製砥石も多く出土している（Ⅱ372・Ⅱ389・Ⅱ422）。おおむね幅3㎝程度の短冊形で，目が細かいので仕上げ砥であろう。

SF4出土の瓦製相輪（図30-Ⅱ482）　瓦質の管状製品で，外縁径38.6㎝厚さ2～3㎝の鍔状部と内径12.4㎝の筒状部が一体で成型され，さらに鍔状部から下に向けて，内径20.8㎝高さ3.8㎝厚さ2.6㎝の筒状部が，貼り付けられる。精良な胎土で，外表面は黒色，

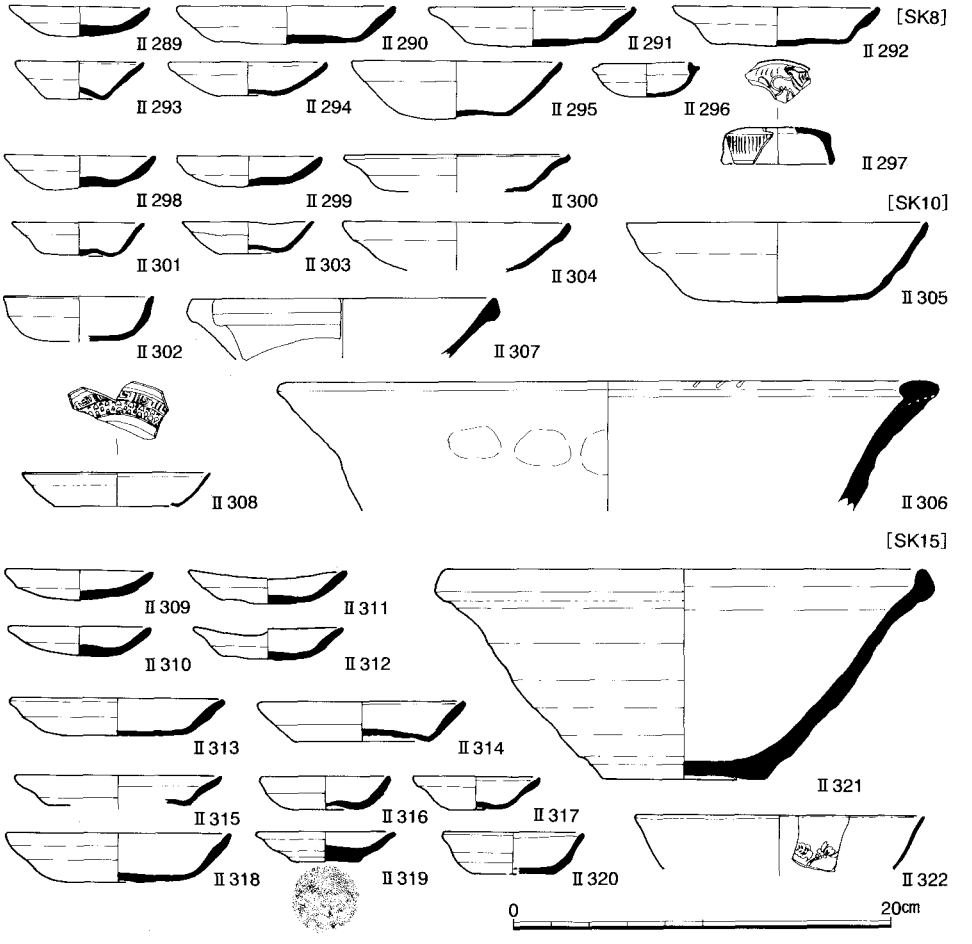


図25 SK8 出土遺物（Ⅱ289～Ⅱ296土師器，Ⅱ297青磁），SK10 出土遺物（Ⅱ298～Ⅱ305土師器，Ⅱ306瓦器，Ⅱ307・Ⅱ308白磁），SK15 出土遺物（Ⅱ309～Ⅱ318土師器，Ⅱ319白色土器，Ⅱ320灰釉系陶器，Ⅱ321須恵器，Ⅱ322白磁）

それ以外は内面も含め灰白色。1/8程度が残存し，その状況での高さは10.2cmをはかる。鍔状部の片面に，厚さ5mmほどの花弁状装飾が浮彫状に貼り付けられ，本来は四方向に花弁が開くような装飾であったと推定できる。その反対面は丁寧に撫で調整される。以上の特徴から，塔建築などの屋頂部を飾る相輪の部材で，九輪の破片と考えられる。花弁状の装飾面を下に向けて最下段に据え，受花としての外観を意図したものとみられる。内面の一部に帯状に煤が付着しているが，その理由はわからない。

SF4 は，中世Ⅲ期以前の遺物を含む堆積だが，一段撫で手法 F_1類の土師器皿も含まれ

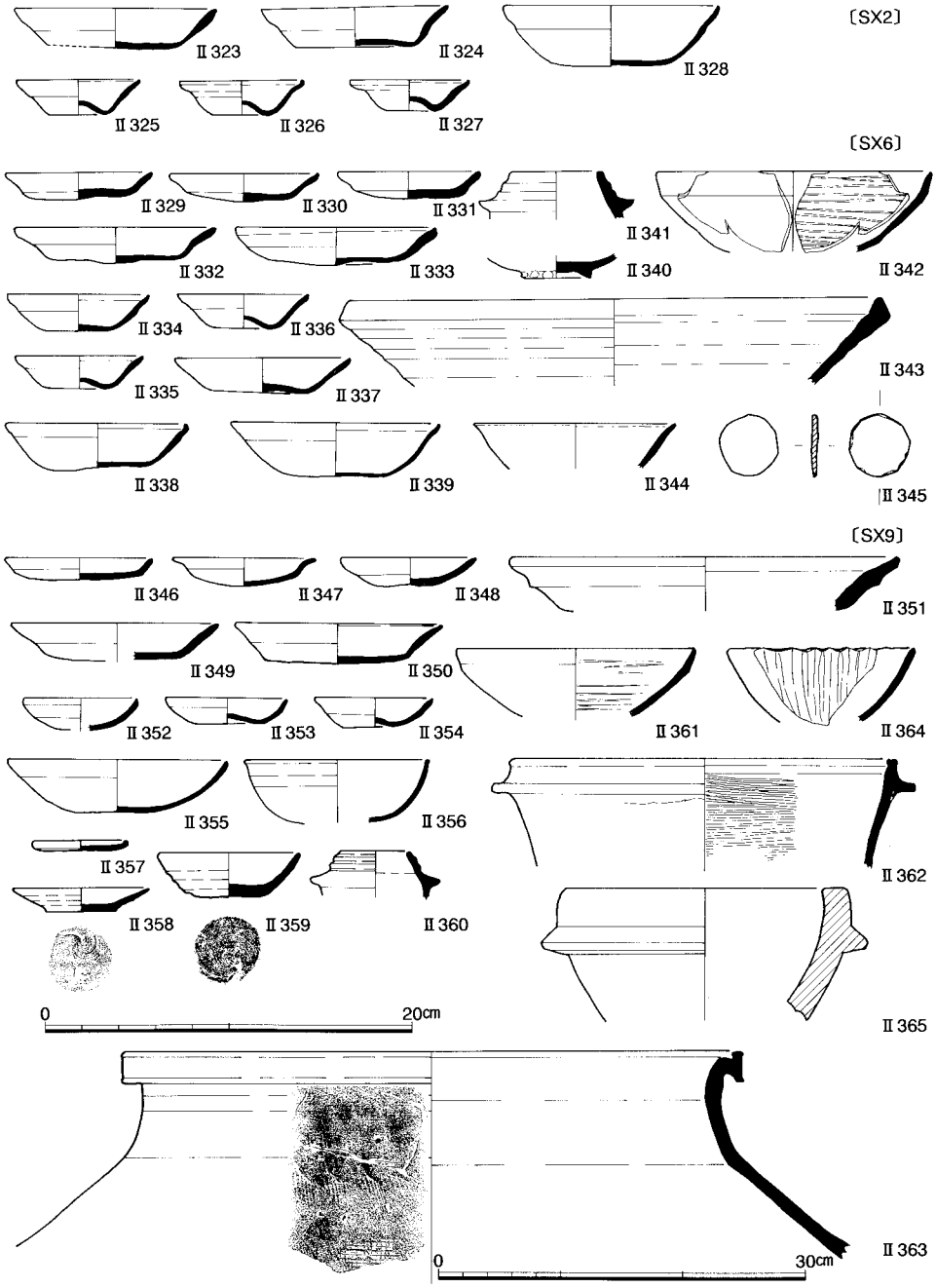


図26 SX2 出土遺物（Ⅱ323～Ⅱ328土師器），SX6 出土遺物（Ⅱ329～340土師器，Ⅱ341・Ⅱ342瓦器，Ⅱ343須恵器，Ⅱ344白磁，Ⅱ345土製品），SX9 出土遺物（Ⅱ346～Ⅱ357土師器，Ⅱ358・Ⅱ359白色土器，Ⅱ360～Ⅱ362瓦器，Ⅱ363陶器，Ⅱ364青磁，Ⅱ365石鍋）Ⅱ363縮尺1/6，ほか縮尺1/4

表7　SX2・SX6・SX9 出土土器計測結果

SX 2	22.88個体
土師器	100.0%
合　計	100.0%

土師器	Ⅲ A Ⅱ	Ⅲ A Ⅰ	椀 A Ⅱ	椀 A Ⅰ
口　縁	0.17	3.21	12.79	6.71(個体)
D_6類	0.0%	3.9%		
E_1類	100.0%	28.6%		
E_2類	0.0%	6.5%		
E_3類	0.0%	61.0%		
合　計	100.0%	100.0%		

SX 6	29.92個体
土師器	96.9%
瓦器（椀皿）	0.3%
瓦器（鍋釜盤）	1.3%
東播系（すり鉢）	0.4%
灰釉系（椀）	0.3%
輸入陶磁各種	0.8%
合　計	100.0%

土師器	Ⅲ A Ⅱ	Ⅲ A Ⅰ	椀 A Ⅱ	椀 A Ⅰ
口　縁	9.17	8.25	4.92	6.58(個体)
D_6類	15.0%	0.0%		
E_1類	43.2%	64.6%		
E_2類	12.7%	28.3%		
E_3類	29.1%	7.1%		
合　計	100.0%	100.0%		

SX 9	47.75個体
土師器	93.8%
瓦器（椀皿）	1.2%
瓦器（鍋釜盤）	1.4%
東播系（すり鉢）	0.3%
常滑（甕）	0.9%
輸入陶磁各種	2.2%
石　鍋	0.2%
合　計	100.0%

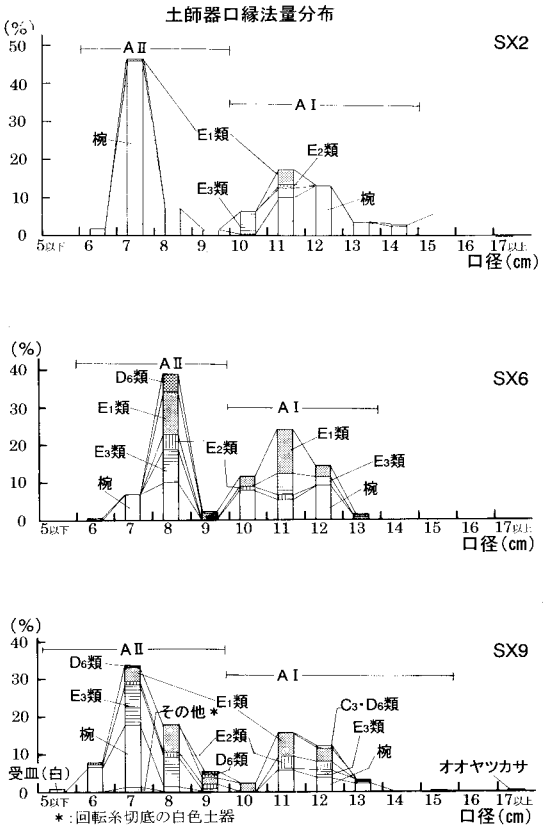
土師器	Ⅲ A Ⅱ	Ⅲ A Ⅰ	椀 A Ⅱ	椀 A Ⅰ	オオヤツカサ
口　縁	18.46	9.58	10.92	5.42	0.17(個体)
C_3類	0.0%	1.7%			
D_6類	3.6%	2.6%			
E_1類	33.6%	57.0%			
E_2類	8.1%	26.1%			
E_3類	49.2%	12.6%			
受皿(白)	2.3%	0.0%			
その他＊	3.2%	0.0%			
合　計	100.0%	100.0%			

る（Ⅰ281）。よって，他のⅢ期遺構よりわずかに新しい。しかし，中世遺物包含層の茶褐色土に覆われているため，Ⅳ期までは下らない。よって，遺構の年代としては14世紀中葉ころを想定しておくのが妥当である。

相輪については，陶製品がまとまって出土した富山県小杉町小杉流通業務団地内遺跡群No.19遺跡の報告に際して，36遺跡からの出土例が集成されている〔上野1986〕。これによると，陶製のほかに金属製・石製・瓦製があり，いずれも平安時代以前に比定される寺院跡や窯跡からの出土である。このうち，瓦製の九輪については，奈良県豊浦寺と島根県高田廃寺の事例が以前より言及されている〔稲垣1970〕。中世遺跡からの出土例は知られず，相輪であるとすればきわめて珍しい事例といえる。近傍にこのような製品を頂く建物が想定されるという点でも，重要であろう。

中世Ⅳ期の遺物（Ⅱ475～Ⅱ480・Ⅱ499～Ⅱ521）　遺構からの量的にまとまった出土

表7　つづき



はない。おおむね茶褐色土の上面で検出される路面状遺構SF2・SF3a・SF3bと，その上面に堆積する黄灰色土・暗黄灰色土からの出土土器のうち，先行する中世Ⅰ期～Ⅲ期に属するものを除いた残りをこの時期の遺物とする。14世紀後半以降17世紀前葉にわたるまでの遺物が含まれるが，量は少なく，小片が多い。調査地一帯が耕地化していく時期に対応しており，本来的にこの地で使用されていた遺物というよりは，周辺のものが整地や耕作にともなう土壌の移動により紛れ込んだと理解する。

土師器皿では，一段撫で手法F_1類（Ⅱ475・Ⅱ479・Ⅱ501～Ⅱ504），F_2類（Ⅱ477・Ⅱ505～Ⅱ508）が中心で，E_4類（Ⅱ499・Ⅱ500），F_3類（Ⅱ509・Ⅱ510），F_4類（Ⅱ511）もみられる。灰白色の椀類では，凹み底小椀のみ少量認められる（Ⅱ476・Ⅱ478）。Ⅱ480は黄白色を呈する皿で，底部に回転篦起こし痕を残す。搬入品で，Ⅲ期以前の製品の可能性もある。土師器以外では，国産諸窯の陶器類と舶載磁器が若干ある。Ⅱ512・Ⅱ513は，灰釉系陶器の天目茶碗の口縁部と削り出し高台の底部。Ⅱ514は唐津の底部で，内面のみ施釉され，鼠地に黒で文様を描く。見込みには明瞭な胎土目の目跡が残る。Ⅱ515・Ⅱ516は信楽のすり鉢で，それぞれ1条と5条のおろし目がある。Ⅱ517は白磁皿。口縁端部が強く外反する器形で，畳付以外は全面施釉。Ⅱ518・Ⅱ519はともに白磁の底部で，露胎の高台内側に「蔵」「田」の墨書がある。また，高台の畳付に4箇所の浅い抉りを施しており，見込みには目跡を残す。これらは森田勉の分類によるD群の特徴で，おおむね15世紀代に比定されている〔森田1982〕。Ⅱ520・Ⅱ521は磁器青花の小椀と皿底部。Ⅱ520は淡い発色の，Ⅱ521は濃い藍色の呉須でと

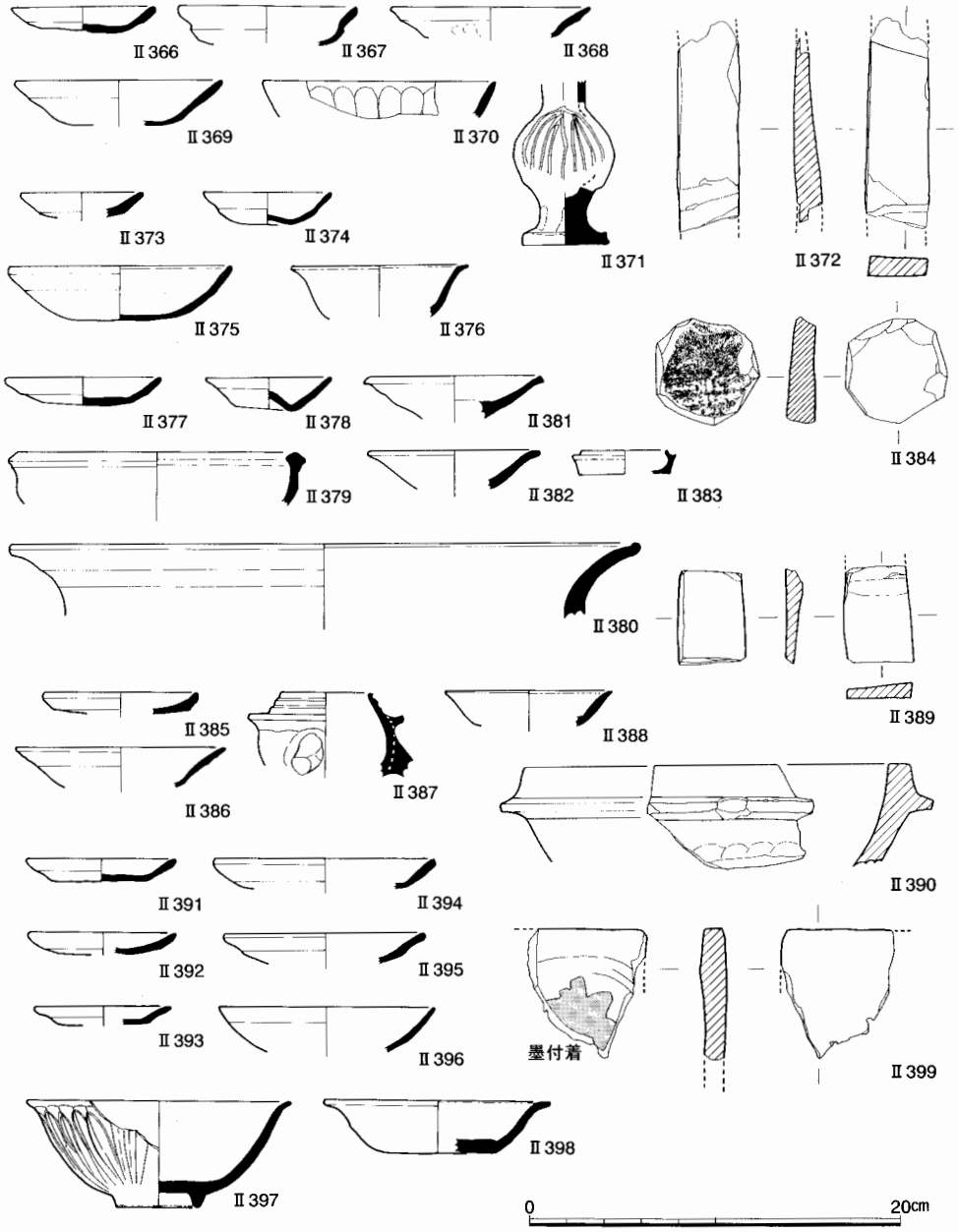


図27 SE6 出土遺物（Ⅱ366～Ⅱ369土師器，Ⅱ370青磁，Ⅱ371灰釉系陶器，Ⅱ372砥石），SE13 出土遺物（Ⅱ373～Ⅱ375土師器，Ⅱ376青磁），SE17 出土遺物（Ⅱ377・Ⅱ378土師器，Ⅱ379黄釉陶器，Ⅱ380陶器，Ⅱ381～Ⅱ383白磁，Ⅱ384土製品），SE21 出土遺物（Ⅱ385・Ⅱ386土師器，Ⅱ387瓦器，Ⅱ388青磁，Ⅱ389砥石，Ⅱ390石鍋），SE24 出土遺物（Ⅱ391～Ⅱ396土師器，Ⅱ397青磁，Ⅱ398白磁，Ⅱ399石硯）

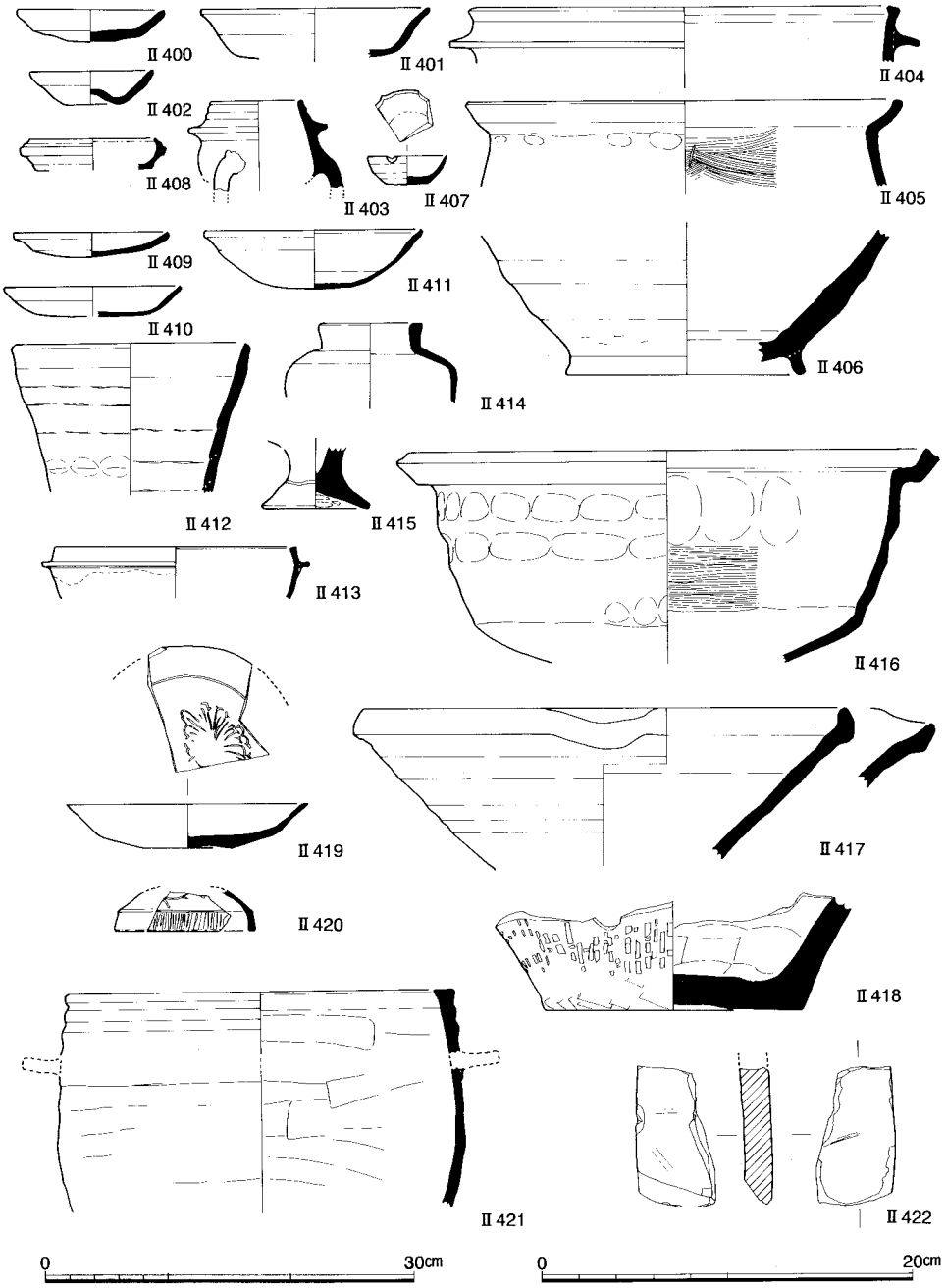


図28 SX7 出土遺物（Ⅱ400～Ⅱ402土師器，Ⅱ403～Ⅱ405瓦器，Ⅱ406・Ⅱ407灰釉系陶器，Ⅱ408白磁），SX8 出土遺物（Ⅱ409～Ⅱ413土師器，Ⅱ414～Ⅱ416・Ⅱ421瓦器，Ⅱ417須恵器，Ⅱ418陶器，Ⅱ419白磁，Ⅱ420青磁，Ⅱ422砥石）　Ⅱ421縮尺1/6，ほか縮尺1/4

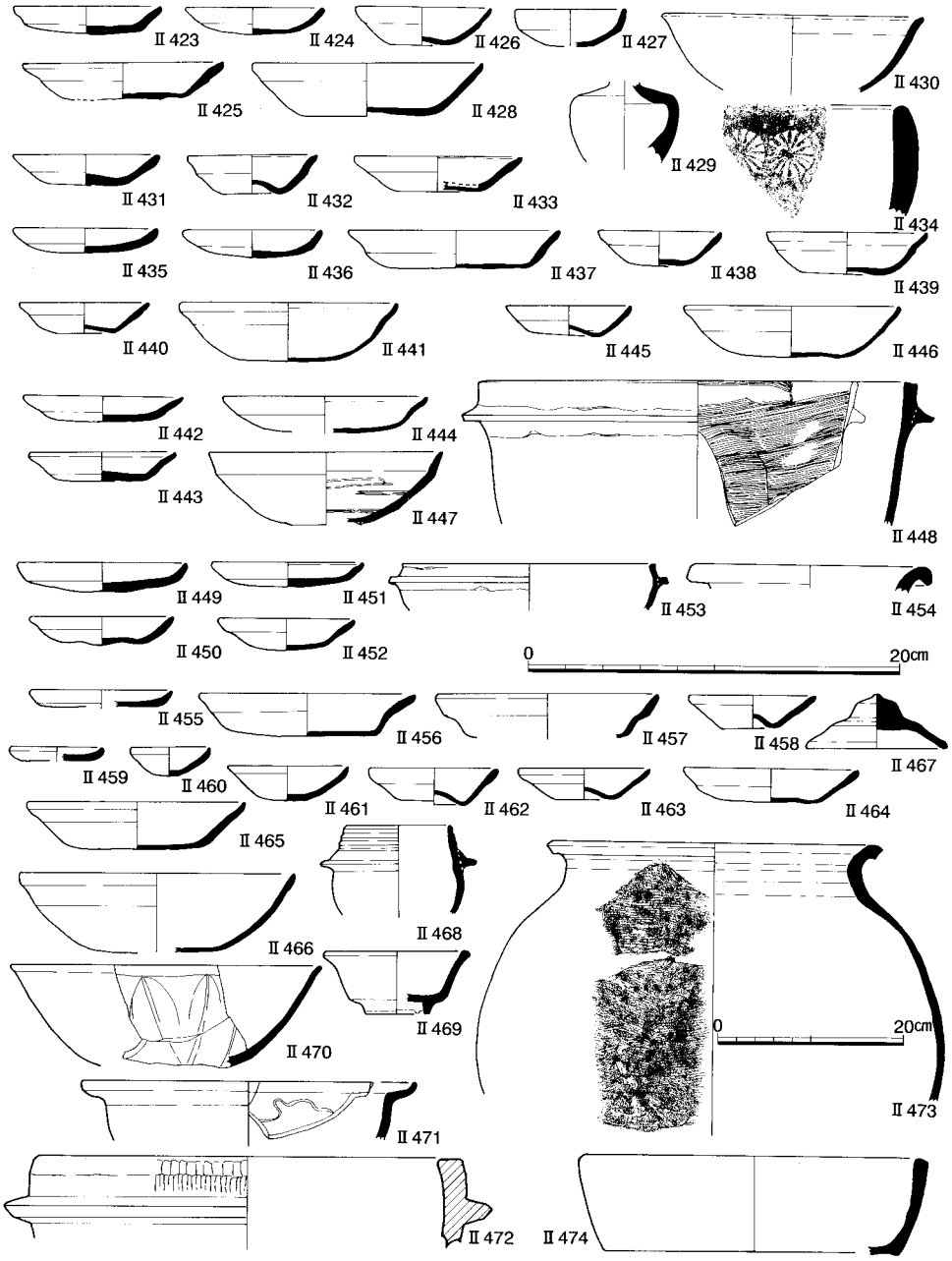


図29 SK2 出土遺物（Ⅱ423～Ⅱ428土師器，Ⅱ429灰釉系陶器，Ⅱ430白磁），SK7 出土遺物（Ⅱ431～Ⅱ433土師器，Ⅱ434瓦器），SK9 出土遺物（Ⅱ435～Ⅱ439土師器），SD28 出土遺物（Ⅱ440・Ⅱ441土師器），SD31 出土遺物（Ⅱ442～Ⅱ446土師器，Ⅱ447・448瓦器），SD32 出土遺物（Ⅱ449～Ⅱ453土師器，Ⅱ454白磁），池状落込（Ⅱ455～Ⅱ467土師器，Ⅱ468瓦器，Ⅱ469～Ⅱ471青磁，Ⅱ472石鍋），SK23 出土遺物（その２）（Ⅱ473陶器，Ⅱ474瓦器）　Ⅱ473・Ⅱ474 縮尺1/8，ほか縮尺1/4

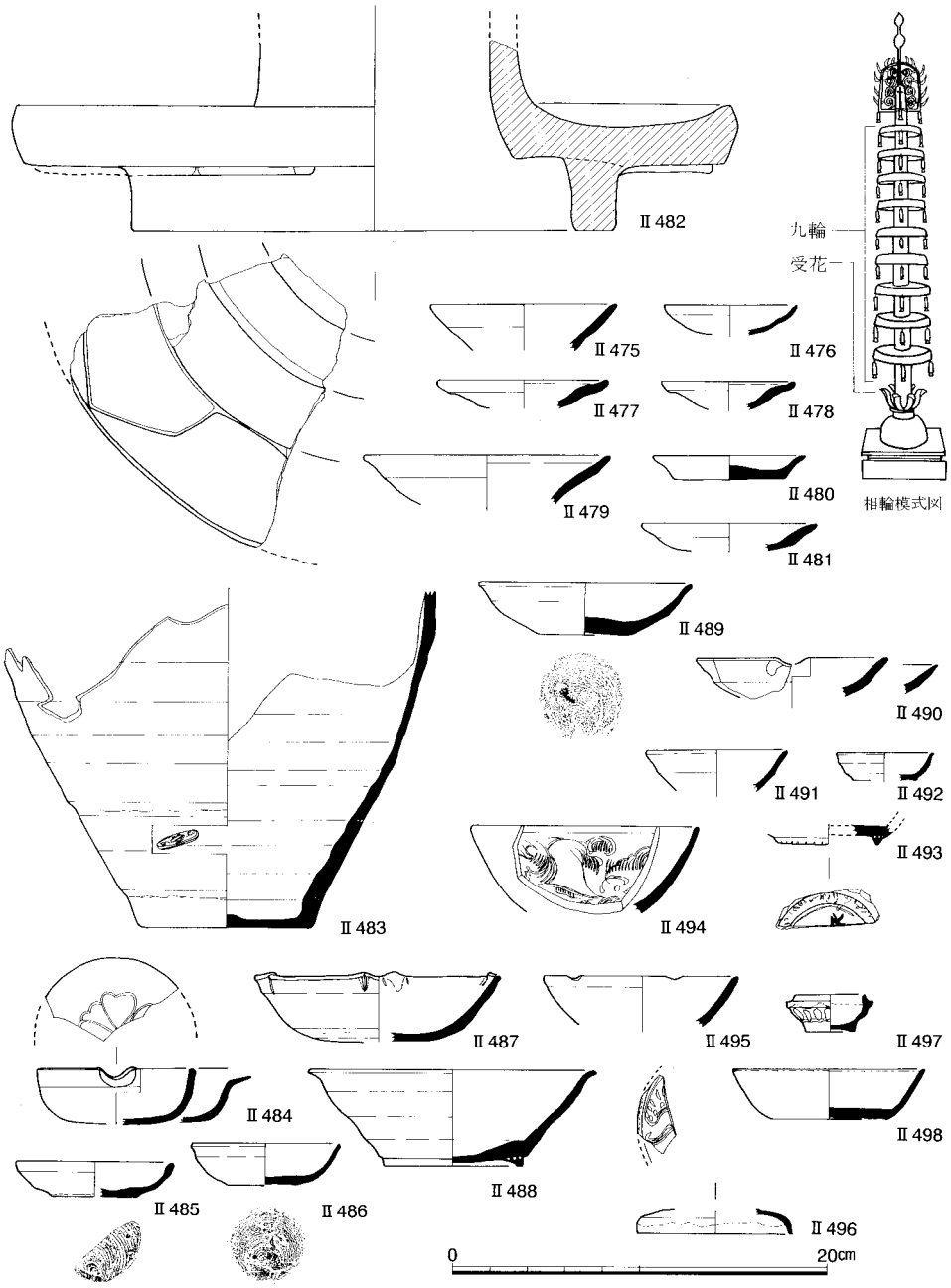


図30 SF2出土遺物（Ⅱ475・Ⅱ476土師器），SF3出土遺物（Ⅱ477～Ⅱ480土師器），SF4出土遺物（Ⅱ481土師器，Ⅱ482瓦器），茶褐色土出土遺物（Ⅱ483陶器，Ⅱ484瓦器，Ⅱ485須恵器，Ⅱ486～Ⅱ493灰釉系陶器，Ⅱ494・Ⅱ495青磁，Ⅱ496・Ⅱ497青白磁，Ⅱ498白磁）

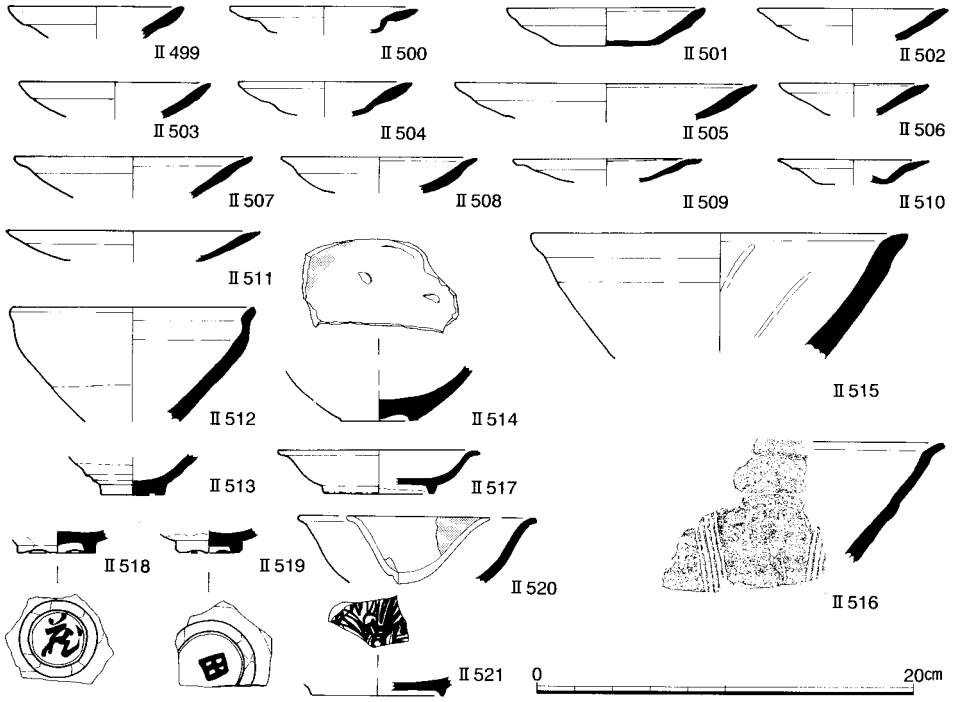


図31 黄灰色土出土遺物（Ⅱ499・Ⅱ501～Ⅱ506・Ⅱ509～Ⅱ511土師器，Ⅱ512・Ⅱ513灰釉系陶器，Ⅱ514～Ⅱ516陶器，Ⅱ517～Ⅱ519白磁，Ⅱ520・Ⅱ521青花），暗黄灰色土出土遺物（Ⅱ500・Ⅱ507・Ⅱ508土師器）

もに内面側を飾る。

茶褐色土出土遺物（Ⅱ483～Ⅱ498）　中世Ⅰ期～Ⅲ期までの遺物を包含する茶褐色土からの出土品のうち，陶磁器を中心に特徴あるものを抽出した。

Ⅱ483は，無釉の陶器壺の胴下半部。残存高18cmあまりをはかる。器壁は3～5mm程度と薄い。焼成は甘く黄褐色を呈し，内外面とも轆轤ミズビキ痕が明瞭。調査区西北部の茶褐色土中から，立位の状態で単独出土した。これに伴う掘り込みは確認されなかった。内部には土が詰まっていたが，底面から4cmほど浮いた位置とさらにその上4cmほどの位置の器壁に接して，大観通宝（1107年初鋳）がそれぞれ1点ずつ，ほぼ水平な状態で出土している。出土時点ですでに上半部は無く，周囲や内部から出土した少量の破片にもそうした部位はみられないことから，当初より下半部のみの状態であったと判断できる。調査区内で銭貨の出土数がきわめて少ないなかで，銭種の同じ2点がまとまっていたという点からみて，何らかの埋納遺構であった可能性がある。

Ⅱ484は，瓦質の小型片口鉢で，見込みに花弁状暗文がある。炭素の吸着が不充分で色調は灰色を呈する。Ⅱ485は須恵器，Ⅱ486は灰釉系陶器の，法量をほぼ同じくする小皿で，底部に回転糸切り痕をもつ。Ⅱ487・Ⅱ488は灰釉系陶器椀。Ⅱ487は精良な胎土をもつ無高台の椀で，口縁部を箆先刺突により輪花とし，底部外面は回転ヘラ削りして仕上げる。一方Ⅱ488は砂粒混じりの粗い胎土で，断面逆台形を呈する丈の低い高台が貼り付けられる。内外面とも回転撫で調整で仕上げられ，見込み中央は磨滅して凹むことから，捏ね鉢的な使われ方をしたことがうかがえる。Ⅱ489～Ⅱ492はいずれも灰釉系陶器の皿。口縁の一部を片口状にするⅡ490は内面全面に，それ以外はおおむね見込みに朱の付着を認める。Ⅱ493も灰釉系陶器の底部で，高台畳付には籾圧痕がつく。回転糸切り痕を残すその内側に墨書の一端が残る。Ⅱ494は同安窯系，Ⅱ495は龍泉窯系の青磁椀。Ⅱ496・Ⅱ497はともに青白磁で，蓋とミニチュアの合子。Ⅱ498は白磁口禿の皿。

包含層出土土製品（Ⅱ522～Ⅱ532）　土器片を打ち欠き加工した円盤（Ⅱ522～Ⅱ529）は，土師器（Ⅱ522・Ⅱ523），東播系須恵器甕（Ⅱ524），産地不明の陶器（Ⅱ525・Ⅱ528），灰釉系陶器の天目（Ⅱ527），白磁底部（Ⅱ529）と素材はさまざまであり，大きさも2～6㎝の間でまとまらない。土錘（Ⅱ530・Ⅱ531）は，ともに土師質の製品で，淡赤褐色を呈する。Ⅱ530は端面を面取りし，5㎜余りの孔をもつが，Ⅱ531は孔の径が2㎜程度しかなく，端部も先細りの形状である。動物頭部とみられる土製品は（Ⅱ532），手づくねの四角柱状製品の一端を斜めにすることで顔面とし，棒状具の刺突により目を造出する。何らかの容器に付属していた取っ手やつまみであった可能性もある。

包含層出土石製品（Ⅱ533～Ⅱ545）　Ⅱ533～Ⅱ537は滑石製で，Ⅱ533～Ⅱ535の石鍋破片は，いずれも鍔や割れ口に加工痕がある。Ⅱ536は四隅に穿孔しており，割れ口も平らに整えられている。Ⅱ535は口径2㎝あまりのミニチュア。Ⅱ537は方形の容器に対応する蓋の隅部分。内面側に煤が付着する。Ⅱ538～Ⅱ544は各種の砥石。Ⅱ539・Ⅱ541は凝灰岩，Ⅱ544は砂岩，ほかは頁岩製。Ⅱ538は黄褐色で厚手の菱形石材の各面に擦過痕がみられる。Ⅱ542・Ⅱ543は，黄白色の目の細かい軟質の石材で，いわゆる「鳴滝石」と呼ばれて仕上げ砥として流通しているものに相当しよう。この種の砥石が調査区内ではもっとも目立っている。また，それぞれ厚みは異なるが，Ⅱ542～Ⅱ544は側面に切断時の擦り切り痕を残しており，製品本来の幅（3㎝強≒1寸）を保っているといえる。広島県草戸千軒町遺跡の報告では，このサイズを砥石流通時の規格とする見解があり〔福島1996〕，今回もそれと大きく違わない結果といえる。Ⅱ545は硯の破片。

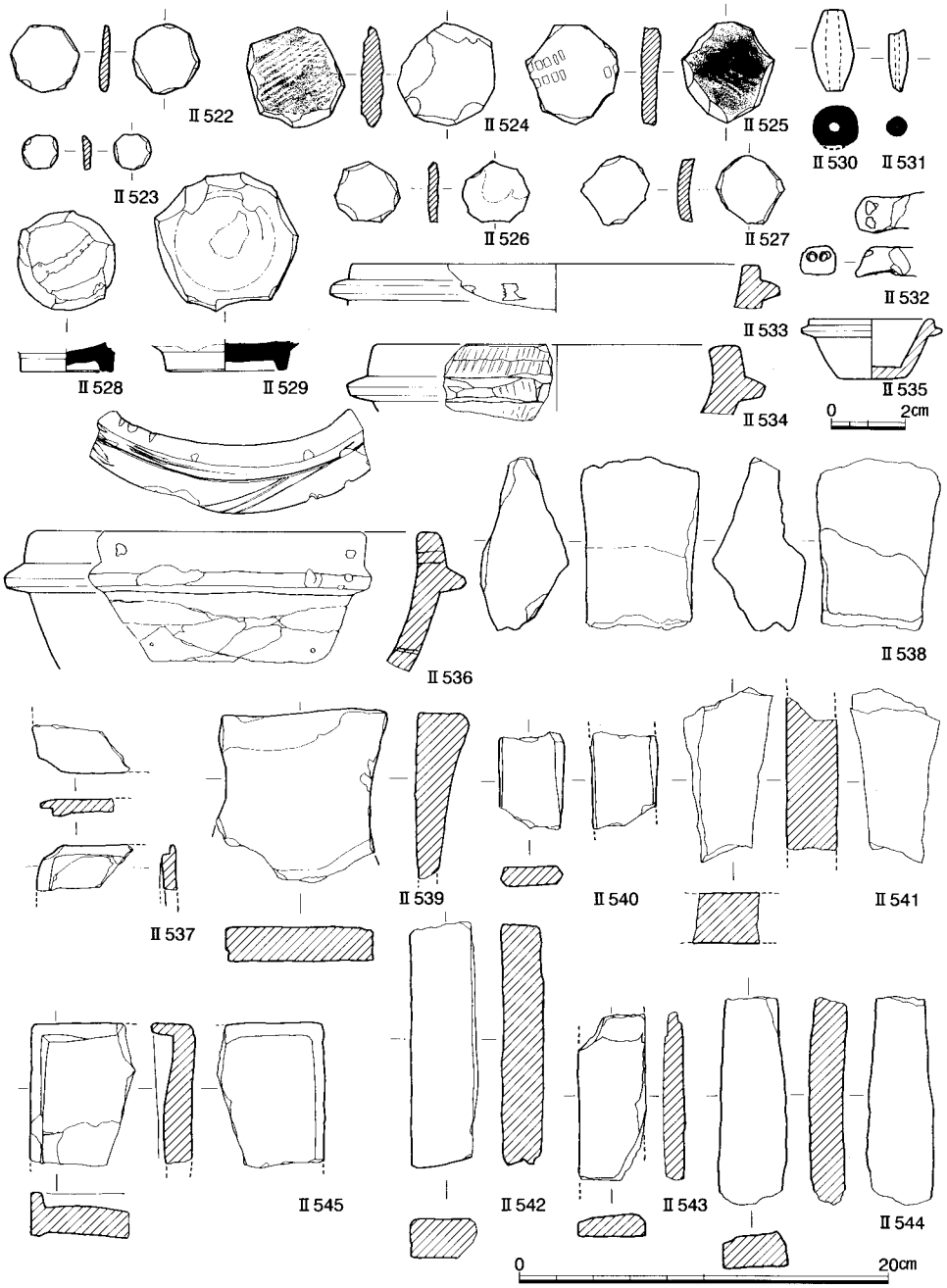


図32 土製品（Ⅱ522～Ⅱ526・Ⅱ529～Ⅱ532茶褐色土出土，Ⅱ527・Ⅱ528黄灰色土出土），石製品（Ⅱ533～Ⅱ543茶褐色土出土，Ⅱ544暗黄灰色土出土，Ⅱ545黄灰色土出土）　Ⅱ535は縮尺1/2

鉄製品（Ⅱ546～Ⅱ557）　今回は，釘類を中心に多くの鉄製品ならびに鉄滓が出土している。ほとんどは断片となっており，比較的残りがよいものも錆により本来の形状がうかがいがたい。X線透過によりある程度形状が判明したものを中心に示す。Ⅱ546～Ⅱ550は刀形刃物。Ⅱ546は刃部長が25.1㎝，茎は末端を欠くが9.4㎝残り，中心に目釘穴がある。全長35㎝前後の腰刀を想定できよう。Ⅱ547はこれより一回り小さいサイズとみられる。Ⅱ548以下は，いずれも刃部の多くを欠いているが，幅が小さくなっており，刀子状の小刀であったろう。Ⅱ551は，六葉の花弁状を呈する板状製品。中央に釘穴をもつことから，柱の釘隠などを構成する金具であったとみられる。Ⅱ552は三角形の板状製品で，厚さ８㎜と分厚い。用途不明。Ⅱ553・Ⅱ554は扉に付属する掛け金や留め金などの金具。Ⅱ555・Ⅱ556は釘。断面方形で長さ15㎝前後になると思われる。ともに井戸埋土の下層から出土し，枠板などの構造物に使われていたものだろう。釘本体は腐食して鉄分が沈着した周囲の木質のみ残り，内部は空洞。Ⅱ557は枠状の青銅製品で，断面方形で鍵形に曲がる部分が残る。表面に金箔の付着が認められる。仏具や刀装具を構成するものだろう。

焼土塊（図版13，Ⅱ558～Ⅱ572）　厚い板状の土塊で，最大で７～８㎝四方程度の大きさに割れている。石英粒を多量に含む粗い胎土で，赤褐色や燈色を呈し，粗悪な煉瓦といった質感である。片面は平らないしごく僅かな湾曲をもちながら表面は滑らかで，もう片面は，幅２㎝高さ１㎝前後のタガ状の突起あるいは溝状の凹みのみられるものが多く，表面に木目の圧痕が認められる。厚さは，こうした凹凸以外の部分で1.8㎝および2.3㎝をはかるものが多い。側面は，平滑に仕上げる例と木目圧痕のある例の双方がある。

以上は，調査区西北の茶褐色土中に層を成し，井戸SE6埋土中にも細片が密集していた。ここではそれらのうち，特徴的なものを選択している。仔細にみると特徴は均質ではなく，例えばⅡ560は色調が灰褐色に近く，他のものと焼成が異なる。またⅡ567やⅡ568はやや薄手で，タガ状の突起部分は，幅の狭い紐状となっている。しかし，いずれも木目圧痕があるという点では共通する。また胎土中には少量スサが混じっていたようで，割れ口には藁の圧痕も観察される。こうした痕跡から，算木のような板材を交互に組みあげた構造物をスサ入り粘土で覆ったものが，焼成されて圧痕のみが残った，と推測される。

同種の焼土塊の出土事例については，本調査区の南約70ｍの143地点で，調査区北東壁際で茶褐色土に多量の焼壁片が含まれていると報告されている。同調査区では，それと地点を違えて梵鐘鋳造遺構や鋳型集積遺構が見つかっており，炉壁や鋳型は今回の焼土塊と特徴が異なる。また，南1200ｍの左京区仁王門通新高倉東入所在の本正寺境内で，京都市

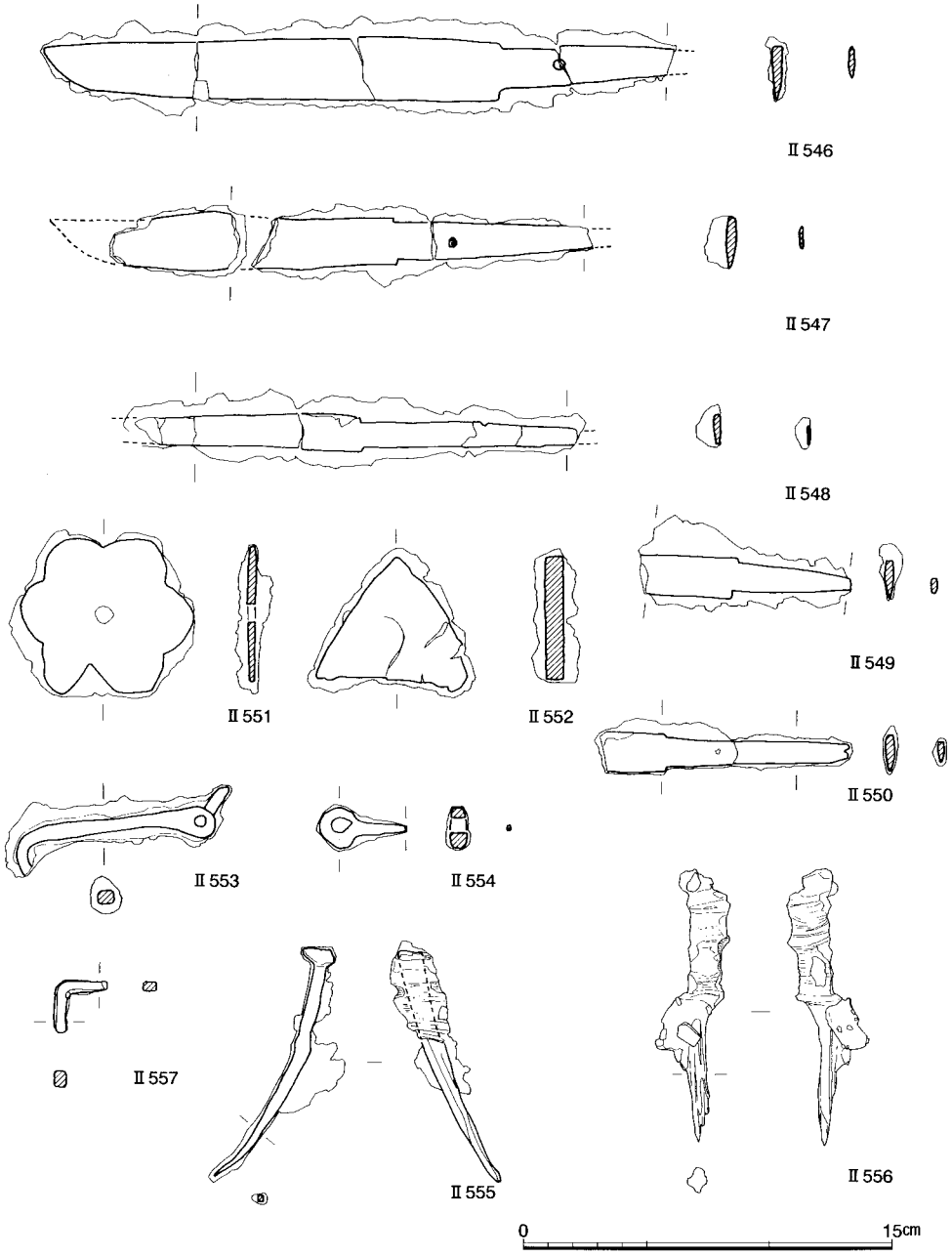


図33 鉄製品（Ⅱ546・Ⅱ547・Ⅱ549～Ⅱ552・Ⅱ554茶褐色土出土，Ⅱ548・Ⅱ553SK5 出土，Ⅱ555SE6 出土，Ⅱ556SE17 出土），青銅製品（Ⅱ557SK15 出土） 縮尺1/3

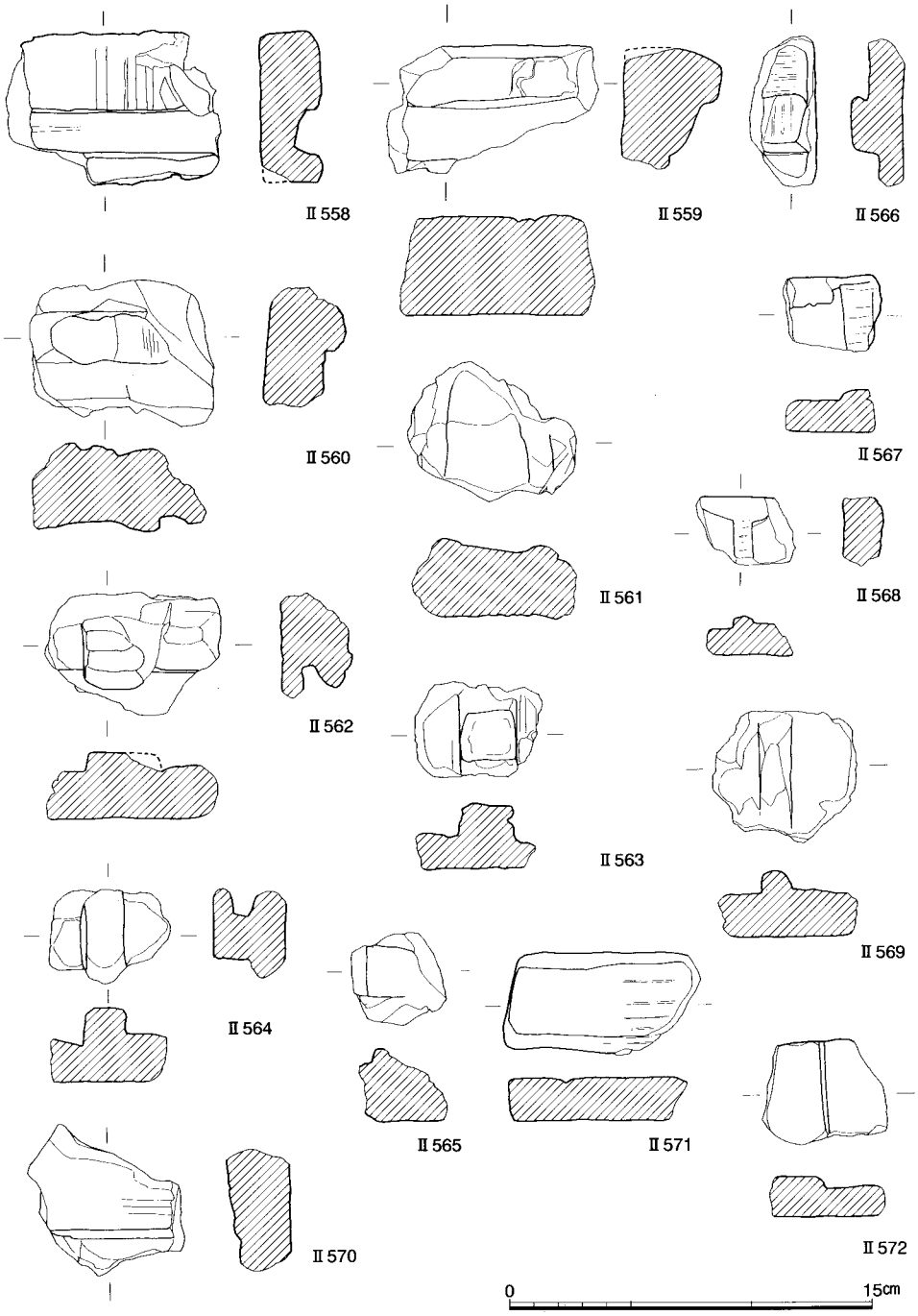


図34 焼土塊（Ⅱ558～Ⅱ572茶褐色土出土） 縮尺1/3

埋蔵文化財調査センターによる試掘調査の際，12世紀前半に比定される黒色炭層中より大量に出土し，鋳型片として報告されている〔馬瀬1999〕。

今回の例を土製鋳型と認定する事は，真土や鉱滓の付着が無く，既出の鋳型類とも特徴が異なる点から，留保される。一方，焼けた壁材とみた場合，スサなどの夾雑物が既知のものより少なく，また板状で側面を有するものがあるという形状が，説明しにくい。調査区一帯が鋳造活動に関係する空間である可能性は高く，鋳型本体では無いとしても，鋳造や鍛冶にともなう小規模な施設や構造物の部材であった，と想定しておきたい。

5　中世の瓦

中世の井戸 SE6 からまとまって出土したほか，瓦溜 SX7，井戸 SE21 からも比較的多く出土している。以下，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・熨斗瓦と平瓦の順で示し，その後それらに関連する箆記号・刻印に関してまとめて報告する。また，SE6 出土瓦に関しては隅数を計測しており，最後にその結果をもとづいた考察を加える。

(1) 軒丸瓦（図版14，図35・36，表８）

総計73点（型式不明含む）を確認できた。出土点数の内訳は表８を参照されたい。

主体は三ツ巴文で，頭部が巻き込む方向でＡ：左回り，Ｂ：右回りとし，笵の異なるもので細別する。残りが悪く細別を決しがたいものはそれぞれ AX，BX とする。焼成は，黒色・黒灰色の軟質のものがほとんどだが，青灰色や黄灰色のものも散見される。なお，DKM は大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群の軒丸瓦分類〔上原1997〕，KCM は，総合人間学部構

表８　軒丸瓦の遺構別出土点数

種類／遺構	SE６	SX7	SE21	中世遺構	茶褐色土	上層混入	種類別計
巴Ａ１	9		2	1	1		13
巴Ａ２	3	2			3		8
巴Ａ３	1		2	1			4
巴ＡＸ	4			2	1	1	8
巴Ｂ１	1	1		2		1	5
巴Ｂ２	1		1	2	4		8
巴ＢＸ	2	3	2	2		2	11
巴Ｃ	1					1	2
蓮華Ａ１	1						1
蓮華Ａ２	1	1		1			3
菊花文				1		1	2
その他					1		1
文様不明	4			1		2	7
遺構別計	28	7	7	13	10	8	73

内 AR25 区出土軒丸瓦の分類〔伊藤2000〕である。

巴A1（Ⅱ573・Ⅱ574）　巴の頭部が互いにかなり近接する。ただし，瓦当中央部が押さえつけられて凹んでいるため，文様のその部分はつぶれてかなり見にくくなっている。全形が復元できたⅡ573によると，全長22.6㎝，筒部長18.9㎝，玉縁長3.74㎝をはかる。瓦当の裏面は撫で，側面は撫でのみと，軽い削りののち撫でていることがわかるもの，の双方がある。丸瓦部の外面は縄叩きがすり消し不十分で残り，×形の箆記号が左下隅にある。側面は面取り風の削り，内面は細かな布目痕がのこる。玉縁の外面は撫で調整。大覚寺御所跡では DKM12C，AR25 区 KCM22Cc に相当する。

巴A2（Ⅱ575）　A1 よりやや太めの巴で，頭部どうしも離れる。瓦当中央部が押さえにより凹んでいる特徴は A1 と共通する。瓦当付近の筒部外面は縦位に軽く削っている。大覚寺御所跡では DKM12A に相当する。AR25 区では KCM22Cb にモチーフは類似するが，明らかに異笵である。

以上の A1・A2 の個体すべてに共通する瓦当中央部の凹みには，布目の確認されるものがある。文様がつぶれているので，瓦当部分を製作後，丸瓦部との接合作業に際して押さえつけられてしまったとみられる。他遺跡でこうした痕跡は確認していない。

巴A3（Ⅱ576）　こぶりだが肉厚な巴文。中央部の凹みはない。瓦当の厚みがやや薄手になる。DKM12B に相当する。

巴B1（Ⅱ577）　巴の大きさは A1 と大差ないが，巻きが逆転し，頭部も離れる。DKM13B に相当する

巴B2（Ⅱ578）　巴が B1 より細く長く尾を引く。大覚寺御所跡第Ⅱ期にはない。

巴C（Ⅱ579）　外区に珠文帯を有する巴文瓦。出土は 2 点のみで，内区の残る例がないので一括する。

蓮華A1（Ⅱ580）　複弁八葉蓮華文で，中房に陽刻「十」を置き，外区に珠文帯と圏線を有する。

蓮華A2（Ⅱ581）　中房が「卍」に変わる以外は A1 に同じ。KCM20 に相当。

菊花文瓦（Ⅱ583）　外区に密な珠文帯をもつ。瓦当と丸瓦部の接合部は直角を成し，ともに厚手。丸瓦部の外面は縦の削り，内面は瓦当際のみ撫でて，ほかは布目が残る。瓦当裏面は削り後撫で。青灰色を呈して堅緻な焼成である。1 点は調査区西北部の SF3b を構成する灰褐色砂礫層中，もう 1 点は表土中に混入して出土しており，ともに茶褐色土よりも上の層準での確認ということになる。

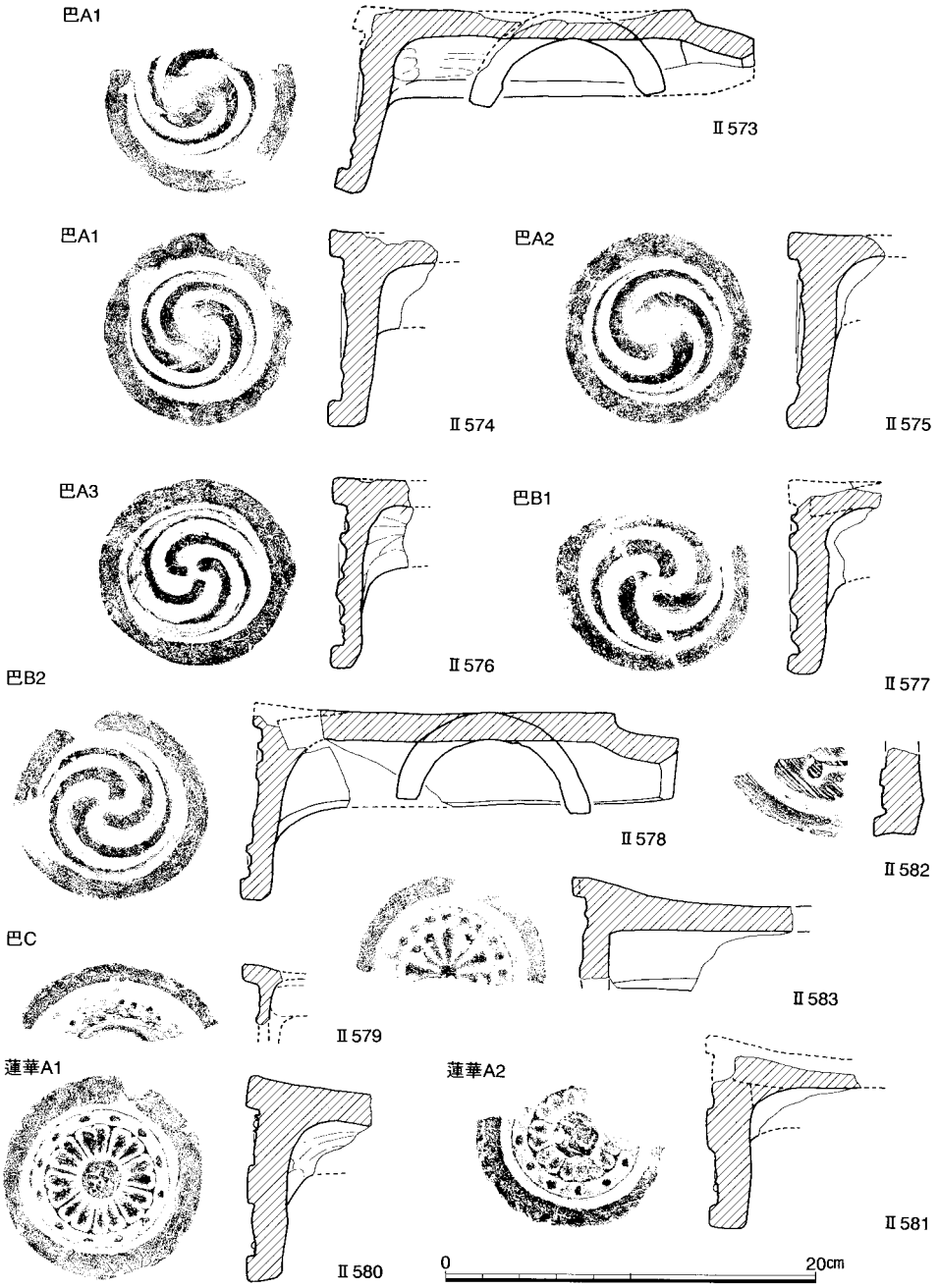


図35 軒丸瓦（Ⅱ573～Ⅱ575・Ⅱ577・Ⅱ579～Ⅱ581SE6 出土，Ⅱ576SE21 出土，Ⅱ578SE17 出土，Ⅱ582・Ⅱ583茶褐色土出土）

その他（Ⅱ582）　幅の狭い周縁をもち，こぶりの花弁が陽刻されている破片。笵の木目が顕著に残る。灰色で須恵質の堅緻な焼成である。

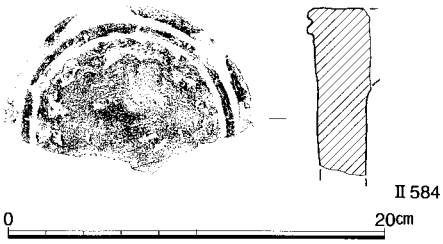


図36　軒丸瓦転用硯（Ⅱ584中世ピット出土）

軒丸瓦転用硯（Ⅱ584）　本来は平安時代中期～後期の軒丸瓦であったとみられるが，突線２条からなる周縁部のみ残り，内区の文様は完全に滅失して光沢をもつほどに平らになっている。状態から見て硯に転用されたと判断する。瓦当側面や裏側はヘラ削りが見られ，暗灰色を呈して焼成は堅緻。

(2) 軒平瓦（図版16・17，図37～図39，表９）

総計113点（型式不明含む）を確認できた。出土点数の内訳は表９を参照されたい。

主体は陰刻表現の剣頭文で，笵の違いでＡ～Ｋの11種を区別し，残りが悪く同定しがたいものをＸとした。このほかまったくモチーフの異なるふたつの唐草文Ａ・Ｂが一定量出土している。巴文が寡占状態で笵の多様性もない軒丸瓦とは様相を違えている。焼成はおおむね軒丸瓦に共通し，黒灰色や暗灰色の軟質のものが中心となるが，唐草Ａの胎土は赤褐色を呈する。また，唐草Ｂは灰色で焼成堅緻で，質感は菊花文軒丸瓦に近い。なお，DKH は大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群，KCH は総合人間学部構内 AR25 区での分類である。

表９　軒平瓦の遺構別出土点数

種類／遺構	SE６	SX7	SE21	中世遺構	茶褐色土	上層混入	種類別計
剣頭Ａ	12	3	2	6	5		28
剣頭Ｂ	9	1		1	4	2	17
剣頭Ｃ	2		1	1			4
剣頭Ｄ	3		2		3		8
剣頭Ｅ	2	2			1		5
剣頭Ｆ	1						1
剣頭Ｇ	1						1
剣頭Ｈ			1		1		2
剣頭Ｉ		2			1		3
剣頭Ｊ					1		1
剣頭Ｋ					1		1
剣頭Ｘ	9				4		13
唐草Ａ		3	5	1	1		10
唐草Ｂ				3	5	2	10
その他				4		1	5
文様不明			1		3		4
遺構別計	39	11	12	16	30	5	113

剣頭A（Ⅱ585・Ⅱ586）　剣頭文のうち主体を占めるもので，幅の広い鎬をもった5個の剣頭が中心となり，両脇の隙間は縦に半截した剣頭が配されるもの。笵の打ち込みはいずれも浅い。Ⅱ586は全長17.9㎝，狭端幅15.2㎝をはかる。凸面の調整は基本的に撫でで，全面縦位方向に施したのち，中央付近を軽く横位方向に行う。また，瓦当側の二分の一程度は成形台へ押さえつけた際の痕跡と見られる凹凸が残るが，顎下面と頸部はしっかりと横位に撫でて仕上げられる。篦記号をもつ場合は，おおむね中央付近にある。凹面は細かな布目が残されるが，瓦当上端付近は横位に撫でて仕上げ，一部それ以外の部分も横位に撫でて布目をすり消しているものがある。DKH14Iに相当する。

剣頭B（Ⅱ587・Ⅱ588）　8個の剣頭を均等に配するもの。Ⅱ587は，SE6井筒と周辺の茶褐色土から出土したものが接合し，瓦当幅15.4㎝。Ⅱ588は全長15.1㎝，瓦当幅は15.3㎝をはかる。凸面は，顎下端と頸部は横位に撫で，ほかは押さえつけの凹凸がそのまま残る。なおこの凹凸は，Ⅱ588でみると，狭端側が縦位に，それ以外の部分は横位の連続的な指頭圧痕によって構成されている。中央に篦記号をもつものがある。凹面側は細かな布目が残る。大覚寺御所跡に完存品はないが，DKH14Jに相当するとみられる。

剣頭C（Ⅱ589）　中間部がふくらみをもつ鎬の形態を特徴とする。完存品が無く剣頭の個数はわからないが，特徴が同一のDKH14Dは7個を配している。

剣頭D（Ⅱ590・Ⅱ591）　先端の鋭利な鎬をもつこぶりな剣頭が非常に特徴的。Ⅱ591は，全長16.7㎝，狭端幅14.4㎝。凸面は，顎下端と頸部を強く横撫でするほか，狭端部側の半分が縦位に撫で。指頭圧痕による凹凸は，瓦当側半分は斜位方向に連続しているほか，両側面と狭端部に沿うように残される。凹面の布目は瓦当上半まで及んでおり，ごく一部すり消されるのみでよく残る。DKH14B型式に相当する。

剣頭E（Ⅱ592・Ⅱ593）　鎬の先端が剣頭の先端部に接する程度に長いことを特徴とする。DKH14Aに相当する可能性がある。

剣頭F～K（Ⅱ594～Ⅱ599）　いずれも総出土点数が3点以下で，剣頭H（Ⅱ596）と剣頭Ⅰ（Ⅱ597）を除くと，残存部分が少なく笵の残りも良くない。確実な比定ではないが，剣頭HがDKH14N，剣頭ⅠがDKH14P，剣頭J（Ⅱ598）はDKH14Qに相当する可能性がある。

唐草A（Ⅱ600～Ⅱ603）　記号風にかなり崩れた均整唐草文。全容のわかるものはないが，「山」字状の中心飾りから両側に，蕨手が途切れながら展開するモチーフ。瓦当は小さく，上下の幅は2㎝程度しかない。Ⅱ600～Ⅱ602は瓦当面凹部にも布目が認められ

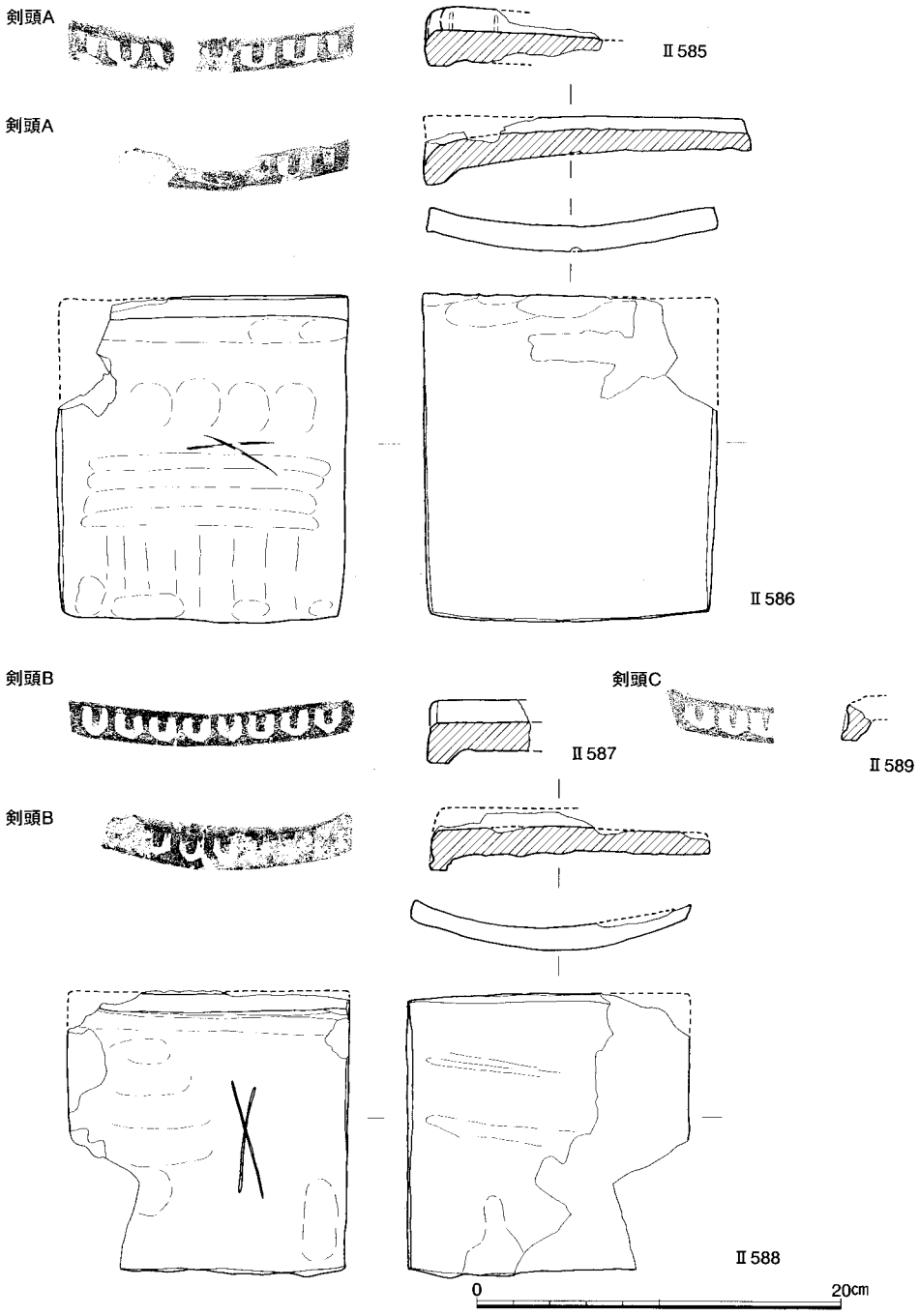


図37 軒平瓦(1)（Ⅱ585～Ⅱ589SE6 出土）

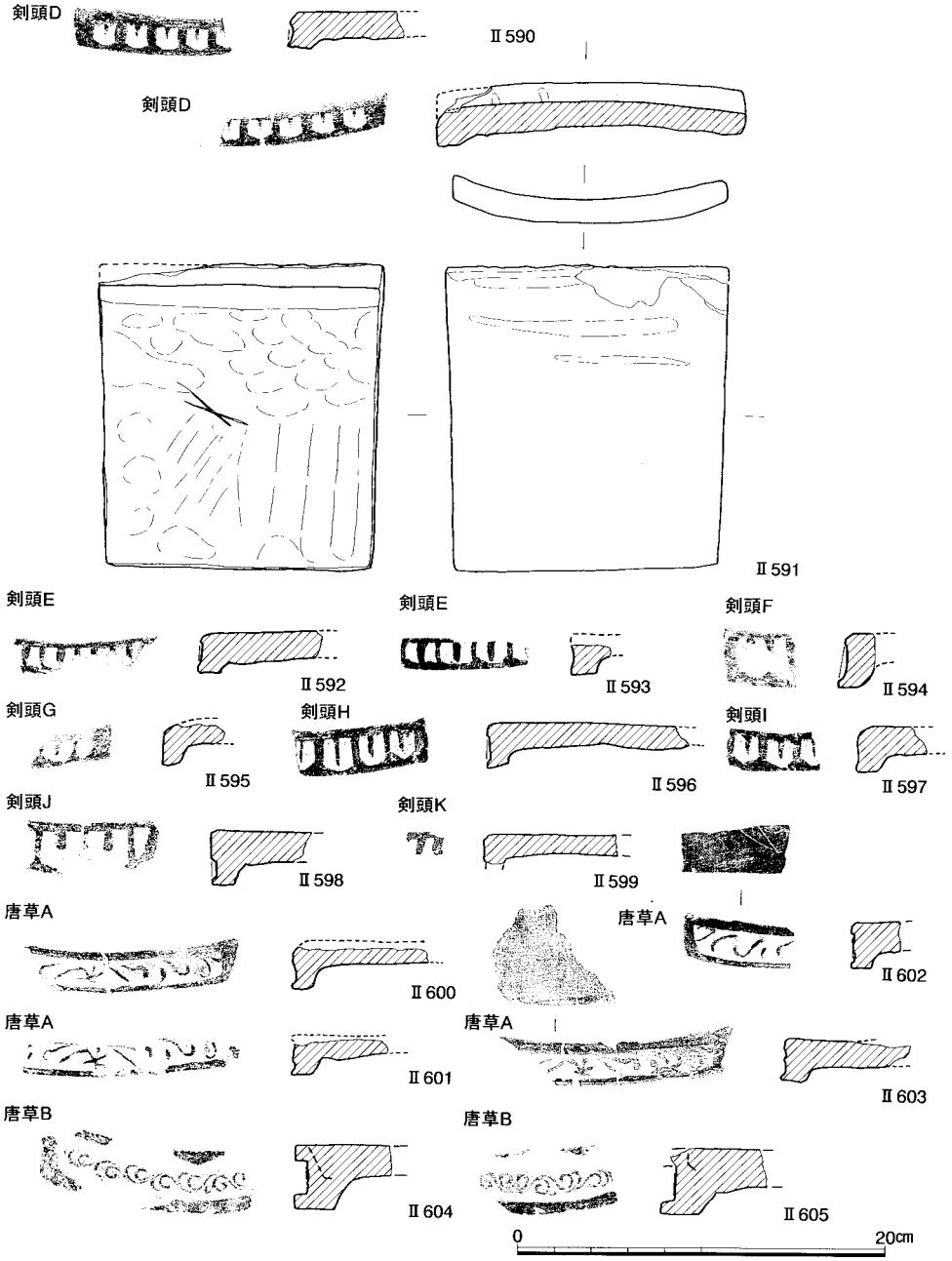


図38 軒平瓦(2)（Ⅱ590・Ⅱ596・Ⅱ600SE21 出土，Ⅱ591・Ⅱ592・Ⅱ594・595SE6 出土，Ⅱ593・Ⅱ597・Ⅱ601・Ⅱ603SK7 出土，Ⅱ598・Ⅱ599茶褐色土出土，Ⅱ602中世小ピット出土，Ⅱ604SK8 出土，Ⅱ605SK11 出土）

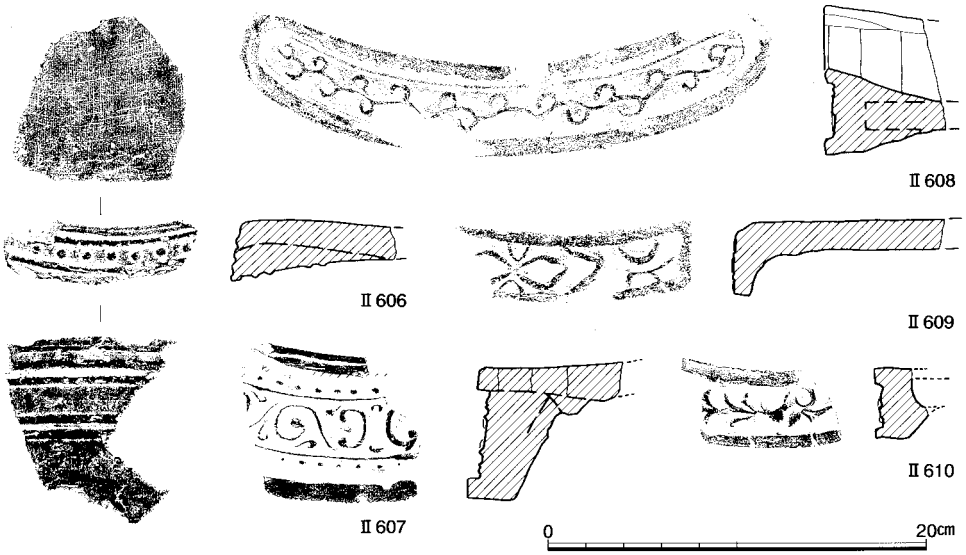


図39 軒平瓦(3)（Ⅱ606撹乱出土，Ⅱ607・Ⅱ608・Ⅱ610池状落込出土，Ⅱ609中世小ピット出土）

るが，Ⅱ603にはみられず，文様もやや肉厚で，異笵とみられる。いわゆる「完成された段階の折り曲げ作り」で〔上原1978〕，凸面・凹面の調整とも同時に出土している剣頭文軒平瓦と大差はないが，篦記号が凹面の布目上に施される点と，表面は黒色だが胎土が赤褐色を呈するものが多い点は，異なる特徴といえる。

唐草B（Ⅱ604・Ⅱ605）　C字対向形の下端がつながる中心飾りから左右に蕨手が6転する均整唐草文。幅広く面をもつ顎から頸部にかけては横撫で，凸面の頸部付近には一部横位の削り，凹面は布目がのこる。瓦当面は全体がざらついており，離れ砂を用いた可能性がある。断面にみる接合痕から，「瓦当貼付技法」による製作の可能性が高い。いずれも灰色系の色調で堅緻な焼成である。

その他の軒平瓦（Ⅱ606～Ⅱ610）　上記以外の種類はそれぞれ1点ずつしかしていないので，個別に説明する。Ⅱ606は連珠文で，瓦当は周縁をもたず，突線間に珠文を配するモチーフ。貼付により成形した曲線顎で，顎部にも2条一組の突線を2帯もつ。凹面は細かな布目が全面に残り，色調は黒灰色，胎土は灰白色を呈する。同文の瓦は，近接する医学部構内74地点で出土しており〔清水・吉野1981　Ⅰ54〕，伏見区深草所在のオウセンドウ廃寺やガンセンドウ廃寺で多数収集されている〔京都市埋文研編1996　図版59・60〕。平安中期までの年代観でとらえられている資料である。Ⅱ607は，C字背向の中心飾

りを置く均整唐草文。顎から頸部にかけてに縄叩きが残り，凹面は粗い布目が残る。平安後期の丹波系瓦屋の製品であろう。Ⅱ608は偏行唐草文軒平瓦。瓦当面には離れ砂が付着し，幅が28cmに及ぶ。成形は包込技法による。須恵質の堅緻な焼成で青灰色を呈し，凹面凸面ともに横位の撫で調整で仕上げられる。こうした特徴から，平安後期の播磨系軒平瓦である可能性が高い。Ⅱ609は，偏平な突線による幾何学文で，宝相華唐草文が変形したものであろう。瓦当は折曲技法による成形で，顎から頸部にかけては横位の撫で，凸面は縄叩き，凹面には布目が残る。軟質の焼成で燈褐色を呈する。同文例はないが，技法的に中央官衙系瓦屋第Ⅴ期の特徴を示し，平安後期の製品とみられる。Ⅱ610は，肉厚な花文を中心飾として鋭い主葉がのびる宝相華唐草文。瓦当裏には平瓦部の離脱痕が残り，接合技法による成形がうかがわれる。須恵質の堅緻な焼成で青灰色を呈する。Ⅱ608と同じく平安後期の播磨系軒平瓦であるかとみられる。

(3) 丸瓦（図版15，図40）

完存品はないが，筒部先端から玉縁端まで残るⅡ611・Ⅱ613でみると，全長24.4cmと28.9cm，筒部長21.7cmと24.5cm，筒部径10.7cmと10.4cm，玉縁長2.7cmと4.4cm。筒部凸面の調整は，先端部付近を横撫で，それ以外を縄叩きすり消し，玉縁部分は横撫で。凹面は細かな布目が残るが，一部の個体では，細い紐で布を綴じ合わせた部分の圧痕や，布目の下に横位の筋状の糸切り痕が観察できるものがある。側面や端面はヘラ削りで，筒部から玉縁にかけて直線的に推移するもの（Ⅱ613・Ⅱ614），斜めに屈曲するもの（Ⅱ611・Ⅱ612）の２種がある。筒部凸面玉縁寄りの中央や隅に各種の箆記号をもつものがある。これらの特徴は軒丸瓦と共有されるものであるが，Ⅱ613はやや異質であり，筒部外面の縄叩きが全くすり消されておらず，玉縁部分との間の段差も曖昧である。

(4) 平瓦・熨斗瓦（図版18，図41・42）

熨斗瓦とみるべきこぶりな一群があり（Ⅱ615～Ⅱ617），それより大きめのものを平瓦として扱う（Ⅱ618～Ⅱ622）。

熨斗瓦は大きさに規格性があり，Ⅱ615は全長17.8cm，広端幅11.3cm，狭端幅10.8cm，厚さ1.3cm，Ⅱ616は全長18.0cm，狭端幅10.9cm，厚さは1.2cmをはかる。外面の調整もほぼ同じで，凸面側は不定方向，凹面側は縦位方向に撫でを基本とし，ともに離れ砂が付着するほか，凸面には成型台の端部の圧痕が周縁部に確認できる。またⅡ616では，凸面側の中央付近にとくに指頭圧痕が集中している。端面や側面には，その方向と平行する筋状の糸切り痕の残るものが多い。これらの特徴から，凹型台一枚作りで成型したことは明ら

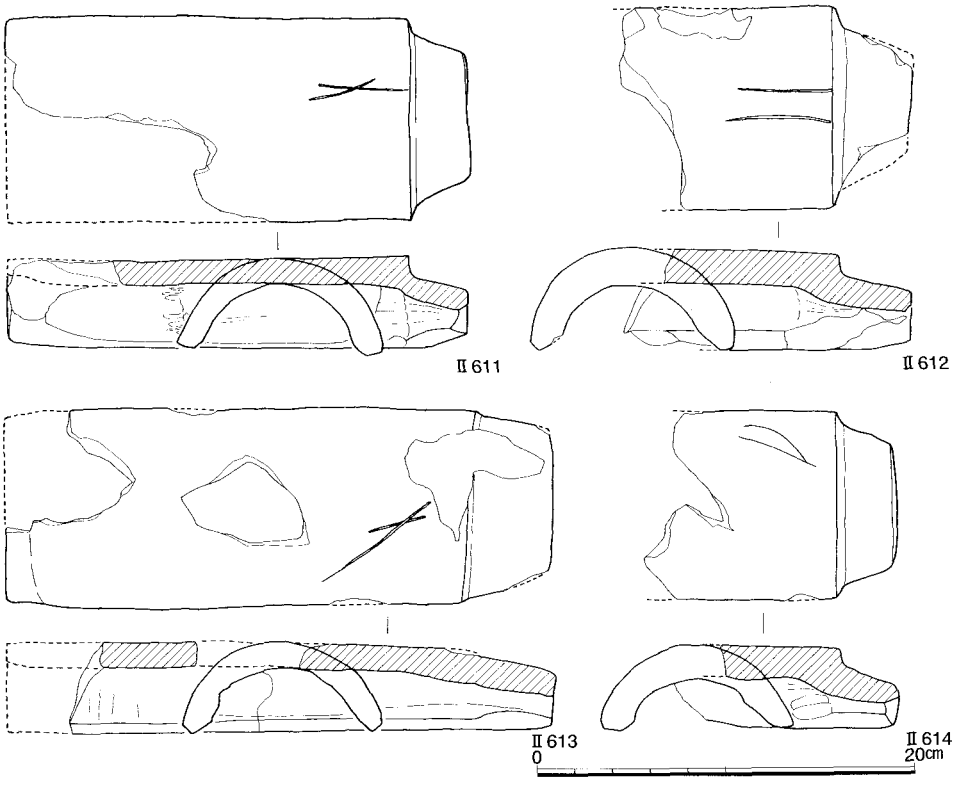


図40 丸瓦（Ⅱ611～Ⅱ614SE6出土）

かだが，Ⅱ615は凹面側周縁にも成型台の端部痕とみられる盛り上がりがあり，凸型台を二次成型や調整に使用している可能性も指摘しておきたい。なお，広端面中央付近に刻印あるいは篦記号をもつものがある。

これに対して，平瓦にはまとまりがないが，いずれも凸型や凹型の成型台による１枚作りとみられる。Ⅱ618は，全長21.8㎝，広端幅14.4㎝，厚さ1.4㎝。凸面は横位の糸切り痕上に縄叩き，凹面には横位の糸切り痕と縦位の撫で調整がみられ，離れ砂が付着する。広端面左隅に篦記号がある。Ⅱ619は，広端幅が15.4㎝以上あり，厚さ1.5㎝。凸面は縦位の撫で調整で離れ砂が付着し，凹面は斜位方向の糸切り痕と撫で調整で，やはり離れ砂が付着する。また成型台端部の圧痕が確認されるが，とくに凸面に顕著である。このように，熨斗瓦と共通する最終調整がされており，製作技法も同一であったかとみられる。Ⅱ620は全長27.5㎝，厚さ1.6㎝をはかる大型の平瓦で，長辺方向には上方に反る形である。凸面凹面ともに，縦位の撫で調整が丁寧に施され，離れ砂が付着するとともに，縁部には成

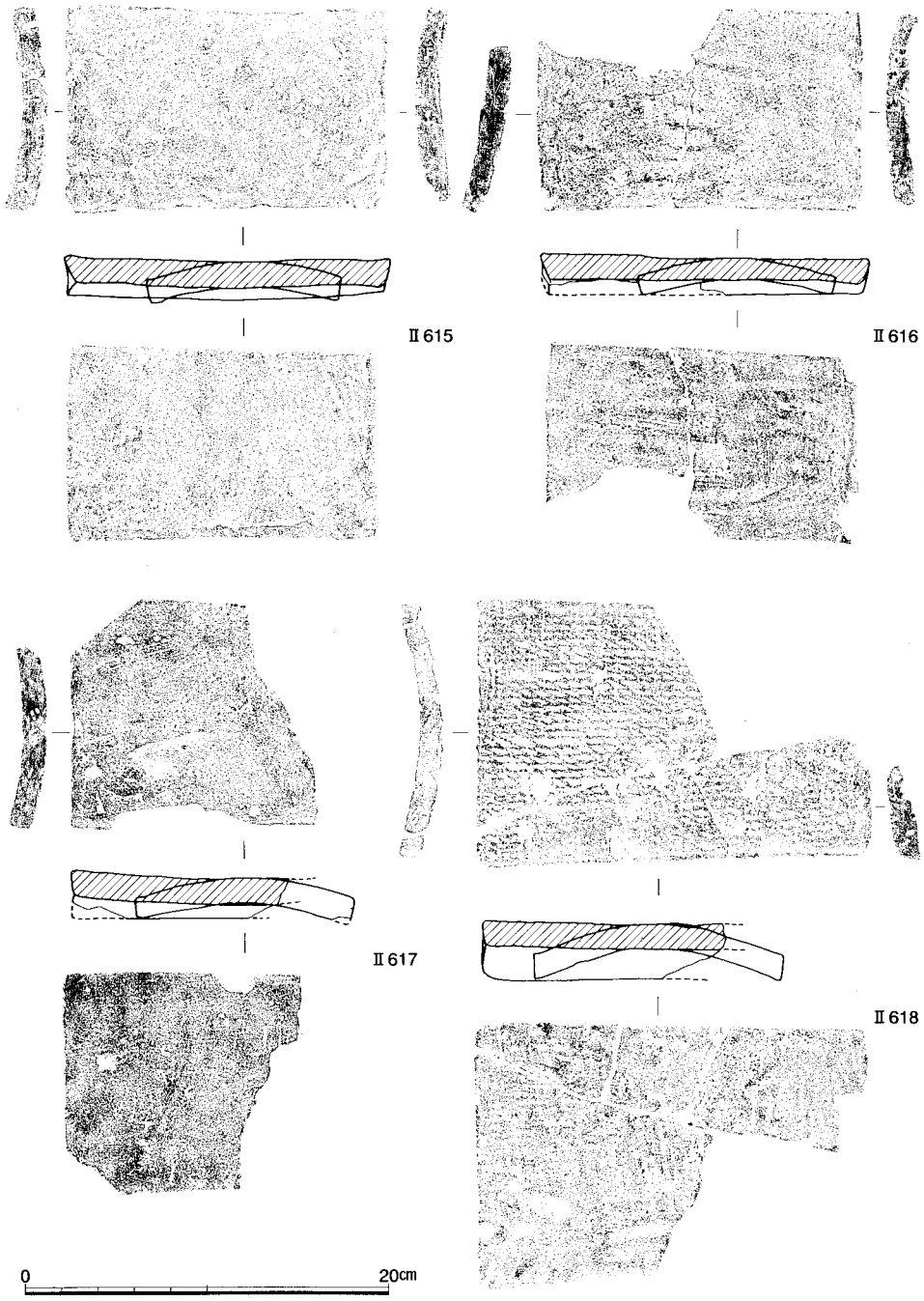


図41 熨斗瓦（Ⅱ615～Ⅱ617SE6 出土），平瓦(1)（Ⅱ618SE6 出土）

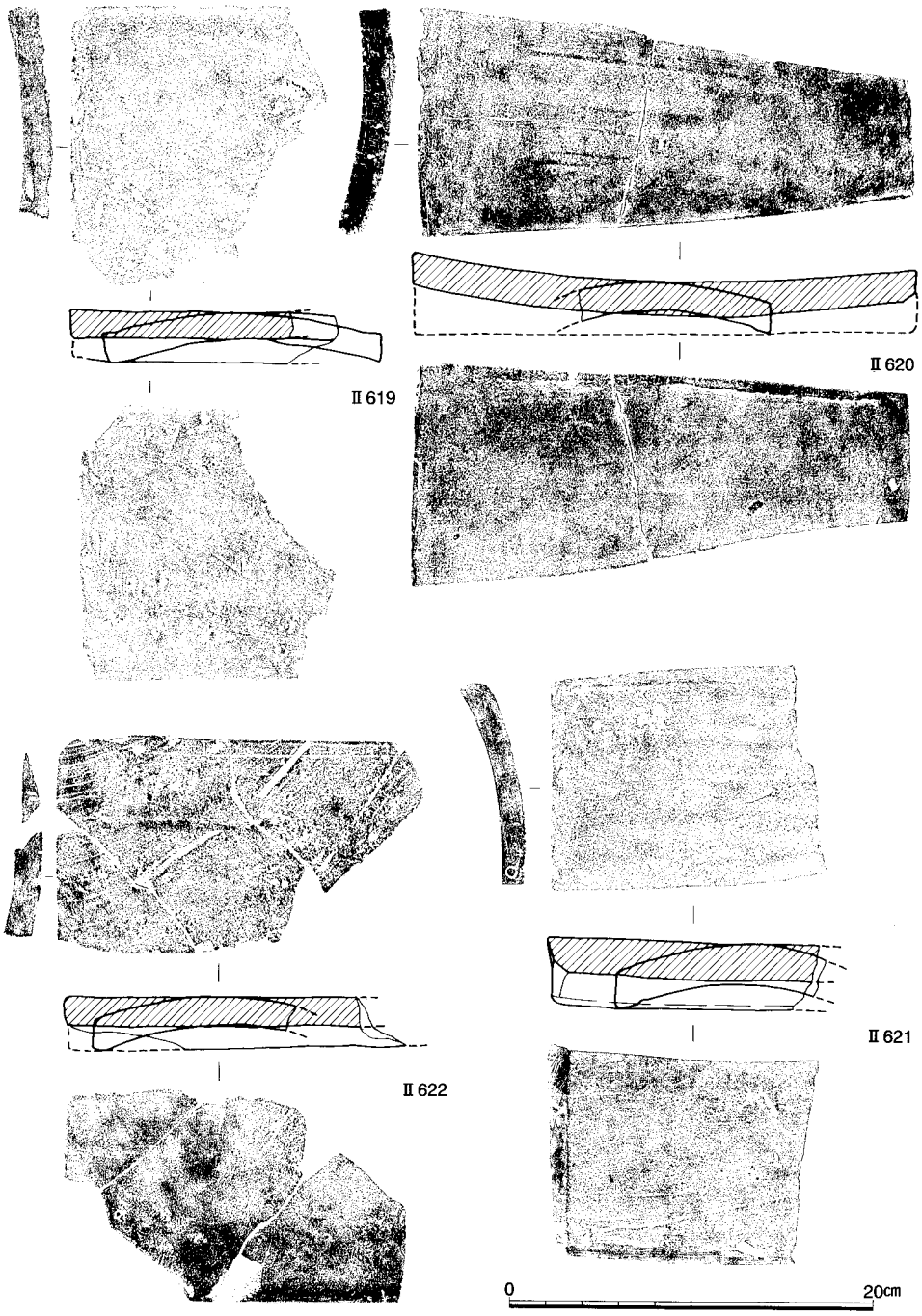


図42 平瓦(2)（Ⅱ619～Ⅱ621SE6 出土，Ⅱ622SK7 出土）

型台の当たり痕が認められる。端面はヘラ削り後撫でで，狭端部側は斜めに面取りされる。焼成は堅緻で青灰色を呈する。Ⅱ621はこれとほぼ同質な平瓦だが，長辺方向は反りがなく直線的。また，凹面には細かな布目があり，周縁部を撫で調整している。広端面中央に刻印をもつ。Ⅱ622は，凸面が斜位方向の糸切り痕と縦位の撫で調整，凹面が不定方向の撫で調整で，ともに離れ砂が付着する。広端面左隅に箆記号をもつ。

(5) 箆記号・刻印（図43，表10・11）

以上に報告してきた瓦にみられる刻印や箆記号をまとめて報告する。分類は，名称も含めて大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群におけるものを援用し，実態に応じて細分した（図43）。遺構別の出土点数は表10に，軒瓦の種類別点数は表11を参照されたい。

軒丸瓦・丸瓦の箆記号　いずれも筒部凸面側にあり，モチーフからⅠ～Ⅲ類の大別3種に，位置によりa・bに細分する。遺存が悪くてモチーフ全体が判別できないものは分類不能として一括した。Ⅰ類は，筒部中央末端から瓦当側に向けて長く延びる2本の直線。Ⅱ類はX字状に交差する2本の直線。瓦当面を下側にした場合，筒部玉縁寄りの右方になるものをⅡa類，左方になるものをⅡb類とする。大覚寺御所跡においては，刻線は浅く極細とされるが，今回の出土例のは力強く鋭い刻線が目立ち，特にⅡa類にその傾向が著しい。Ⅲ類は弧線と直線を組み合わせる逆D字状モチーフ。筒部玉縁寄りの右方にあるものをa類，左方にあるものをb類とするが，後者は出土していない。以上のなかで，今回はⅡa類の出土が圧倒的に多い。軒種類との対応については把握できる例が少なく，傾向をうかがうことはできなかった。大覚寺御所跡ではⅠ類が主体であり，Ⅱa類同士でも違いがみられることより，共通性は薄いといえる。AR25区出土品の場合は，ここでのⅢb類が主体であり，まったく接点をもたない。なお上記のほか，確実に箆記号を持たないと認定できるものが7点ある。

軒平瓦の箆記号　モチーフからⅠ～Ⅲ類の大別3種に区分する。それぞれ丸瓦の分類とほぼ対応する。Ⅰ類は，平瓦部凹面中央の瓦当付近から平行してまっすぐはしる2本の刻線。力強く鋭い。Ⅱ類はX字状に交差する2本の直線で，平瓦部凸面の中央近くに施す。基本は浅く細い刻線によるものだが，一部に，力強く鋭い刻線で，瓦当に直交する方向で大きく施すものがあり，Ⅱ'類として区別する。前者は丸瓦のⅡb類に，後者はⅡa類に雰囲気が近い。Ⅲ類は弧線と直線を組み合わせたモチーフ。平瓦部凹面瓦当近くの，瓦当を下に置いた場合の左寄りの位置に施すものをⅢa類とする。凸面側に施すものがⅢb類だが，今回は出土していない。なお，遺存度の悪い個体が多いため，記号を持たない

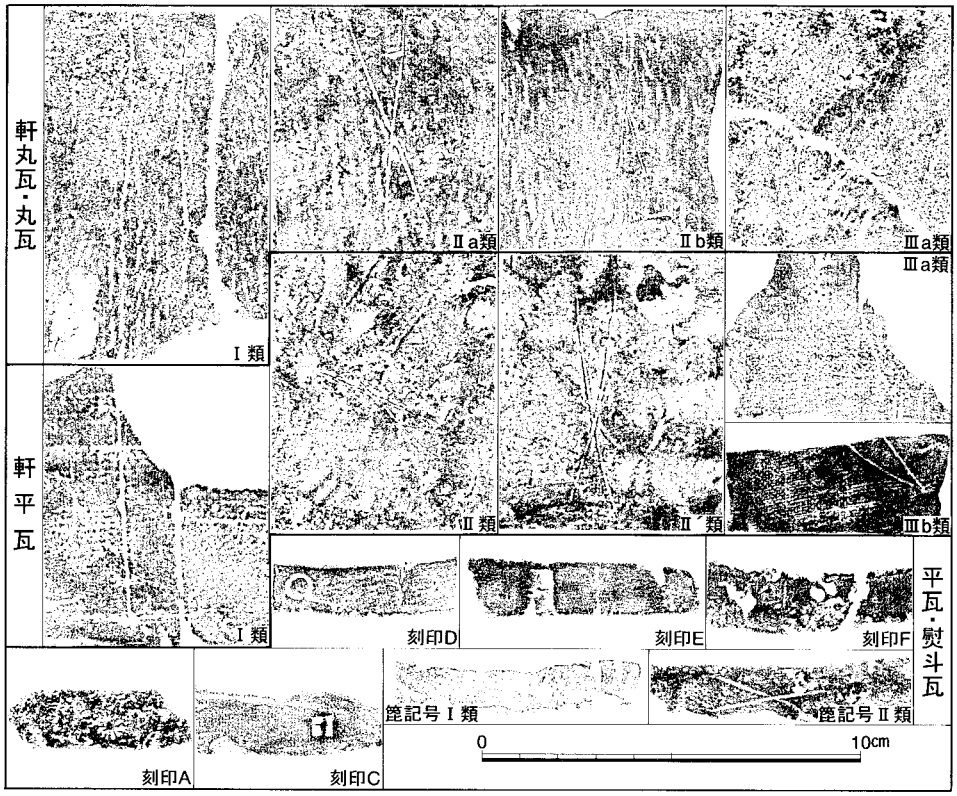


図43 箆記号・刻印一覧 縮尺1/2

表10 箆記号・刻印の遺構別出土点数

	種類／遺構	SE 6	SX 7	SE 21	中世遺構	茶褐色土	上層混入	種類別計
軒平	記号Ⅰ	2		1	1			4
	記号Ⅱ	12		2	1	1	1	17
	記号Ⅱ'	3						3
	記号Ⅲa		1		1			2
	記号Ⅲb							0
	分類不能	3						3
	遺構別計	20	1	3	3	1	1	29
平・熨斗	刻印A	1		1				2
	刻印B							0
	刻印C	7		1		2		10
	刻印D	1				2		3
	刻印E			1				1
	刻印F		1			1		2
	記号Ⅰ	2						2
	記号Ⅱ	4				2		6
	分類不能	1						1
	遺構別計	16	1	3	0	7	0	27
軒丸・丸	記号Ⅰ	2		1		2		5
	記号Ⅱa	23			5	5	1	34
	記号Ⅱb	4				3		7
	記号Ⅲa	4				2		6
	記号Ⅲb							0
	分類不能	3	1			3	4	11
	遺構別計	36	1	1	5	15	5	63

表11 箆記号の型式別出土点数

	種類／型式	剣頭A	剣頭B	剣頭C	剣頭D	剣頭J	唐草A	唐草B	不明他	計
軒平	記号Ⅰ	1	1						2	4
	記号Ⅱ	4	4		2	1			6	17
	記号Ⅱ'		1		1				1	3
	記号Ⅲa						2			2
	記号Ⅲb									0
	分類不能								3	3
	計	5	6	0	3	1	2	0	12	29

		巴A1	巴A2	巴A3	巴AX	巴B1	巴B2	巴BX	巴C	丸瓦	先端欠	計
軒丸・丸	記号Ⅰ						1				4	5
	記号Ⅱa	1					1	1		1	30	34
	記号Ⅱb									1	6	7
	記号Ⅲa										6	6
	記号Ⅲb											0
	分類不能										11	11
	計	1	0	0	0	0	2	1	0	2	57	63

と確実に認定できるものはない。以上のなかで，今回はⅡ類の出土が圧倒的に多く，剣頭A・Bに偏る傾向が認められる。Ⅲa類は唐草文軒平瓦でしか確認されていない。大覚寺御所跡ではⅠ類が最多であるものの，Ⅱ類・Ⅲa類も一定量出土している。AR25区出土品の場合は，ここでのⅢb類が主体となっており，やはりまったく接点がない。

平瓦・熨斗瓦の刻印と箆記号　軒瓦とは異なり，端面に刻印あるいは箆記号を施す。刻印A類は＊印のスタンプ。B類は対角線をもつ正方形のスタンプだが，今回は出土していない。C類は十字線をもつ正方形のスタンプ。D類は中空の管状のものを用いた○印のスタンプ。E類は幅1㎝の角材木口（あるいは正方形のスタンプか）を斜めに押しつけたのようなもの。F類は箆状工具の先端による刺突2ケで，円形から楕円形の小さな点が並ぶ。記号Ⅰ類は，ヘラによる鋭い刻みを2つ並べるもの。記号Ⅱ類はX字状に交差する2本の刻線で，細く浅い。軒瓦にみられるものと共通する。完形品は少ないため，確実に刻印ないし箆記号を持たないと認定できるものは1点のみであった。以上のうち，A類～C類は大覚寺御所跡での分類をそのまま用いているが，それ以外は大覚寺御所跡で出土をみていないもので，今回付け加えた。確認できる範囲で，刻印A類・C類と記号Ⅱ類は熨斗瓦に，それ以外は平瓦にともなうものである。また広端面の中央に施すものが多いが，記号Ⅰ類は右隅に寄せた位置に施す。量の多い刻印C類と記号Ⅱ類の熨斗瓦では，あくまで限られた資料からではあるが，微細な違いの傾向が観察される。すなわち前者の方がわずかに厚く大きめであり，雲母を交えた離れ砂の両面への付着が著しいのに対して，後者は指頭圧痕が残り気味で，離れ砂は凸面に目立つ。大覚寺御所跡では刻印A類とC類がほぼ等量みられ，記号を施すものは存在しなかった。刻印の一部は今回と共通するということになる。また，軒瓦と同じ記号の存在は，大覚寺御所跡においては想定できなかった平瓦・熨斗瓦も含めた同一工房での製作という体制が存在した可能性を示している。なお，AR25区出土品では刻印B類が中心であり，やはり今回の資料とは接点をもたない。

(6) 出土中世瓦の諸問題（表12）

SE6出土瓦の計測と屋根景観想定　井戸SE6からまとまって出土した瓦は，軒平瓦は剣頭文のみ，軒丸瓦も2点を除いてすべて巴文でまとまりがあり，井戸の埋め立てにあわせて一括廃棄された可能性が高い。それは，今回の調査区における中世Ⅲ期以降でⅣ期までの間，おおむね14世紀後半代のうちの出来事であったといえる。

同遺構出土瓦の残存隅数の計測した結果に基づいて，種類別点数を推計する（表12）。軒丸瓦・軒平瓦はともに22個体以上。平瓦と熨斗瓦は破片では区別が難しいが，広端部左

小　　結

表12　SE6 出土瓦の隅数

	先端左	先端右	玉縁左	玉縁右
軒　丸	22	17	2	3
丸	12	10	3	2
いずれか	0	0	54	52
計	34	27	59	57

	広端左	広端右	狭端左	狭端右
軒平	16	22	19	21
平・熨斗	52.5	50	51	51.5

隅＋狭端部右隅＝104点，広端部右隅＋狭端部左隅＝101点であるので，両者あわせて52個体以上，となる。丸瓦については筒部端面数から12個体以上は確実である。先端不明の玉縁の隅数最大値54から，軒丸瓦22点中で玉縁不明のものが19個体はあると考えて，54－19＝35個体程度，が可能性ある数値となる。

平瓦の量が少ないことから，総瓦葺の建物の可能性は無いとみて良い。丸瓦を軒丸瓦に重ねて葺くことは，枚数的には可能だが，その場合棟頂部の熨斗瓦の量をかなり低く見積もることになり，可能性は薄い。大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群での想定と同様に，丸瓦は棟頂部のみ積んでいたと考える方が自然である。ただし，軒平瓦で瓦当幅がわかるものは15.4㎝であり，これを11倍すると168.3㎝にしかならないため，１間分程度の建物甍棟や築地塀を想定すると，丸瓦・熨斗瓦が若干余ることになる。この種類別点数の偏りが，大覚寺とは異なる瓦の葺き方に由来するのか，あるいは資料の廃棄状況に由来するのかは，今回の資料のみでは判別は難しい。同種の資料による計測例を蓄積した後の課題としておきたい。

大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群・総合人間学部構内 AR25 区との関係　今回は，瓦笵・篦記号・刻印それぞれで，大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群に共通するものが認められた。ただし，主体を占めているものどうしが共通するのではなく，どちらかといえば大覚寺御所跡では非主体であるものが，今回の調査区では主体となる（またはその逆），という関係にある。一方 AR25 区の場合も，大覚寺御所跡に共通する部分をもつが，笵が共通すると認定できるものは剣頭文の１種のみに限られ，篦記号や刻印の共通性という点でも今回に及ばない。また，今回と AR25 区との間には，巴文のごく一部を除いて共通するものが無かった。それぞれの中世遺跡の担い手や性格を検討していくうえで，参考となろう。

なお，今回調査区に南接する41地点（AO18 区）においても，まとまった中世瓦の出土があり，大覚寺御所跡との共通性が指摘されている〔上原1995〕。今回，比較検討のため再整理を行い，本年報第Ⅱ部紀要において報告しているので参照されたい。

6　近世の遺跡

(1) 近世の遺構（図版４・５，図44）

この時代の遺物包含層である灰褐色土は，調査区全体の３割程度が残り，西北部一帯に面的にひろがるほか，南端と東端に筋状にある。遺構は，耕昨用の柵とみられる一辺が10～15cmの正方形や円形の小穴が全域で確認されたほか，西北部で段差にともなう石列および野壺，東南隅で野壺と路面およびそれにともなう側溝を確認した。一部に明らかに近代以降に下るものがあるほかは，すべて近世後半期の遺構である。

石列は，北から南へと30cm程度下る段差際に，土留め用とみられる小児頭大の石を並べたもので，延長10ｍあまりが検出された。段差上段側の灰褐色土は削平され，表土直下に黄灰色土が露出する。そこに径２ｍ深さ１ｍあまりの円形平底の土坑 SE3～SE5 が並んで確認された。特徴からみて野壺の痕跡と思われるが，木桶の痕跡は確認できず，出土遺物も中～近世の陶磁片が少量であった。これらから東へ離れて漆喰製の野壺 SE2 があるが，埋土から煉瓦や桟瓦が出土し，大学設置後に埋没したものとみられる。

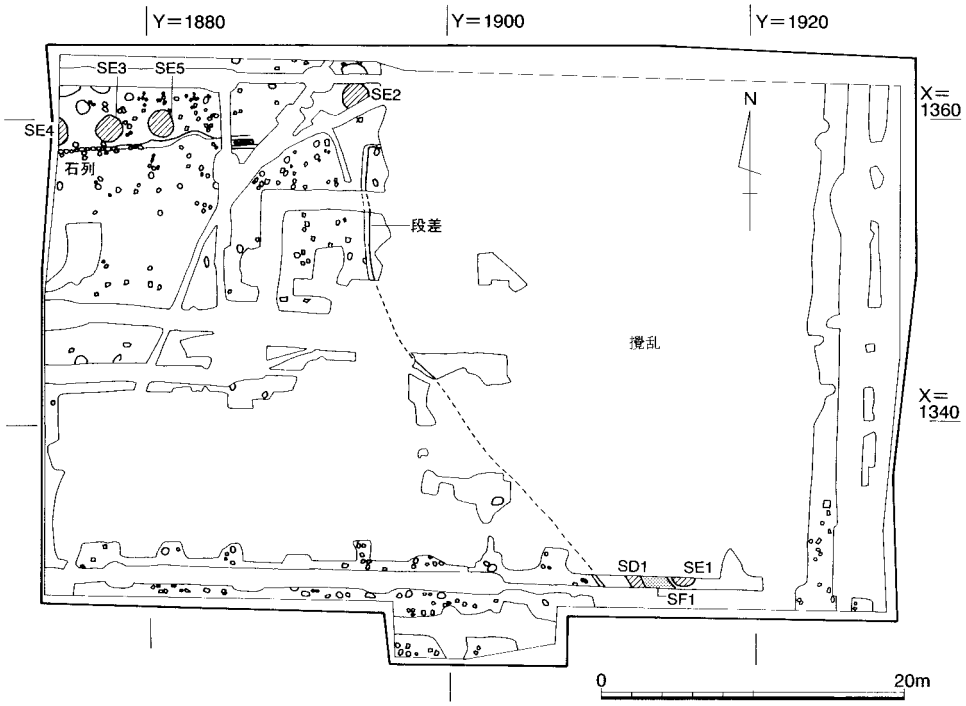


図44　近世の遺構（黄灰色土上面検出）　縮尺1/500

このほか，東から西へと20cm程度下る南北方向にはしる段差も確認でき，調査区東南隅では，その段差上段側に小礫を交えた幅２ｍほどの硬化面SF1と並行してはしる小溝SD1，漆喰製野壺SE1がみつかっている。硬化面は路面，小溝はそれにともなう側溝であろう。調査区西北部の段差際でも砂質土がやや硬化した面がひろがるが，遺構として範囲を明確に把握できない。さらに東側の攪乱として破壊されてしまった部分に，SF1やSD1の北側への延長が存在し，道沿いに野壺が設置されていたのだろう。

以上のうち，南北方向の段差や路面は，大学設置以前に存在した小字の野守と窪の境界にほぼ相当していることが確認できる（図40）。東西方向の段差と石列は，その内部の畑区画であったのだろう。大学の敷地となるまでは，扇状地末端の段差のひとつが土地の境界となって畦道がはしり，そうした地形環境を利用したゆるやかな棚田状の農地がひろがっていた景観を復原できる。これらが中世に由来するものであることは前節で述べた。

(2) 近世の遺物（図版18，図45）

この時代の出土遺物はきわめて少なく，遺構にともなう遺物は少量の破片のみである。ここでは灰褐色土出土遺物を中心に示す。いずれも近世後半期に比定できるものである。

Ⅱ623～Ⅱ627は土師器皿。Ⅱ623・Ⅱ624は見込みに圏線をもち，灰白色を呈する。口径12.0cmと11.0cm。Ⅱ625は口径8.2cmで，圏線をもつとみられるが欠出する。Ⅱ626は薄手の偏平な器形で，赤褐色を呈し，口径7.0cm。Ⅱ627は，口径5.0cm。赤褐色を呈する。

Ⅱ628は陶器灯明皿。底部付近は回転ヘラ削りし，それ以外を回転撫で調整。内面から口縁端部まで乳灰色の釉がかかる。口唇部には煤が付着する。Ⅱ629～Ⅱ633は陶器灯明受

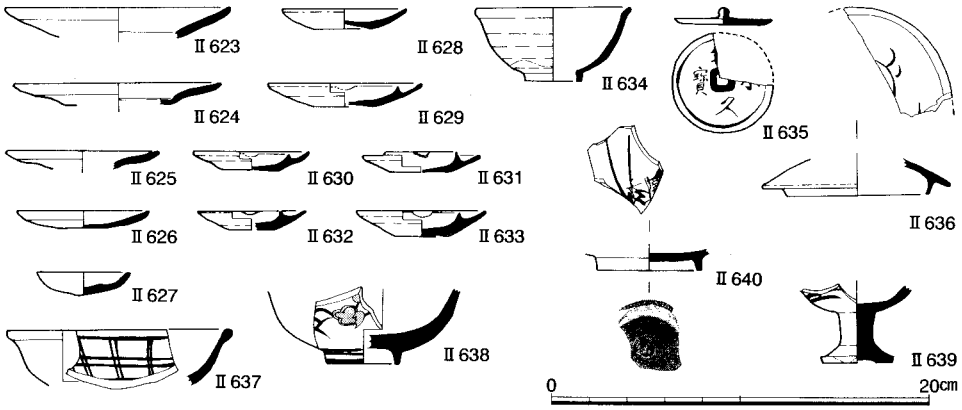


図45 灰褐色土出土遺物（Ⅱ623～Ⅱ626土師器，Ⅱ628～Ⅱ637陶器，Ⅱ637～Ⅱ639染付），攪乱出土遺物（Ⅱ640陶器）

皿。Ⅱ629は口径8.2cmとやや大きく，それ以外は6cm前後。いずれも底部付近を回転ヘラ削り調整，それ以外が回転撫で調整。内面から口縁端部まで施釉される。Ⅱ631は灰色の胎土で焼成堅緻，釉調は灰緑色だが，それ以外は白色軟質の胎土で釉調は淡黄緑色を呈するものが多い。Ⅱ634は陶器小椀。底部付近のみ露胎で，口唇部に薄い錆釉，それ以外は淡濃緑色の釉。Ⅱ635は小さなつまみを有する陶器蓋で，内面に貨幣を模した墨書がある。Ⅱ636は内面にかえりをもつ陶器蓋。胎土は暗茶褐色で，外面は淡黄色に釉がけされ，蔓草状の文様が描かれる。Ⅱ637～Ⅱ639は磁器染付。Ⅱ637は口唇部が玉縁状にふくらむ小型の深皿。内面に格子状の文様をもつ。Ⅱ638はくらわんか手の椀。Ⅱ639は仏飯。いずれも残りが少なく文様の全体はわからない。

Ⅱ640は攪乱土から採集した椀の底部。白色の胎土で，内面に淡黄色の釉と濃紺の楼閣山水文がある。高台内面中央にごく浅く円形の削りを行い，かなり崩れた草書体「清水」の印銘をもつ。こうした特徴は，「肥前産の京焼風陶器」と呼ばれているものに該当する〔角谷1992〕。

7　小　　結

今回の調査では，中世各時期の遺構・遺物が大量に出土し，それを中世Ⅰ期～中世Ⅳ期に区分して報告した。以下簡単にまとめと課題を述べ，結びとしておきたい。

遺跡の性格　調査区において活動が開始されるのは，中世Ⅰ期とした13世紀前葉である。これは，医学部構内の既調査地点の成果とも合致している。一方で，調査区の北方約350mでは，12世紀末葉にさかのぼる溝と塀で囲まれた居館跡が見つかっており〔内田1998〕，また南方の病院構内一帯でも，12世紀代に遡る遺構は散発的に確認されている。したがって，調査区一帯は，周辺よりも一段階開発の開始が遅れる地区，と評価される。平安後期に開発が開始される鴨東白河における，権門の要請を契機とした宅地や寺域の開発ではなく，中世都市京都の拡大の一環として，多様な機能を果たした空間の発生と理解される。実際，調査区での活動が盛期を迎える中世Ⅱ期～中世Ⅲ期，13世紀後半から14世紀前半にかけては，鋳造関連の遺構と遺物が目立つほかに，砂取り穴とみられる不定形土坑，集石，土器溜など多様な遺構が展開する。甍棟の瓦葺建物ないし築地塀，瓦製相輪は，持仏堂などの宗教施設の存在も示唆するものであろう。

以上の遺構群は，中世Ⅳ期すなわち14世紀後半にはすべて廃絶して耕地化したものの，明治29年に医科大学敷地となるまで基本的な土地境界は継承されていたことが，敷地買収

時に作成された地籍図と対照することでよくわかる（図46）。中世初期に設定された土地境界が近代まで連綿と引き継がれてきたことが示されたのは，興味深い成果のひとつといえる。年代的にみて，南北朝期の争乱が遺構群廃絶の重要な契機と思われるが，東方の総合人間学部構内では，これより下る15世紀前半まで存続する遺構も多く，担い手の違いを反映するものであろう。その場合，藤原北家勧修寺流吉田氏の長者吉田定房の1337年における吉野退展が，おおむね時期を同じくする出来事として注目される。同一族の所領処分状〔中村直1941〕にみる「吉田」を医学部構内に求めることの傍証となろう。

遺物について　今回の調査では，中世の土器類と瓦が大量に出土した。土師器については多くの一括出土品を計測し，時期をおっての小型化や，灰白色の椀類の出現から普及に至る様相をとらえることができた。瓦については，巴文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦の組み合わせを中心とするもので，大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群とは若干の共通性をもつものの，総合

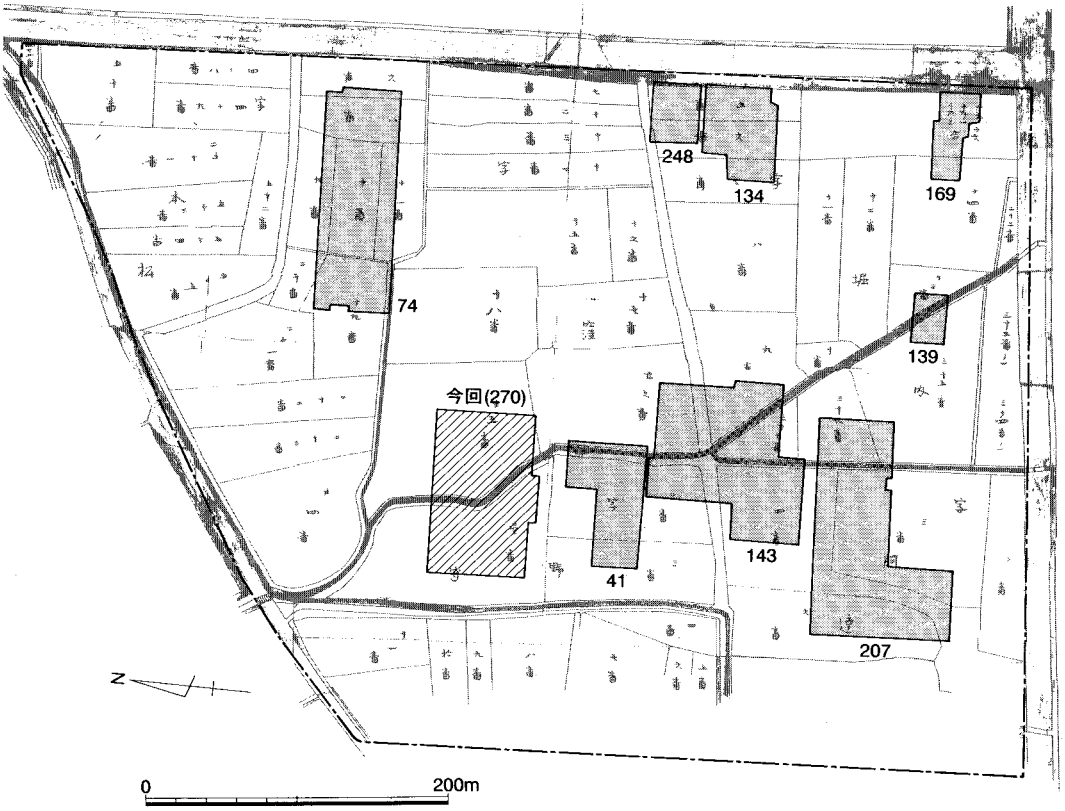


図46　医学部構内地籍図（明治29年ごろ）と発掘調査地点　縮尺1/5000

人間学部構内 AR25 区出土品とは，ほとんど接点をもたないことが判明した。三者の供給元工房の工人編成の違いがあることは確実であるが，それが発注時期の違いにより偶然生じたものなのか，あるいは発注者の性格や意図を反映するものであるのか，現状では峻別できない。同種の検討事例を増やして何らかのパターンの存在が把握できるようになれば，解決されるであろう。今後の課題としたい。また，SE6 からの一括出土品については隅数を計量して屋根景観の想定を試みた。残念ながら種類別の点数に若干偏りがあり，良好な結果を得られなかったけれども，今後こうした作業を積み重ねることからも，中世における景観の復原に迫りたい。

なお，土器以外では，多量の焼土塊の存在，鉄滓・石鍋・砥石・鉄製品の出土頻度の高さ，が注意される。鋳造や鍛冶に関連する作業空間が存在していた可能性は極めて高いと思われるが，残念ながら遺構はなく，頻度の高さも感覚的なもので統計的データによる裏付けはない。今後，攪乱範囲の少ない調査区を確保できた場合の課題としたい。

今回の出土遺物に関して，瓦類の整理分類には梶原義実氏に助力いただき，大覚寺御所跡第Ⅱ期瓦群との比較検討や瓦製相輪については上原真人氏にご教示を頂きました。また焼土塊に関しては馬瀬智光氏に意見をいただき，鉄製品のX線分析は森下章司氏のお世話になりました。末筆ながらお礼申し上げます。